

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The History of Agricultural Development in Mongolia : seeking a tradeoff between development and conservation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003896

モンゴルにおける農業開発史

——開発と保全の均衡を求めて——

小長谷 有 紀*

The History of Agricultural Development in Mongolia: seeking a tradeoff
between development and conservation

Yuki Konagaya

モンゴル国では、近年、農業開発のための政策が実施され、成果を挙げている。一方、農耕放棄地にはヨモギがはえてアレルギー源となり、人々に健康被害をもたらしている。したがって、農業をめぐる開発と保全のバランスをいかにとるかが今後の大きな課題となる。この目標に貢献するために、本稿で筆者は、モンゴル高原北部における農業に関する知見について、人々の知識と経験という観点から整理した。

知見は4領域から構成される。1つめは、考古学や歴史学の成果。とくに元朝時代は他の時代に比べて資料が多く、研究も進んでいるので、より詳しく記した。2つめは民族学が提供するいわゆる伝統的知識。用いたモンゴル語資料は日本語に翻訳して末尾に添付した。3つめは社会主義時代の人びとの経験。筆者自身が集めた口述史の資料を利用した。また、国営農場のリストの作成を試みた（モンゴル農牧省にもない）。4つめは統計。

これらの整理から得られることは多いが、結論は以下の通り。

1. 匈奴以来、モンゴル高原では外来の農民によって農業開発がしばしば行われた。とくにウイグル時代には積極的に都城が建設されたが、この時期は中世の温暖期に相当しており、有利な気象条件に恵まれていたと思われる。

2. モンゴル国西部ではオイラート・モンゴル人による農耕が発達していた。その技術は、牛による犁、灌漑、大麦など、休閑期があることなどの特徴がある。

3. 社会主義的近代化の過程で導入された農業は、伝統的な技術と異なる、大規模乾燥農法であった。作付面積が40万ヘクタールを超えると、規模の経

*国立民族学博物館民族社会研究部

Key Words : Mongolia, cultivation, development, traditional knowledge, equilibrium model

キーワード : モンゴル, 農業, 開発, TEK, 均衡モデル

済のメリットが得られるが、非常に投機的なビジネスとなり、社会的に安定的ではなくなる。

4. 歴史的に農業開発はそれぞれの時代の政策によって実施されてきたので、断続的であるにすぎず、カラコルム地区を除いて決して持続的ではない。にもかかわらず、現実には農業開発は行われ、牧畜の定着化を同時に促進しているのので、今後は、遊牧に適した非均衡モデルではなく、むしろ均衡モデルを適用した考察が必要になっている。

In Mongolia, the policy of agricultural development has recently achieved some successes. However, many agricultural fields have already been infested with the weed *Artemisia*, which is an allergen that has had negative impacts on the health of Mongolian citizens. Therefore, how to find a balance between agricultural development and nature conservation is a big issue for Mongolia. In this article the author has tried to contribute to meeting this challenge through compiling information and knowledge sources about the history of agricultural development from the viewpoint of people's experiences on the Mongolian plateau.

Knowledge about Mongolian agriculture is derived from and composed of four kinds of materials. The first of these are findings from history and archeology. The second is the so-called Traditional Ecological Knowledge (TEK) presented by ethnographers. Some basic materials of this kind written in Mongolian are translated into Japanese in the appendix. The third are the experiences of people during the process of socialist modernization. Oral histories collected by the author are used as source materials. In addition, a list and map of state farms during the socialist period are presented here in this paper for the first time. The fourth kind of material is statistical analysis.

From these materials we can gain much understanding, which can be summed up in four principal conclusions:

1. On the Mongolian plateau, from the Xiongnu period onwards, nomads have always tried to develop agriculture through relocating peasants by force. Especially during the Uighur period, a capital city was constructed in the center of the Mongolian plateau and agricultural fields were also developed. The climatic conditions of the medieval warming may have created advantages for agricultural development at that time.

2. In western Mongolia, many Oirat Mongol groups have traditionally engaged in cultivation and had knowledge of it. With irrigation systems that took water from the rivers, they ploughed with cattle, allowed for fallow periods, and cultivated mostly barley.

3. Under the socialist modernization program, modern agriculture was introduced to Mongolia. The modern techniques were quite different from traditional cultivation, consisting only of dry farming that was mechanized and

on a large scale. Statistically, although they achieved economies of scale when they harvested over 400,000 ha, that was speculative and not sustainable for the society.

4. Historically, agricultural development in Mongolia has been intermittent and sporadic according to the policies of the time, not continuous except in the Kara-korm (Khara-khorin) district. The situation nowadays in which cultivation is expanding and helping to make pastoralism more settled forces us to consider the equilibrium model rather than the disequilibrium model which fits with nomadic pastoralism.

- | | |
|---------------------------|---|
| 1 はじめに | 5 ポスト社会主義時代の農業生産 |
| 2 考古遺跡および文献史料に見る農業開発 | 5.1 国営農場解体のプロセス |
| 2.1 元朝時代までの農業開発 | 5.2 第3次アタル (2008～2010年) |
| 2.2 元朝時代の農業開発 | 5.3 統計から把握される成果と問題 |
| 2.3 長期的な気候変動との関係 | 6 今後の研究課題 |
| 3 民族誌における農耕に関する記述 | 参考資料 1. S. バダムハタン監修『モンゴル国民族学 (第2巻)』1996より農耕に関する抜粋の邦訳 |
| 3.1 民族学・言語学地図 (1979年刊行)より | 参考資料 2. 2009年12月11日の首相による国会報告「農牧業の発展」全文和訳 |
| 3.2 モンゴル西部における農耕 | 参考資料 3. 旧国営農場アタルの農場長スレンジャビン・タムジット氏へのインタビュー (2008年9月12日) |
| 3.3 モンゴル北部における農耕 | 参考資料 4. 新農業企業家 UO氏へのインタビュー (2008年9月12日) |
| 3.4 モンゴル南部における農耕 | |
| 4 社会主義的近代化としての農業開発 | |
| 4.1 第1次アタル (1959～1965年) | |
| 4.2 第2次アタル (1976～1988年) | |

1 はじめに

2009年12月11日、モンゴル国のS.バトボルド首相は国会で2009年の農牧業部門の成果について報告を行った¹⁾。

国家大会議議長、国会議員のみなさん、

モンゴル国政府は、国民の食糧自給、安全を保障する目的において、「未開墾地開拓第3次運動」——農業発展の国家プログラムを2年目の今年も成功裏に実施している。

「未開墾地開拓第3次運動」——農業発展の国家プログラムを実施し始める以前は、総耕地面積のうちわずか30%程度が作付され、農業生産で使用している機材は老朽化して技術的な要求を満たすことができなくなっていたことから、小麦需要のわずか24.9%、野菜の47.0%、ジャガイモの86.0%をそれぞれ国内で自給するにとどまっていた。

国家プログラムを実施した2年間に、政府から明確な政策・計画に従って以下の方策を実施した。その結果、上記の状況は根本的に変化してきている。……（中略）……

農業分野で実施された上記の方策の結果、2009年には39万2,900トンの穀類、そのうち38万9,100トンの小麦、15万6,000トンのジャガイモ、8万1,400トンの野菜をそれぞれ収穫し、年間に必要とされる小麦の97%、ジャガイモの100%、野菜の50%を国内生産の収穫で供給する可能性を得ることとなった。……（後略）……

ここで未開墾地開拓第3次運動と訳されているモンゴル語はアタリン・ゴラブ・ダヒ・アイン *atarin gurav dakhi ayin* で、直訳すると「アタルの3回目の旅」あるいは「アタルの第3次行」とでもいうべき表現である。アタルについては後に詳述するように、一般的には未経験を意味し、社会的には未開墾地を指し、政策的にはその開拓すなわち農業開発を指すため、本稿では以下、農業開発もしくは農地開拓と訳出する。

この第3次農業開発とは、2008年1月11日、S.バヤル前首相によって宣言された産業計画である。2009年は2年目にあたり、夏季の降水量に恵まれたため、作付面積および収穫量が増大した。そして、市場経済への移行期に急激に低下していた自給率が²⁾、冒頭に掲げた公式発表のように飛躍的に回復した（図1）。

2008年当時、農業（一般には牧畜も含まれるが、本稿では以下、とくに断りのない限り、いわゆる耕種農業 *cultivation* を指す）の推進に関して、モンゴルでは推進派と慎重派で世論が二分されていた。推進派とは、食糧安全保障の観点から、小麦等の自給率を高めるために、社会主義時代に放棄された農地の再開発を主張する立場であり、政府見解でもある。2007年、小麦の国際価格が高騰し、輸入先であった中国、ロシア、カザフスタンが輸出規制に踏み切ったため、モンゴルは食糧危機に直面した（小宮山 2009a: 6）。また2008年の年始に中国から輸入された飲料用アルコールが実



図1 小麦とジャガイモの自給率
出典：FAOSTAT

際には工業用メタノールであったために酒による死亡事故が勃発するなど、質の面でも輸入食品全般に関する安全性が問題となっていた（小長谷 2008）。量的にも質的にも食糧安全保障の観点から、自給率の向上を目的として農業の再開発が期待された。これに対して、慎重派とは、自然環境を保全するという観点から、適切な規模と適切な場所での耕作でなければならないとする立場である。かつて開拓されて現在使用されていない耕作放棄地にはヨモギがはびこり、そのために花粉アレルギーの被害をもたらししている。そのため、自然環境を保全するという観点から過度な農業開発は、民主化以降、土地の私有化と並んで、危険視されてきた。

農業開発に関してこのような賛否両論があるなかで、実際に「第3次アタル」は上述のような成果を収め、その結果、農業開発と環境保全の均衡を探る議論は解決を見ないまま滞っている。そこで本稿では、現在のモンゴル国の領域内（モンゴル高原北部）における農業開発史を概観することによって、農業をめぐる開発と自然環境の保全との今後の均衡を探るための一助としたい。

農業に限らず、またいづれの地域においても、開発と環境保全のトレードオフは、人類社会にとっての今日的課題である。この課題に対して文化人類学は、開発プロジェクトの評価を担当するなど実践的に開発人類学として貢献することができるほか、人びとの言説を含めてさまざまな現地資料を利用し、いわゆる TEK（Traditional Ecological Knowledge、伝統的な生態学的知識）や resilience（急激な環境変化、災害

や危機などに対する回復力)を明らかにして、基礎的な知識を形成することもできる。すでに TEK については、当該概念そのものに神話性ないし虚構性があるとさえ指摘されているけれども(大村 2002)、本稿では TEK のそうした構築主義的性格を認めよう。たとえば、モンゴルの場合、牧畜については研究例があるのに対して(例えば Fernandez-Gimenez 1993, 2000; 小長谷 1997; 風戸 2006 など)³⁾、農耕の持続的な実践については若干の言及(モンゴル高原全域の概要については Humphrey and Sneath 1999: 47; 実見例としては尾崎 2010: 144 など)を除いてこれまで等閑視されてきたことを念頭におき、知見をまず整理するところから始めたい。

モンゴル高原の農業開発に関する研究状況として、以下の2つの特徴が認められる。第1に、近年可能となった遺跡の実態調査と従来の文献資料の読解を統合した中世考古学が、農耕地跡についても著しい研究成果を挙げている(白石 2002; 村岡 2003 など)。ただし、それらの研究は場所の比定に関心を集中させるため、誰がどのようにいつまで従事したか、といった生業としての持続性についてはとりあえず関心外となりがちである。第2に、モンゴル高原の南部に相当する中国内蒙古自治区については、砂漠化などの環境劣化の一因として農業開発が指摘され、土地利用の転換をとともなう利用権の争奪が民族運動の原因となってきたという歴史的経緯があるため、しばしば容易に民族問題に置換されがちである(楊 1991; プレンサイン 2003 など)。こうした研究上の明示的な特徴は、その他の研究蓄積があまり活用されていない、という非明示的な特徴に通じる。具体的には次のような3つの資料群が存在しており、それらの活用を当面の課題として指摘したい。

第1に、社会主義的近代化を推進するにあたって、ソ連から派遣された科学者の指導のもとで多くの実地調査が行われ、それらに基づく研究蓄積があること。

第2に、近代国家の枠組みのもとで、モンゴル人の民族学者により多くの実地調査が行われ、それらに基づく研究蓄積があること。

第3に、社会主義的近代化を担う重要な分野として農業開発を実際に推進したモンゴル人たちの脳裏に、その記憶が蓄積されていること。

本稿では、こうした資料を利用するという課題にできるだけ取り組む。それにより、今後、土壌学や植生学など自然科学諸分野や、法学ないし法社会学などの社会科学諸分野と協業してゆくための準備が整うことになるだろう。

まず、考古学や歴史学がこれまで明らかにしてきた過去の農業に関する概略を示しておく。つぎに、近代国家の成立とともに現地の民族学が明らかにしてきた、いわゆる伝統的な農耕の姿を示す。そのうえで、社会主義のもとで実施された、近代的な農

業開発の実態を示す。社会主義的近代化としての農業開発については、それを牽引した指導者たちの口述史を用いる。それらは筆者らによるインタビューによって作成された資料である（小長谷編 2003, 2007a; Lkhagvasüren 2003; Lkhagvasüren and Konagaya 2007）。それらの資料の分析により、慣習の継続とは別に、新たに近代化の一部門として導入された農業開発が従来の農耕とどのように異なるかが具体的に明らかとなり、問題の所在も明確になるであろう。最後に、統計を用いて実践的な解の提示も試みたい。

2 考古学的遺跡および文献史料に見る農業開発

モンゴル国における農業開発についてまとめた研究を残しているのは B. ロロムジャブ Rolomjav である。彼は、1970 年代から 1980 年代にかけて、モンゴル科学アカデミー歴史学研究所に所属し、当該機関が発行する『歴史研究』において、農業に関して 3 篇の論文と 1 冊の書を著した。近代的な農業開発を推進するという政策上の要請に応じて、社会主義政権下での開発の成果を示すとともに、将来の可能性を示すことも求められていたであろうことは想像に難くない。

ロロムジャブは「モンゴル人の農耕の伝統から」で西モンゴルにおける諸集団の農耕慣習について概略し（Rolomjav 1976）, 「モンゴルの一地域における在来農耕の変遷と発展課題」では、そうした慣習を否定することなく、その未来可能性を示した（Rolomjav 1983）。「モンゴル人民共和国における農耕の発展に関するソ連学者の研究」（Rolomjav 1984）では 1920 年代から始まるソ連調査団の研究成果を概括し、最大の功績としてシュービンの研究『モンゴル人民共和国の農業』（Shubin 1953）を挙げている。そして後に、それらの内容に社会主義時代の政策史を大幅に加えて『モンゴル人民共和国の農業簡史』をまとめた（Rolomjav 1987）。本稿は基本的にこれら一連の著作に負うところが大きい。

ただし、ロロムジャブはその著書で、主として 20 世紀以降、すなわち社会主義的近代化が進む直前、いわゆる前近代以降を扱っており、また前近代の事例としてはもっぱら西モンゴルを扱っている。本稿でも、今後の農業を考えるうえでの連続性の観点から、あるいは非連続という対比性の観点から、やはりロロムジャブと同様に、20 世紀前半からという時間と、西モンゴルという空間という時空の偏りを採用することになろう。しかし、その偏りを相対化するためにできるだけ考察範囲を広げる⁴⁾。

2.1 元朝時代までの農業開発

元朝時代についてはモンゴル高原に関する文献記録が格段と豊富になり、また昨今の現地調査による成果も加わって情報が蓄積されている。そこで、それについては別に節を設けて詳しく述べ、まず、元朝時代までの農業開発について考古学および歴史学による知見を主要な集団ごとにまとめて記す。

匈奴までの農耕

モンゴル高原では、新石器時代に農耕が始まり、その後、青銅器時代に発達し、鉄器時代になると農耕はかなり発達した、と見られている（Dorj 1971: 85-87）。というのも、青銅器時代から鉄器時代初期にかけて、オブス県オラーンゴム市郊外のチャンドマニ山の墓からキビ類（小粒性 millet）の種子が見つかっており（Ser-Odjav 1977: 54）、さらにフブスグル県ツェツェルレグ郡（ソム sum と呼ばれる行政単位を本稿では便宜的に郡と訳しておく）テス川のもドトイトルゴイやボルガン県オルホン郡のパローンモゴイや（Tseveendorj 1976）、ホブド県エルデネブレン郡ホンギオ川のアラグチョロー（Ser-Odjav 1977: 61; Tseveendorj 1980）、バヤンホンゴル県バヤンリグ郡のビチグト（Ser-Odjav 1987）などの岩絵に、特別な道具で耕している人、1～2頭の牛による犁で耕している姿などが描かれているからである（図2および図3参照）。

匈奴の農耕

テュルク語系であると見なされている匈奴については、『史記匈奴伝』によれば、



図2 パローンモゴイの岩絵（Tseveendorj 1999: 157）

「水と草をもとめて転々と移動し、城郭や常住地・耕田の作業はない」(内田ほか 1971: 3)とある。一方、同資料により、漢人側からは「沢鹵(瀉鹵の誤か、アルカリ性土壌)で、[中国人の]居住は不可能である」(内田ほか 1971: 19)と見なされていたことが了解される。ただし、紀元前2世紀頃、匈奴が最大の版図を確保していたときには、楼蘭やホータンなどのオアシス都市が含まれるので定住農耕地も含まれることとなった。その際には、それらのオアシスで生産された穀類を匈奴が利用していた可能性は高い。というのも、以下のような話がよく知られているように、匈奴にとって穀類は重要な輸入品だったからである。

公主とともにその守役として匈奴へ派遣された中行説は、仕えた老上单于に対して漢の衣食に頼らないように諫める一方で、漢の使者に対しては「おもうに、ただ漢が匈奴に運び来るところのきぬ・まわた・米・こうじをば、その量の上で不足なく、その質の上でよくするだけのことぞ。……不足で且つ粗悪ならば、秋、穀物がみのるのをまて、騎馬にて汝らの農作物をば、走り廻りふみにじるまでのことよ」(内田ほか 1971: 23)と述べている。このように、贅沢品とともに穀類が輸入されており、その交易がままならないときには掠奪が行われた。ただし、掠奪の中心は、農産物よりもっぱら人と家畜であったことが知られている(護 1950: 7)。

こうした記述に基づいて一般に、匈奴自らは農耕に従事していなかったけれども、穀類を食する習慣を身につけ、掠奪してきた農民に農耕をさせるほか、单于に嫁した公主とともに官吏や家僕、親戚など多くの漢人たちが入来し、彼らが自分自身の食糧生産の必要から農耕に従事していた、と考えられている。

また『漢書匈奴伝』には、票騎将軍(霍去病)が紀元前119年、匈奴に勝利してか



図3 ビチグトの岩絵 (Dashinyam 1999: 32)

らは、黄河の北から今日の西寧まで、「所々に渠を通じて田を開き、田官・兵卒五、六万を配置し、次第に蚕食して、その地は匈奴の〔旧地〕以北にまで接した」（内田ほか 1971: 72）とある。すなわち、匈奴との境界付近で屯田開発が行われたのである。匈奴自身がモンゴル高原を南下して、定住したことも確認されている（三崎 2002: 8）。

考古学的資料としては、モンゴル国首都ウランバートルの近郊にあるノインウラ墳墓（1世紀ごろ）や、バイカル湖南岸のイヴォルガ城塞址（前2世紀から前1世紀ごろ）から、数多くのキビ、アワ、マメ類の遺物が発見されている（林 1983a）。これらの遺物はただちに、人が食べていたことの証ではなく、また匈奴が自ら農業をしていたことの証でもない（沢田 1996: 93）。しかし、後者の遺跡には金属製器具類の製造をしていた痕跡が認められることから、一般に、鉄鍛冶集団が定住して自らの食糧を耕作によって生産していた、と考えられており、またそのような場所は他にも多々あった（沢田 1996: 157）。

イヴォルガ城塞址の場合は、匈奴の領域の北辺に位置することから、「匈奴人守備兵と漢人（あるいは西域人）農耕民」からなる屯田であった可能性が指摘されている（林 1983a: 24-25）。

鮮卑・柔然の農耕

モンゴル語系であると見なされている鮮卑は、匈奴の分裂に乗じてシラムレン地域（遼河流域）で勢力を蓄え、四世紀後半には五胡十六国のうちの北魏（386-534年）を建てた。この時期には、漢人たちが入来して河川付近で農耕をすることは少なくなっただと考えられている。というのも、歴代皇帝が、匈奴や鮮卑などの遊牧民を国都周辺地区に強制的に移住させて、農地、農具、耕牛を供給する徙民政策、すなわち遊牧民自身による勸農政策を採っていたからである（沢田 1996: 203）。ただし、それが決して容易でなかったことは、北魏末に、高平鎮民の匈奴赫連恩や柔玄鎮民の匈奴万俟氏らの反乱に現われている、という。農民化を拒否した遊牧民は、周辺の柔然や突厥などの遊牧民に吸収されたと考えられている。

モンゴル国の歴史学者である G. スフバータル Sūkhbaatar は、ハンガイ地方でキビ類が栽培されていたことについて「モンゴル高原では新石器時代から農耕が存在していたのであるから、モンゴル高原にいた鮮卑すなわちモンゴル人たちによる農耕は、中国から借用したというよりも、むしろ現地の生業であろう」と見なしている（Sūkhbaatar 1971: 148）。

鮮卑が衰退したのちにモンゴル高原で勢力を展開した柔然については、匈奴と同様

に北方の遊牧民に対処するために城を築き、漢人による屯田が行われていた、と推測されているが、史料に乏しく明らかではない（林 1983b）。

このように、同じモンゴル語系とされる鮮卑と柔然のあいだでは、誰をして農耕に従事せしめるかという違いがあるものの、政策として農業開発が進められたことが確認される。

突厥・遊牧ウイグル（回鶻）の農耕

北アジアに興った遊牧国家における農耕について、掠奪や交易とともに経済的側面から考察してきた林（1985）は、突厥についても匈奴や鮮卑、柔然などと同様に、中国に入寇して人と家畜を掠奪し、掠奪された人は集落に定住して農耕に従事した、と結論づけている。ただし、その地域は、匈奴や柔然のようにモンゴル高原北部ではなく、現在のフフホトあたりなどもっばらモンゴル高原南部が中心であったという。

『旧唐書』によれば、単于の默啜が力にまかせて要求したので、則天武后も致し方なく、「〔要求したもの〕ぜんぶ、六州の降戸数千張、それに種子四万余石、農器具三千点を与えた。默啜がいよいよ強くなっていったのは、このことからである」とある（佐口ほか 1972: 120）。このように農具を得て農耕に従事したのは、第一突厥（542–630 年）と第二突厥（682–741 年）のはざまの、唐に降っていたあいだに、自ら農耕を習得した突厥である、という可能性も指摘されている（林 1985: 120）。また、第一突厥期には、「突厥人守備兵のもとに突厥のために中国人が農耕生産を行なうという図式」が確認されるという（林 1985: 116）。

上述したように、匈奴、鮮卑、柔然、突厥などのモンゴル語系、テュルク語系遊牧民がモンゴル高原で勢力を展開していた時代には、掠奪された農民が労働力として投入されて農業開発が行われるとともに、遊牧民自身による農耕も一部行われていたと考えられている。いずれにせよ、モンゴル高原のごく一部の地域で農業開拓が実施された。

特筆すべきは、突厥に続くウイグル（回鶻）時代（744–840 年）に都市が建設されたことである。ウイグルはテュルク語系集団の 1 つであり、オルドゥバリク（宮殿都市）と呼ばれた都城をその根拠地に建設した。オルホン川上流域にあり、現在はハル・バルガス（黒い町）と呼ばれている遺跡である。当時の「アラブの旅行記」⁵⁾ から、この首都の周辺に農地が広がっていた可能性も指摘されている（Minorsky 1948: 283, 296）。それまでの遊牧政権下の農耕が、領域の周辺部でまさに屯田的な性格を帯びていると考えられてきたのに対して、遊牧ウイグル時代には周辺部ではなく、勢力の中

心地域、いわば首都圏で農業開発が実施されていたとされる点に特徴が認められる。

キルギス（黠戛斯）の農耕

ウイグルの支配を倒したのはキルギスである。彼らは『新唐書回鶻伝下』に付された「黠戛斯（キルギス）」の条に「人はみな長大で、髪は赤く、顔は白く、瞳は緑である」と記されており（佐口ほか 1972: 449）、もともとアーリア系で、後に言語上テュルク化したと見なされている。彼らの本拠地であったエニセイ川やアバハーン川付近には、古代の灌漑施設、石堤、用水路などの跡があり、多くの石臼のほか、犁の先の鉄製部分が発見されている。キビ、大麦、小麦、ヒマラヤ裸麦、アサなどが栽培されていた。牧畜とともに農耕に携わっていた彼らは、モンゴル高原に南下してもなお、耕作可能地で耕作していたと推測されるが、詳細は不明である。彼らがモンゴル高原で定住的な生活を送っていただろうことの記憶は、紀元前に遡る積み石塚をすべてモンゴル語で「キルギス・フル（キルギス人の墓）」と呼んでいることに、その名残を見出しうる。この表現は、19世紀のポターニンの調査旅行以来、ロシア人調査隊によって「ヘレクスル」と聞き取られ、そのまま専門用語として定着している。

室韋・契丹の農耕

室韋は契丹の一種であり、ともにモンゴル語系と見なされている。現在のモンゴル国東部から中国内蒙古東北地方にいた室韋について、『魏書失韋伝』によれば、「多くの粟・麦および稌（くろさび）があるが、人びとはただ猪や魚を食し、牛・馬を養う。一般に羊はいない」とある（内田ほか 1971: 289）。一方、『旧唐書室韋伝』によれば、「聚居して数十百家におよぶものがある。〔かれらは〕木を削って犁をつくり、〔先端に〕鉄刃をほどこさない。〔その犁は〕人が牽いて耕作し、牛を使用しない」とある（内田ほか 1971: 298）。このように、室韋は全体として半農半牧という特徴を有していた。

契丹は農産物を大いに利用していた（Perlee 1959: 54 など）。遼代（916–1125 年）の法制度を研究した島田正郎によれば、遼代には、契丹人の放牧地を本土の周辺に移し、可耕地に漢人農民を強制移住させて農業開発が進められた。例えば、国初の太祖（907–926 年）・太宗（926–947 年）の時代には、フルンボイル地方に契丹人を派して屯田兵とし、聖宗（982–1031 年）の時代にはオルホン川流域に鎮・防・維の3つの拠点を設けて屯田した（島田 1993: 107）。辺境の要地では、耕作可能な地を求め、契丹人の兵や帰服した遊牧民に開墾させ、食糧自給のために屯田制度を設け、辺境を防

備する役所に管理させた、と推測されている。ただし、農耕の適地でなかったこと、遊牧民が農耕に不慣れであったことなどから、軍糧の自給はままならず、民間の農作物を多量に輸送しなければならず、そのために国費がかさみ、漢人農民の耕作になれた者を移住して耕作に当たらせるべきだという議論が生じた、という（島田 1993: 108）。

以上のように、匈奴以来、モンゴル高原では遊牧民の政権のもとで、もっぱら掠奪された農民など様々な定住民によって農業開発が行われてきた。勢力圏の周辺域において、遊牧民自身による軍備と異民族である農民による耕作をセットにするという特徴をもつ屯田のありかたが指摘できるのは、匈奴の時代と突厥の時代である。匈奴では北辺に、突厥では南辺に顕著である。これに対して、ウイグル時代にはむしろ版図の中央部での農業開発が特徴的である。辺防屯田という一般的なあり方を超えているという点から、ウイグル時代には最も農業開発が盛んであったとみてよいと判断される。一方、鮮卑、契丹の時代には、遊牧民を農業に従事させる政策があったと指摘することができる。

2.2 元朝時代の農業開発

元朝を含むモンゴル帝国時代に農業開発が大に行われたことは、これまでも旅行記や正史などの文献史料からよく知られてきた。農業開発の中心地は、オルホン川流域のカラコルム一帯、チンカイ・バルガス付近のほか、オイラートの一部の地域であり、具体的には現在のホブド県ハルオス湖周辺、ボルガン川、オブス県のオランゴム市、タリヤートなどである（Dalai 1992: 95–96）。ここでは、開発と保全の均衡あるいは持続性という観点から考察することができる程度に文献史料が得られる、カラコルムとチンカイ・バルガスを採りあげる。

チンギス・ハーン時代に開発されたチンカイ屯田

元朝成立に先行するモンゴル帝国時代の農業開発として最も研究が蓄積されてきたのは、チンカイ・バルガス（鎮海城）であろう⁶⁾。チンギス・ハーン（チンギス・カン、ただし、本稿では現代モンゴルでの標準的な表現をカタカナ書きにする）に招聘された全真教の道士である丘長春は、中央アジアへの途上、鎮海城を訪問してチンカイに面会し、この先をチンカイと共に旅した。その旅行記『長春真人西遊記』に記載され、その後、各種の旅行記や『蒙古遊牧記』（張 1939）などの地誌類に転載されてい

くため、よく知られてきた。

『長春真人西遊記』によれば、ウリヤスタイの南あたりから、「初めてウイグル人が溝渠を掘って麦畑に灌漑しているのを見た」とあり、「秋の植え付けがすでに終わっているのを見て」大いに喜び、「時に稷黍は地に実っていたが、八月の初霜が降ったので、土地のものは麦の収穫を急いでいた」などという農業に関する記述が集中的に現われる（李（岩村訳）1961: 330-331）。

『元史』の鎮海伝（『元史』巻120）によれば、1212年、チンカイはチンギス・ハーンに命じられて屯田開発を行った。文献史料における記載はこれまでにおおよそ整理されている（陳1980; 大葉1982; 村岡2003, 2007; 松田2006）。それらによれば、チンギス・ハーンの征西時代にモンゴル高原の留守を託されたチンカイは、中央アジアからの捕虜を投入して屯田開発に当たった。

さらに、Ch. ダライ（Dalai 1992: 95）によれば、チンカイはウリヤスタイの西南で農耕が適すると選択し、そこに定住すべく町を建設した。「チンカイは地元の人のほかに多くのウイグル人、契丹人、女真人（＝満洲人）などによって用水路を引かせ、農耕をしていた」と元代の書記官が記録している。

このチンカイ屯田の所在は、モンゴルと日本の合同調査隊によって、ゴビアルタイ県シャルガ郡のシャルガ周辺であろうとされ、また城址はハルザンシレグ遺跡と名づけられた（村岡2006）。ただし、すでにコズロフ調査隊が灌漑について言及し、また後述するシムコフがその肥沃さを報告し、さらにE. G. ボベジモヴァが3年の輪作体系で休閑地が優れた放牧地になっていることなどを報告していた（Shubin 1953: 83-84）。一方、この耕地跡や城址の北側に位置するハサクトハイルハン山地の北面には、「五條河」と称されていた屯田があったと見られている（白石2002: 107）。

チンカイ屯田を理解するうえでの重要な特徴は以下の3点である。第1に、13世紀前半の、チンギス・ハーン時代の開発であり、後述するフビライ（クビライ）・ハーン時代の活発な農業開発に先行すること。第2に、投入された開拓者は、中国南部の漢人ではなく、中央アジアのオアシス農耕民であったこと。チンカイ自身がウイグル商人一族の出身であったという説もあるほど（森安1997: 114）、中央アジアのオアシス農耕民と密接な関係がある。第3に、農業開発に適した地域が現地調査によって選択されたことが確認できることである。

このような特徴をもつチンカイ・バルガスは元朝成立以後も持続的に利用されていく。確認される記録は松田によって年表にまとめられており（松田2006: 52-54）、40件に及ぶ。これらのうち、開発の変遷を把握するために『元史』巻100にある屯田政

策の「嶺北行省屯田」の項に列挙された記事に限ると、以下のような7件となる。

至元21(1284)年、カラコルム・アルタイ軍の1,000人を五條河へ投入して屯田させた。元貞元(1295)年、漢軍1,000名をチンカイに派遣し、屯田させた。大徳3(1299)年、五條河の漢軍をことごとくチンカイにも投入した。延祐3(1316)年、チンカイ屯田をやめて五條河を再び設けた。延祐6(1319)年、モンゴル軍から5,000人を分けて再びチンカイを耕した。延祐7(1320)年、フビライ・ハーンの旧制に基づいてチンカイと五條河の屯田を両方設けることとなり、軍から1,000人を發して五條河を屯田させた。英宗シデバラ・ハーン時代(1320-1323)に屯田万戸府が設けられ、4,648戸、6,400余項となった。

このような記録からは、当該開発地域において農地が持続的に利用されていると見ることができる一方で、その不安定性をも同時に見て取ることができる。なぜなら、再び耕作させる前に何度も止めているからである。興味深いことに、モンゴルアルタイ山脈の支脈の一部であるハサクトハイルハン山地の、南側にあるチンカイ屯田と北側にある五條河屯田とが結果的にほぼ交互に、あたかも休閑期を設けたかのように利用されている。

また、延祐6(1319)年11月に、晋王の貧民2,000人を住まわせて耕作させた、とあるのは、今日的表現で言えば、貧困削減を目的とした移民政策であろう。にもかかわらず、貧乏で帰還がままならない人びとを援助して帰郷させた、という記載(松田2006: 54)は、貧困対策が成功していなかったようにも見受けられる。

チンカイ屯田についてロロムジャブは、フビライ・ハーンが政権を握った後、カラコルム周辺の農地を拡大した事例として言及している(Rolomjav 1987: 13)。しかし、チンカイ自身はフビライ・ハーン時代以前に活躍した人物であり、またその開発地は必ずしもオルホン川流域カラコルム周辺とは言えない。少なくとも流域圏としては異なっている。確かに、チンカイ屯田ないし五條河屯田と、カラコルム屯田とは、大都(北京)から見ればいずれも漠北ないし嶺北にあたり、北方の農業生産を計画するうえでは合併された1つの圏域ではあるけれども(『元史』巻58)、本稿では、農業開発の持続性を考察するために、モンゴルアルタイ山脈の北麓に位置するチンカイおよび五條河と、オルホン川流域であるカラコルムとは地域的に区別しておく。

そもそも軍隊の駐屯する拠点とは、軍事行動のためのツーリストキャンプのようなものである。ただし、現代のツーリストキャンプと異なる点は、食糧を(平和時のように)運び入れることよりも、(非常時として)自給することを想定しなければならない点である。したがって、戦略上、農耕可能なスポットこそがきわめて重要となる。農耕可能な地点が駐屯地として開発され、その駐屯地が争奪の対象となるために、農

地のある地域が大いに戦場となるわけである。

チンカイ屯田は、チンギス・ハーン時代に、カラコルム兵站基地からさらに西方へ遠征するという軍事上の理由から、その途上に拠点形成を目的で、農業に適した地域として選択され、中央アジアからのオアシス農民の強制移住によって開発された。そしてその後、しばらく開発が維持された。13世紀から14世紀にかけてのこうした農業開発のありようは、統治者による政策の実施であり、政治力の発現の場である、という点で20世紀の農業開発と本質的にあまり変わらないように思われる。明代には利用されていなかったと見られており（大葉 1982: 90）、政治上の必要がなくなった時点で放棄されたのだった。

後述するように、社会主義時代の農業開発には第1期と第2期があり、まったく同じではなく、前者に比べて後者は首都圏がその開発対象となったため、より自然条件の適合性が低かった、と見なされる。では、過去の元代はどうだったのであろうか。ここではひとまず、チンカイ屯田について、モンゴル帝国時代における最も初期の開発事例であることを確認し、カラコルム屯田あるいはカラコルム首都圏での農業開発はどのような開発であったのかを次に検討する。

フビライ・ハーン時代に開発されたカラコルム屯田

モンゴル帝国史の考古学的実証を試みる白石にとって、農業開発はその痕跡が今日まで残るという点で重要な研究素材となっている。彼によれば、元代の屯田開発は以下のようにまとめられる（白石 2002: 80-84）。1260年にフビライが即位してからというもの、度重なる戦乱によって、カラコルム首都圏に屯田兵が派遣され、その結果人口が増大し、それによって食糧不足に見舞われ、食糧生産が追いつかず、例えば食糧で酒を造ることがしばしば禁止されたものの埒が明かず、漠地から米が購入されていた、にもかかわらず餓死者も出るほどで、さらに気象変動も重なった。

さらに白石は、カラコルム首都圏の屯田として「和林」「昔宝赤八剌哈孫」「孔古烈（列）」の3ヶ所を挙げている（白石ほか 2009: 605）。

そのうち、和林とはカラコルムの音写で、狭義のカラコルム屯田であり、現在のウブスハンガイ県ハラホリン郡に相当する。宮殿に関する詳細な研究が行われる一方（白石 2002: 137-154）、耕地についてはコロナ衛星写真によってオルホン川下流の扇状地面に広範囲の耕地跡が確認された（相馬 2010）。当該地域では、社会主義時代に開発されたハラホリン国営農場が灌漑用水路を整備して発電も行っていた。ウイグル時代から集住拠点として開発された地域一帯は、このように今日まで農耕地帯として

長期的に維持され、持続的に利用されている。ただし、塩類集積も指摘されており、すべての耕地が持続的に利用されてきたわけではない（相馬 2010: 188）。

昔宝赤八刺哈孫とはシバクチ・バルガスン（バルガス）のことで、現在のウブスハンガイ県バヤンゴル郡のオンギ川左岸中流域、シャーザント遺跡であると比定されている（白石 2002: 333–335）。シュービンによれば、さらにその下流、河口付近には、清朝の康熙帝がオイラートのガルダン・ハーンを撃つために北征した際に開拓されたという農地が利用されていたが、収穫は安定的ではなかった（Shubin 1953: 85）。オンギ川は現在、砂金採掘の影響を大きく受けて水流そのものが消えつつある。なお、バヤンゴル郡は温暖化の影響で砂漠化が進んでいる地域の 1 つと見なされ、2009 年現在、国際農林水産業研究センター（JIRCAS）によって、農業を含む農村開発プロジェクトが日本の ODA として進行中である⁷⁾。

孔古烈（列）とはクンクレーで、現在のウブスハンガイ県ゴチンオス郡（行政区域の名は 30 の水という意味）のフンフレー川流域であると比定されている（白石ほか 2009: 614）。白石らによれば、湧水起源の流路がいくつも並行して流れていて農耕に適しており、複数の古老から社会主義時代に大規模な耕作が行われたことが確認された、という。7 つの調査地点のうちモンゴル帝国期の耕作地として 1 地点が確認されたほかは時期の特定が慎重に避けられている（白石ほか 2009: 632）。社会主義時代、当該地域は国営農場には選定されていないので、あくまでもネグデル（牧畜協同組合）の耕地であつたろうと推測される。広範囲に塩類が析出しているという指摘は、灌水をした農業が展開していたことをうかがわせるが、聞き取りの内容は不明である。農耕に適していた地点を含み、現在まで長期的に利用されてきた地域であることは了解されるものの、モンゴル帝国時代の遺物が表層から採取されるために当時の耕作地として即断できる場所があるということ自体は、農地として長らく放棄されていたことを意味している。

このように、カラコルム首都圏の屯田として重視される 3 地区を個別に検討すると、そのうち中核をなすカラコルム屯田は、灌漑施設の整備など当代の技術投入によって農耕地として長期的に利用されているが、それ以外は農耕に有利な自然条件を以って選択されていたとはいっても、農業が自律的に継続されることはなく、むしろ社会的状況の如何によって開発される時期もあつた、と理解したほうがよいだろう。

グライによれば、そもそも 13 世紀後半にモンゴル高原北部（以下、モンゴルと略す）で官営農場（屯田）が発達した最大の理由は、アリグブフ（アリグブケ）、ハイドゥ（カイドゥ）、ナヤンらが長年にわたって（アリグブフの乱は 1259 年から 1264 年、ハ

イドゥの乱は1266年から1301年、シリギの乱は1277年)、フビライやトゥムルハーンに対抗していたため、フビライ・ハーンはモンゴル領地を失わないように中国から多くの漢人軍隊を恒常的にモンゴルに投入しており、そうした漢人軍隊に対して自給のために屯田させていたからである。1272年から1293年までの20年間に10回、漢人軍隊が招き入れられた。彼らには役牛や犁、シャベルなどの農具が支給された。彼らはモンゴルのハンガイ、アルタイ、カラコルムなどの地に配分されて耕作した。漢軍では隊ごとに2人を出して農耕にあたらせ、8人の食をまかなった。モンゴルにおける農業の賦役義務を果たしていたのは漢人兵士だけではなく、モンゴル人兵士およびモンゴル人一般もいた。しかし、モンゴル人は行きたがらなかったようである。例えば、「農民を管理する官吏が農地は遠いし空気が悪いといっって行くのを嫌がることが多い」と『元典章』に記されている、という。結局、1337年、トゴントゥムル・ハーンは「北方遠隔地は厳寒のため、公的農耕は中止する」と命じた。同年には中原地域において元に対する反乱暴動が発生したため、漢軍を戻したことが主たる原因であるとも考えられる (Dalai 1992: 96-97)。

以上のように、元朝時代とりわけフビライ・ハーン時代に軍事政策の一環として大いにモンゴルで農業開発が行われた。地形条件を考慮して農業に適した地域が選ばれていたにもかかわらず、開発に関する記述の頻繁さからは、持続性ととも不安定性を読み取ることができる。持続性と言うよりも断続性と言うほうがよいかもしれない。農業開発が政策である以上、政治的な文脈によってその進展が左右されていたのは当然であろう。

初期には西方遠征に利のある地点 (モンゴルアルタイ山脈沿いのチンカイ屯田等) が選択され、用が済めば廃れた。後期になるとより以前から開発の歴史をもつ可耕地が首都圏として選択され、現在も重要な農業地域となっているものの、広域的に開発されたためにその後に廃れた地点も含まれる。このように、モンゴル人がモンゴル高原での為政者となり、今日の民族分布を決定づけた元朝時代において、その農業開発は、軍事目的であれ、人口増加対策であれ、増大する需要が主たるプル要因となるために、自然条件のシーズを社会条件のニーズが越えるという状況で開発された、と理解したほうがよいように思われる。

なお、栽培されていた作物については、検出された植物遺存体の分析から、大麦、小麦、キビ、アワ (少量)、アサ、マメ類のほか、湿度を好む種類としてカヤツリグサ科やアカザ科の雑草種子が伴出していることから「灌漑や施肥技術をもった農耕が行われたと推定されている」という (小畑 2010: 108)。

元代よりのちについては、明代におけるフフホト周辺の開発、さらに下って清末の移民実辺政策、中華民国期の屯田開発、いわゆる満洲国時代の満蒙開拓など、いずれもモンゴル高原南部についての研究が中心であった。現在のモンゴル国の領域（モンゴル高原北部）における農業に関する研究は、例えば土地争い文書（Sharkhüü1975: 198–212）など農地に関する史料が豊富にあると知られているので（例えば後注 18 参照）、今後の歴史学の進展に大いに委ねることとし、本稿では、開発と保全の均衡という観点から、長期的な気候変動との関係について言及したうえで、近代化の開発へと時代を移して論を進める。

2.3 長期的な気候変動との関係

図 4 は、紀元後 1000 年から現在までの長期的な気候変動に関する現時点での推測結果である（Narama et al. 2010）。白石がそれまでの研究成果をまとめたものと比べて（白石 2002: 7）、一見すると大きな差異はない。ただし、これまでの古気候の復原図が温度の変動を表していたのに対して、図 4 は氷河の涵養量から推測される湿度の変動を表していることが注目になる。図 4 に示されるように、AD1000 年から AD1400 年までのあいだに見られる乾燥期は、これまで寒冷期として知られてきた。したがって、この約 400 年間は寒冷化と乾燥化が同時に進展している寒冷乾燥期であると判断されるのに対して、長期的な寒冷期の中でも AD1400 年以降は湿潤期であると理解されるのである。

こうした気候変動に関する現時点での推測結果を、本章の後半で述べたような農業開発史と対応させると、以下のように指摘できるであろう。

近年、チンギス・ハーンの征西に象徴されるモンゴル人の西方への軍事展開は、温暖化に伴って草地が失われたために草原を求めたためだという説が人口に膾炙して通説化しているけれども（フェイガン 2008: 96–100）、一方で寒冷化に伴って部族抗争が停止したという説があり（Fletcher 1986; Jenkins 1974）、後者について詳細に検討した松田は、その寒冷化期はむしろ部族抗争の活発期に相当している、という解釈を提示している（松田 2010）。このように、同時期について、その気候変動をどう理解するか、さらに歴史的現象としてどう理解するか、3つの異なる解釈が可能となっている。チンギス・ハーンに代表されるモンゴルの勃興期すなわち 12 世紀末から 13 世紀初頭は、すでに中世の温暖期が終わって寒冷化していたものの、図 4 に見られるように、長期的な寒冷期のなかでは、反転してわずかに温暖な時期に相当していた。長期寒冷期の中の短期温暖化であることが多様な解釈を可能にしている。いずれにせよ、

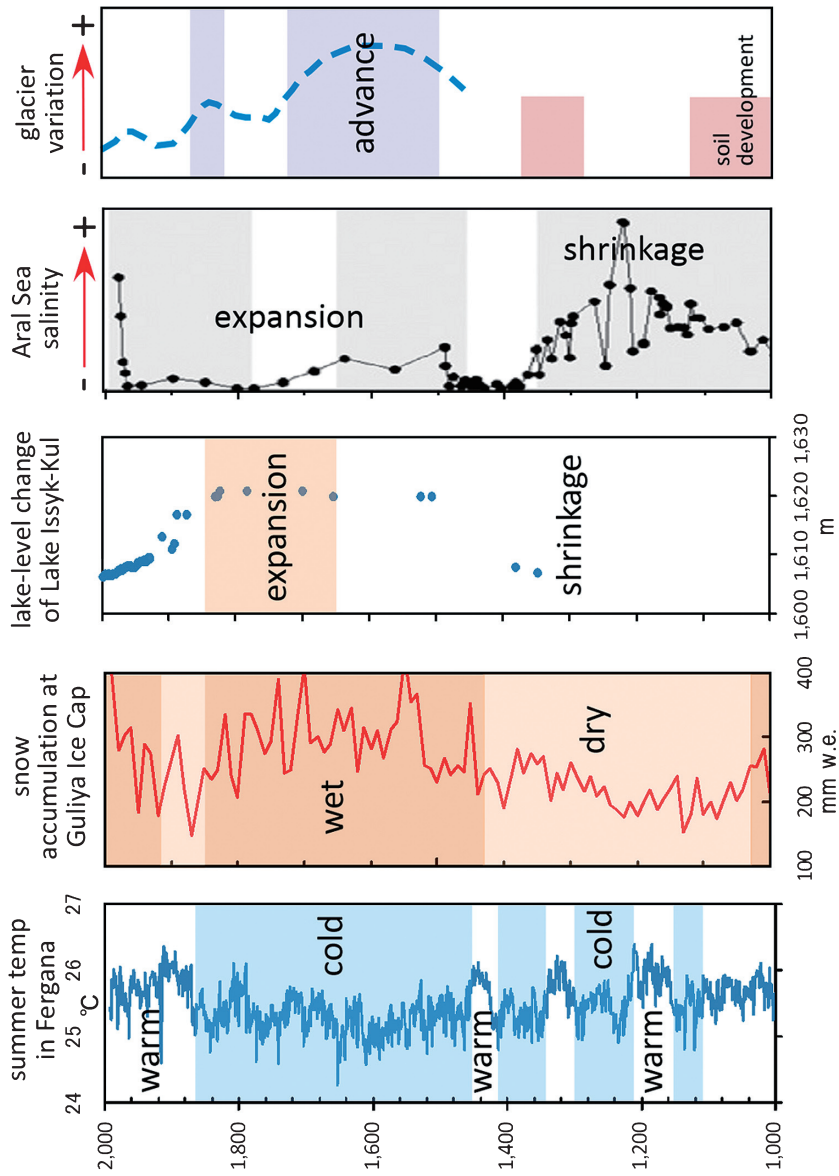


図 4 古気候変動
(Narama et al. 2010)

この気候変動と軍事活動を直截的に連動して説明することにはいかにも無理がある。とくに、東西方向の同緯度帯での移動についての説明原理として論理的であるとは思われない。

先述したように、農業開発もまた軍事活動の一環であるから、軍事活動と同様にその主因を気候変動によって説明することは困難であると考えられる。ただし、念のために、南北方向について検討しておく、農耕を重視するキルギスが南下した時期は、ちょうど中世の温暖化に相当しており、南シベリアから北アジアにわたる当該地域の場合、気象条件の劣化による行動と見るよりは、好条件のもとでの展開と理解したほうがよいことがわかる。

そして、本章の前半で推測したように、モンゴル高原における農業開発の進展が最も強いと判断されるウイグル時代（744-840）はまさに中世の温暖期に相当し、現在よりも温暖な気象条件のもとにあり、これまでのところ湿潤であったろうとも推測されてきた。つまり、ウイグル遊牧民がその勢力圏の中心部で農耕や都城の経営に成功していたことは、有利な自然状況と整合しているのである。

このことは、従来の論理の展開方法に対して根本的な疑義を呈することをも可能にしている。すなわち、気候変動の傾向と歴史的事件の因果関係を考察した従来の論考はおしなべて、環境の「劣化」を問題の発生源とみなして立論しようとするのに対して、むしろ「好条件」に関連づけて論じたほうが妥当であることを示唆しているからである。21世紀の現代的課題として危機感をあおるという論理の組み立て自体に、問題が潜在しているように思われる。

農業開発についてここで限定すれば、その持続性について考察する際には気候変動を要因とみなしても妥当であるかもしれない。例えば、チンギス・ハーン時代のチンカイ屯田の開発や、フビライ・ハーン時代のカラコルム屯田の開発は、決して有利な気象条件に恵まれていたわけではなかった。その後、14～15世紀になると寒冷の中絶期を迎え、かつ湿潤化もしていたけれども、15世紀後半には小氷期に入り、17世紀半ばには小氷期のなかの最寒冷期を迎える。したがって、農業開発にとってそれが持続するための有利な状況変化はなかった、と言える。むしろ、温暖化という点では20世紀の社会主義時代の開発のほうが有利な条件に恵まれていた。ただし、現在のモニタリングによれば、東部や南部でとくに夏期の降水量が減少する傾向にあるため、農業開発に必ずしも有利ではない状態となっている。

以上のように、農業開発の原因を気候変動に求めることはできないが、その維持や持続の成否については気候変動が影響を及ぼすと理解してもよいのではないと思われる。

3 民族誌における農耕に関する記述

モンゴル科学アカデミーの前身は1927年に設置され、当初はロシア人学者たちにより、ついで彼らとともにモンゴル人学者たちが、やがてはその指導のもとに育ったモンゴル人学者たち自身が、全国各地の風俗習慣等に関する調査を行った。そのようにして集められた資料や情報はまさしく「前近代」として提示されることになる。文化人類学における「民族誌的現在（時制）」の議論は、研究者が観察結果を過去形で記述するために過去のこととして封じてしまう態度や、過去のことを現在形で書くことによってあたかも未来永劫のこととして時制を奪う態度など、いずれにしても研究者が時制に無自覚であることを批判した。本章で扱う、社会主義的近代化の過程で書かれたモンゴルの民族誌の場合を検討すると、その時制は、文法上では「～してきた」という現在完了形が極めて卓越しており、民族誌の記述はまさしく「近代が前近代を構築する」という営みであったことが了解される。本稿では、20世紀後半に刊行された民族誌等における農耕の記録を以って、20世紀後半に進展する農業開発に先行する状態とみなす。すなわち、近代化の精神によって前近代が仕分けされている、という単純な二分法を本稿ではとりあえず採用しておく。なぜなら、人びとのあいだで実際にどれほど農耕に関する知識が維持されて実践されているかという点について、残念ながら今のところ筆者自身による調査資料がないからである。

3.1 民族学・言語学地図（1979年刊行）より

モンゴル人民共和国時代にモンゴル科学アカデミーから1979年に刊行された『モンゴル人民共和国民族学・言語学地図帳』は1970年代までに実施された全国的な民族学および民俗学調査の結果を集大成した、いわば国定の資料集である。当該地図帳には、農具、農作物、経営など農業関係の情報を示すシートが6枚含まれている。それらを統合して考察してみよう。

まず、図5は、農具に関する分布図（ASM 1979: 144）を描き直したものであり、3つのタイプが地域的にまとまっていることが看取される。当該資料で図解説明されているボイトク・アンジス *boitog anjis* という小さな犁は（ASM 1979: 145）、西モンゴルで用いられている。アンジスとは牛馬などの役畜に曳かせる犁一般を指し、ボイトクとは子ども靴の意で、犁の先端に鉄製の覆いがつけられていることにちなんだ名称であると思われる。一方、それよりも大きく、鍬のように幅の広い平らな板（^{はっどばん}撥土板）

を用いて土を起す犁はモンゴル・モドン・アンジス *mongol modon anjis* (モンゴル木製犁) と呼ばれている (ASM 1979: 145)。これはモンゴル中部のセレンゲ川, オルホン川流域, およびハンガイ山地の南麓からアルタイ山脈の南北両山麓まで広がっている。先述したチンカイ・バルガス付近も含まれている。撥土板の有無によって, 前者は無^む鋤^{へきすき}犁, 後者は有^{ゆう}鋤^{へきすき}犁と区別される (応地 1987: 179)。応地 (1987) の整理に基づき, それぞれ中央アジアに広がったインド犁, 中国起源の杵型犁とみなされる。他方, 南部にはわずかながら, 犁を利用しない農耕が記されている。以上のように, 農具 (犁) については, 利用しないことを含めて3つの類型があり, それぞれの分布がまとまりとして確認される。

図6は, 農作物についてキビと麦 (小麦もしくは大麦) の2種, 経営について公 (官営) と私 (民間) の2種にそれぞれまとめて区別し, それらの組み合わせ4種類と, 野生植物を採集している地域, および漢人による野菜栽培が見られる地域という2つのタイプを加えて, 6タイプにまとめて加工したものである。なお, 凡例としては区別しなかったが, 官営農地では小麦が多く, 民間農地では大麦が多い。

野生植物の採集は上述の資料では, ザブハン県フンギー川流域のオルガマル *urgamal* (植物という意味) などの一帯に限定的に, ソリ *suli* とツォリヒル *tsulikhir* (ないしツォルヒル *tsulkehr*) が記されている (ASM 1979: 143)。後述する国定『民族誌』における「採集」の項目によれば (Badamkhatan 1987: 91-94), ソリには黒白の2種類が区別され, それぞれ学名は *Psammochloa villosa* (イネ科沙鞭属), *Leymus racemosus* (イネ科テンキグサ属) であり, ツォリヒルの学名は正しくは *Agriophyllum pungens* (Vahl) Link ex A. Dietr. (アカザ科スナヨモギ属) である。いずれもゴビ地帯で自生する雑穀類として知られており, 実際に採集されて食されていた地域は, この図のようにフンギー川流域に限定されず, かなり広いと思われる⁸⁾。

漢人による野菜栽培は, 全国的に主要な河川沿いに散見される。

図6が示すように, 公私という経営体の区別を超えて, 農作物については東西の違いが明瞭である。すなわち, キビは中央から東部にかけて分布し, 麦類は西部に分布する。

図5と図6から了解されることをさらに総合して類型的把握を試みると, 以下のような3つのタイプが認められる。第1に, 西部タイプとして, 小さな犁で大麦 (私的) や小麦 (公的) を栽培する農耕が認められる。第2に, 北部タイプとして, セレンゲ川流域では大きな犁も用いられ, 公私ともに, 多様な作物の農耕が認められる。第3に, 南部タイプとして, 犁を用いないで私的経営によるキビを栽培する農耕が認めら

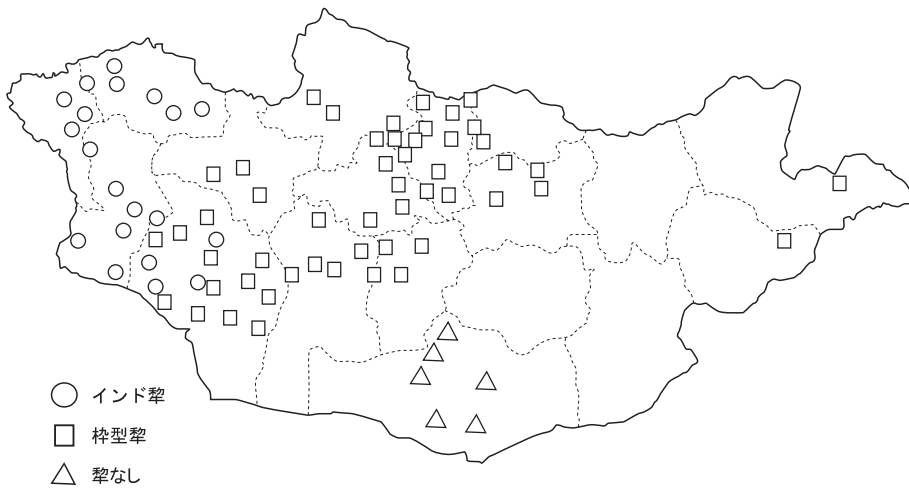


図5 犁の分布
(『モンゴル人民共和国民族学・言語学地図帳』(1979)より筆者作成。)

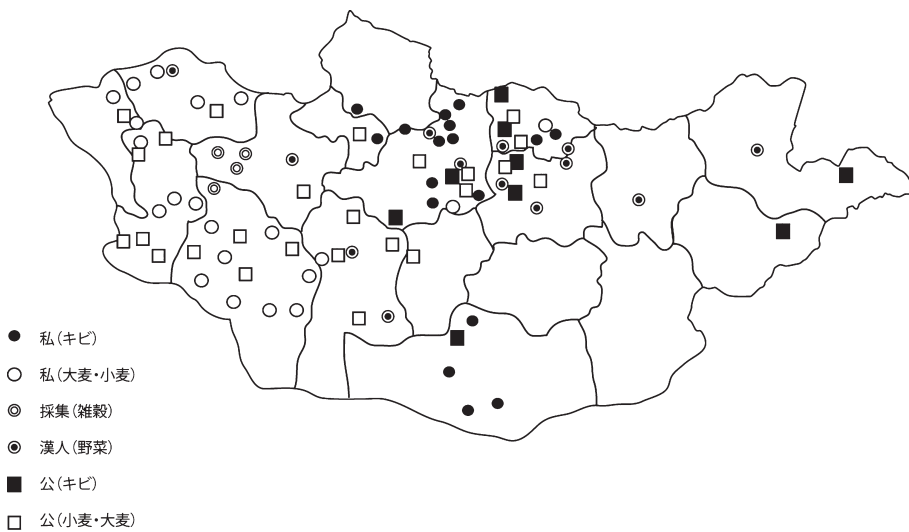


図6 農作物と経営の類型分布
(『モンゴル人民共和国民族学・言語学地図帳』(1979)より筆者作成。)

れる。さらに、西部タイプと北部タイプのあいだ、ゴビアルタイ県やバヤンホンゴル県には、北部タイプと同じ犁を用いて公私ともに麦類を栽培していたことが確認される。作物はもっぱら西部タイプであり、農具として北部タイプが流入しているように見える。とりあえず、複合したタイプと見なしておこう。こうしたコンプレックスこ

それは十分検討に値すると思われるが、本稿ではそれを今後の課題として置き、より単純な類型として上述した3つのタイプについて、従来の知見を以下に整理する。

3.2 モンゴル西部における農耕

上述した『モンゴル人民共和国民族学・言語学地図帳』には民族分布図が掲載されている（図7）。これらの諸集団については、社会主義時代の研究成果が3巻本の民族誌として刊行された。いわば国定の民族誌である。このうち第2巻が西モンゴルのオイラート系諸集団等に関する民族誌である（Badamkhatan 1996a）。第1巻は1987年に刊行されたが、市場経済への移行にともなって出版が一時途絶え、ようやく1996年に第2巻と第3巻（Badamkhatan 1996b）が刊行された。したがって、刊行時期は民主化以降であるが、内容はあくまでも社会主義時代の科学アカデミー民族学研究所による調査に基づくものとみなしてよいだろう。当該研究所の所員がそれぞれ民族集団を担当し、その調査結果が記されているので、記述の方法に若干の差が認められるが、項目などは基本的に共通している。農耕および植物採集に関する部分に関して抜粋し、全邦訳を末尾に資料として添付しておくので参照されたい⁹⁾。

近年の調査によれば（Erdenebaatar 1996; バトジャルガル 2005¹⁰⁾）、西部モンゴルにおける民間での農耕は1950年代から1960年代まで実施されていたことが了解されるので、この民族誌による記述は、社会主義的近代化プログラムのもとで国营農場が本格的に建設されるようになる直前までの状態を反映していると見なしてよいであろう。

この民族誌によれば、農耕に積極的に従事していたのはオイラート・モンゴルとしてドルベド、ウールド、トルゴート、バヤドの諸集団であり、彼らから学んだとされるウリヤンハイや、アルタイ山脈の北麓に住むザハチンらが挙げられている（諸集団の主たる分布については図7参照）。これらの諸集団のあいだで、農耕に関する技術やそれに伴う名称はほぼ一致しており、後発的な技術移植によって農業開発が普及したであろうことがうかがわれる。

その農耕は、大麦の栽培を中心とする灌漑農業であり、大型役畜を用いた犁耕を伴う。また、最初に土地を選ぶという記載からは、灌漑してもなお休閑地があること、すなわち休閑期があったと了解される¹¹⁾。耕起から収穫まで数回灌漑し、それぞれに名称がついている。例えば「辮髪の水」とは、植えた植物が辮髪のように40から50センチ程度伸びた頃に与える給水のことで、これを3回目としているところが多い。こうした灌漑のタイミングのほか、耕地を選定し、水路を整備するといった作業に関しては、ドルベドやトルゴートのあいだでは差配する者がいた。また、収穫から脱穀

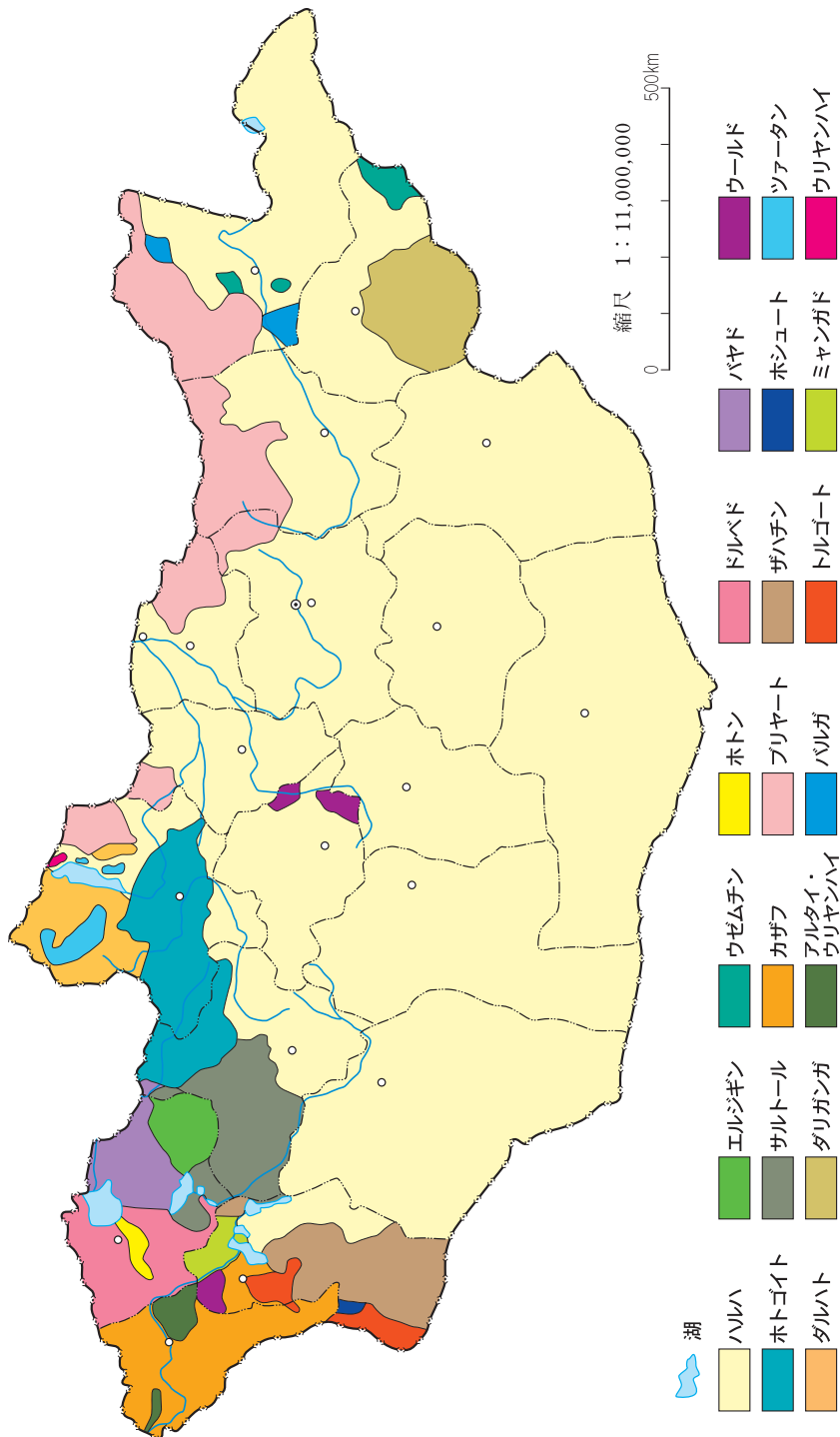


図7 民族分布
 (『モンゴル人民共和国民族学・言語学地図帳』(1979)より筆者作成。)

まではいずれの集団でももっぱら世帯ごとに従事していた。ワールドについては施肥が行われていたことも明記されている。

興味深いことに、いずれの集団においても大きな水路はボフ *bukh* 種雄牛と呼ばれており、最も主要な水路はジャンジン・ボフ *janjin bukh* 將軍種雄牛と呼ばれている。大きくて立派であることや、集団を統合しているような印象を与えているとともに、牛を祖先とする民族起源（ただし、ハルハ・モンゴル人）に関する神話や、牛が角で大地を掘って湖ができたといった民話を連想させる（ポターニン 1945（1881））。また、収穫後は貧しい者に穀類を配分する習慣があったという記述も興味深い¹²⁾。

自ら生業として農耕を行っていなかったというミヤンガトの項では、19世紀に各集団に対して農作業に関する賦役が課されていたことが言及されている。この記述はロシア人探検家たちの旅行記に依拠している。1892年から翌年にかけてモンゴル高原を調査したボズドネフは、ホブドを通過する際、中国人の兵隊が屯田していたことのほかに（ボズドネフ 1908（1898）: 416）、ミヤンガト人たちが「賦役に服し、馬に乗り巡回して、耕地より烏を逐うを義務とす」と記している（ボズドネフ 1908（1898）: 445）。農作業の賦役と言っても、このように見張り番であった。また、先に1876年から翌年にかけて旅行したポターニンは、同地域のハルオス湖付近で、タラチンと呼ばれる農耕集団がいることや、中国人の監督下で貧しい人びとが名目上、農作業に従事していることなどについて比較的詳細に記している（ポターニン 1945（1881）: 104 など）。

ポターニンのいうタラチンとは、現代モンゴル語ではタリヤーチン *tariyachin*（穀類の人という意味）であり、歴史的には「タランチ」として知られている用語と等しいと考えられる。タランチとは、天山北部のイリ地方を本拠地とするジュンガル帝国が、イリ川流域をはじめとして自領内で農業開発を行うために移住させた人びとを指す（羽田 1982: 253; 佐口 1986: 253–291）。その多くはもともと天山山麓などのオアシスに住み、テュルク系の言語を話すムスリムであったと考えられている。

一方、ポターニンはホブドでの観察とは別に、オブスではホトンと呼ばれる集団に言及している（ポターニン 1945（1881）: 83 など）。彼らはオブス湖周辺に住み、オランゴムにある寺院の付近でテリン川から灌漑をして大麦を栽培するムスリムであった。彼らは現在、オブス県のタリヤーラン郡（行政区域の名は農耕という意味）に集住している。現代モンゴル語でホトンと言えば、彼らのみならず、イスラム教徒一般をも指す。

タランチないしタラチンとはその職能に注目した名称であり、ホトンとはその宗教

に注目した名称である。いずれも、他者から命名された、テュルク語系ムスリムの農業移民である¹³⁾。ホトンについては、モンゴル人民共和国時代の民族学の泰斗である S. バダムハタン Badamkhatan が、ポターニンの聞き取り等を利用しながら、18 世紀後半にオランゴム付近へ移住してきた、と見なしている (Badamkhatan 1996a: 234)。その農耕に関する記載内容は、上述のオイラート諸集団等と酷似している (Badamkhatan 1996a: 236–238)。

西モンゴルにおける上述のような農耕の起源について、ロロムジャブは、あくまでもオイラート人を主体とみなし、彼らが版図を広げてジュンガル帝国を築いたことによって 17 世紀以来、自ら農耕に従事していたが、清朝との戦いにより勢力を失って帝国が滅亡してから、当該地域に移住してきた事例を引いて「1771 年にボルガン川 (ホブド県) 溪谷で耕作を開始し、1960 年初めまで伝統的な方法で農耕していた」と述べている (Rolomjav 1976: 100)。しかし、上述のように共通の特徴をもつ 2 つの移住集団が存在しているのであるから、ジュンガル帝国の建設あるいは崩壊に伴い、彼らのような農耕職能集団とも言うべき人びとの移住によって農業開発が行われ、それが西モンゴルのオイラート人にも広まったと推測したほうがよいと思われる。

残念ながら、これらの民族誌の記述は収穫量に関する情報を欠いている。エルデネバートルは、古老からの聞き取りに基づき、単収 (1 ha あたりの収穫量) を 3 ~ 4 セントネル/ha (0.3 ~ 0.4 t/ha) だったと算出しているが (Erdenebaatar 1996: 102)、この数字は小さすぎ、休閑地を含めて計算してしまった可能性がある。一般に、乾燥農法よりも灌漑農法のほうが収穫量は多いので、今後、聞き取り調査による補足が必要であろう。バトジャルガル氏のご教示によれば、1 ha あたり 2 t 程度であり、現在のモンゴル国における乾燥農法による小麦栽培の単収がほぼ 1 t/ha (10 セントネル/ha) であるのに対して (後注 25 参照)、灌漑による大麦栽培は約 2 倍の収穫がある、という。

3.3 モンゴル北部における農耕

上述した 3 巻本民族誌のうち第 1 巻はモンゴル (人民共和) 国で多数派を占めるハルハ・モンゴル人たちの農業について記している (Badamkhatan 1987: 84–88)。コズロフやポターニン、マイスキーなどのロシア人の記録に依拠する結果、その言及は西南部のゴビアルタイ、西北部のホブド、北部のセレンゲなど地域的に拡散する。それは彼らが広域的に分布していることと整合しているが、それらの記載のうち、ここではオルホン川、セレンゲ川流域を北部タイプとして扱う。

ハルハ・モンゴル人の農業には、土壌水分が少ないために灌水をよくするものと、降水量が恵まれるため、それほど灌水しないものの2つのタイプがあり、後者の典型としてオルホン川、セレンゲ川流域が挙げられている (Badamkhatan 1987: 86)。

モンゴル人民共和国の歴史学の泰斗である Sh. ナツァクドルジ Natsagdorj の『ハルハ史』に依拠して、セレンゲ川流域では大麦 *arvai*、小麦 *buudai* のほかに、ウヘル・タリヤー *uher tariya*、エルチメイ *erchimei*、ハル・ボダー *khar budaa*、タングト・タリヤー *tangt tariya* が栽培されていた、とある。ウヘル・タリヤーは直訳すると牛穀類という意味であるが詳細は不明である。エルチメイはロシア語のヤチメニ (赤大麦) ではないかと思われる。ハル・ボダーはモンゴル・アモアの別名でキビを指し、タングト・タリヤーとは直訳すればチベット穀類という意味であることから裸麦であると思われる¹⁴⁾。当該地域における農業の特徴は、このように多様な農作物の栽培にある。公的な農業開発というよりもむしろ、さまざまな民間人による耕作が次第に拡大していった経緯を反映している、と推測される。

これらがそれぞれどのように作付されていたかについては記されておらず、耕起、収穫、脱穀時に用いる農具類について解説されている。そして、その後に「ハルハ人たちの農業には、このように定住地で発達した農業の方法が浸透し、その影響がある程度普及していたものの、地元の古い伝統的な方法もあったことを記しておくべきである」と公式見解が提示されている (Badamkhatan 1987: 88)。この「定住地で発達した農業の方法」が清朝時代に流入していた漢人らによる農業を指していることは疑いない。と言うのも、1870～1873年にキャフタから張家口までモンゴルを踏査したブルジュワルスキーが以下のように記しているからである。

「この地域は灌水に富んでいる。諸川のうち最大のものはセレンゲ川の支流オルホン河に合するイロ及びハラ・ゴルの二川〔現在のユルー川とハラール川——引用者注〕である。土壌は黒土質あるいは粘土質で、栽培によく適している。しかし、この地方にはまだ耕作は行われていない。わずかにキャフタを去る 150 露里〔約 160 キロメートル——引用者注〕の地点で、支那〔ママ——引用者注〕人の移民が数デジャチーナ (109.25 アール、一町一段四部八——訳者注) の土地を耕しているのみである。」(ブルジュワルスキー 1939 (1875): 9)

オルホン川、セレンゲ川流域の年間降水量の平均は 250 ミリ程度であり (図 8 参照)、モンゴル国国土のなかでは比較的恵まれたほうではあるが、決して多いというほどではない。漢人たちの農業やそこで雇われて学んだり、あるいは真似たであろうモンゴル人の農業が「穀類にそれほど灌水をしない」といっても、まったく灌水をし

ない農業ではなかったろうと思われる。むしろ、耕地が河川流域にあること自体、灌漑農業であることを意味しているだろう。

佐藤（2009）は、清朝時代末期におけるイフ・フレー（現在のウランバートル）が、買売城と呼ばれる商業都市と、寺院を核とする門前町との双子都市であって、漢人などの民人（モンゴル語でイルゲン *irgen*）と、モンゴル人との分離居住政策が実施されていたにもかかわらず、後者に漢人居住地区をつくるようになり、混住が始まった経緯を明らかにしている。こうした漢人商人たちが自給用に農耕していたほか、寺院に住む僧侶などの食糧を確保するために耕地が拡大されていた（佐藤 2009: 339–387）。

ただし、具体的な農業の方法については研究されていない。そこで、民族誌的描写に富んだ B. シャラブの絵画を検討しておこう¹⁵⁾。シャラブの作と伝えられている有名な作品の1つに『モンゴルの日』があり、そこには遊牧の風景が詳細に描かれている一方で（蓮見 1993）、農耕風景も描きこまれている。これまでほとんど注目されてこなかったが（わずかに萩原 1998）¹⁶⁾、秋の収穫期だけではなく、整地、播種などの作業も描かれている。残念ながら、どの地域の農業を描いているかが明記されているわけではない。牛に引かせている犁は小ぶりなもので、決して有鋤犁とは断定できないけれども、背後に森林が描かれていること、紙幅の右上に配されていること（いかにもゴビらしいラクダ群の牧畜風景は逆に下方に配されていること）などから、この農耕風景をモンゴル高原の最北部すなわちセレンゲ川流域と見ることに大方の異論

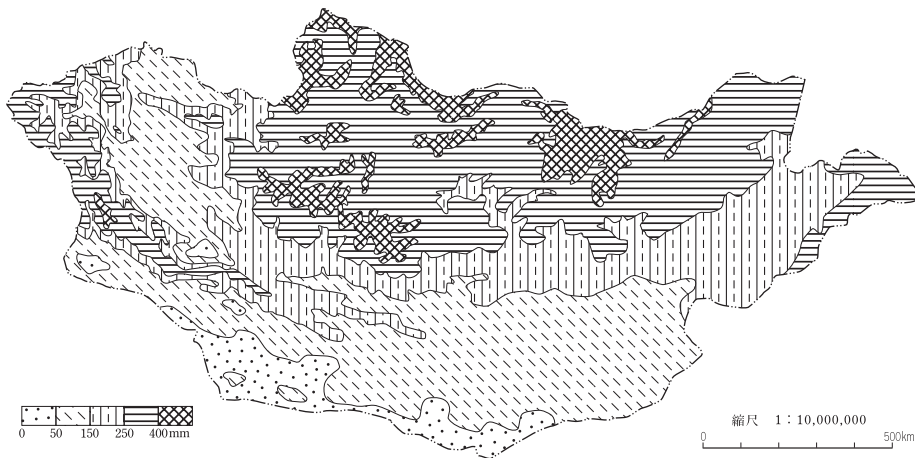


図8 降水量
（『モンゴル国勢地図』（1990）より筆者作成。）

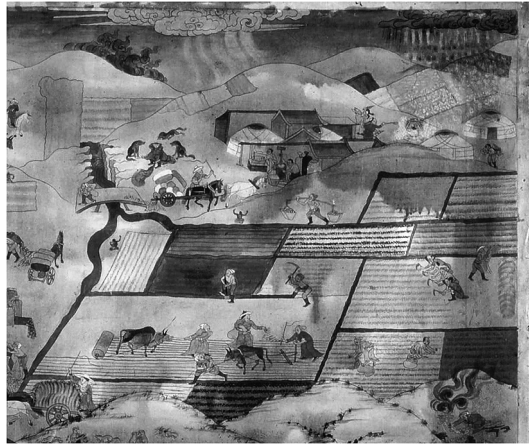


図9 シャラブ作（伝）「モンゴルの日」の一部

はあるまい。河川から水を引く用水路が整備されている点がとりわけ注目される（図9参照）。したがって、明らかに、いわゆる乾燥農法（乾燥農業あるいは乾地農業など同義）ではない。

3.4 モンゴル南部における農耕

民族学情報の分布図から確認される、第3のタイプについては、上述の民族誌には記載がないため、一般的に情報は少ない。これについて注目していたのはロシア地理学者のA. D. シムコフである¹⁷⁾。シムコフの伝記を書いたP. ツォルモンによれば（Tsolmon 1990），シムコフにとってゴビ地帯は特に注目した課題であり（ツォルモン 2007 (1990): 64–65, 75 など），国境の設定や県中心地ダランザドガドの選定などに深くかかわっていた。

社会主義時代にソ連大使館に勤務してモンゴル研究とりわけ遊牧の定住化を研究したV. V. グライボロンスキーは、シムコフの農業に関する研究に関して次のように述べている（小長谷編 2007b: 22; Glaivolonskii 2007: 78）。

遊牧の研究とともに、シムコフは現地の、通常ぼつんぼつんと点在する農耕の歴史と状況についての情報や資料を収集しました。例えば「モンゴル人民共和国科学アカデミーのゴビ調査作業概要」、1927年7月から11月ですが、これで彼は、バイダリク川とレグ川一帯での人民や寺院の農耕について、作付面積、土壌構成、耕作方法、作物の収穫と加工を含め簡単に記述しています。ゴビに点在するこれら耕作地を例に、シムコフは現地のモンゴル人は昔から農耕に従事していた（引用者注——この指摘は著作集3-1にある（Konagaya et al. 2008a: 64）。シムコフのオリジナルな報告書は1928年、オリジナルと著作集での収録箇所の対応についてはKonagaya et al. 2008bの巻末リストを参照のこと），と強調しました。

ここで言及されているバイダリク川はモンゴル国南西部、ゴビアルタイ山系とハンガイ山系に挟まれた「湖沼谷」と呼ばれる地域にあり、バヤンホンゴル県で唯一、国营農場のある地点で、しかも1953年という段階で設置されている（表1ではバイダラグ、図11では10番）。シムコフらによる農牧業資源の学術調査が初期の農業政策に反映されていると推測される。

またレグ川一帯での寺院による農耕については、シムコフによる調査を通じて知られており（Sneath 1999: 226; Yüendenbat 2009: 164–170¹⁸⁾）、かつてのエルデネ・バンディッタ・ホトクト（ラミーン・ゲゲーン）に帰依する集団シャビたちの生活領域のうち、現在のバヤンホンゴル県バヤンリグ郡に属し、また時代を溯って岩絵からも犁を使った農耕の様子が確認される（図3参照）（Ser-Odjav 1987: 35）。

これらバヤンホンゴル県の事例は、モンゴル国の比較的南部に位置するものの、農具と農作物の形態から見れば、類型としては北部タイプとしてまとめたものに相当する。

一方、シムコフはまた、ソリヒル *sulakhir*（上述のツォリヒルの方言）（アカザ科スナヨモギ属）やハルマグ *kharmag*（ハマビシ科小果白刺、*Nitraria sibirica* Pall.）など、ゴビの豊かな水たまりで食や薬に用いられる野生植物の採集活動についても記録している（Konagaya et al. 2007a: 572–584 [オリジナルなシムコフの著作は1928年]）。例えば、ソリヒルはキビに似ており、10月に収穫し、その粉は悪質な小麦粉よりも好まれる、とある（Konagaya et al. 2007a: 578; Rolomjav 1987: 39）。

ゴビにおけるこのような、野生植物の採集や、山系に挟まれた湖沼帯におけるバイダラグ川、レグ川、トイン川付近の灌漑農耕、さらに同地帯に含めうる、先述したチンカイ屯田の跡地に関する調査など、南部のゴビ地域ならびに南西部のアルタイ地域における農耕の実態調査の全容はシュービンに受け継がれている（Shubin 1953: 81–86¹⁹⁾）。ただし、シュービンはシムコフによる学術調査隊の出した数値には懐疑的であり、耕作放棄地に塩類集積があることも指摘していた（Shubin 1953: 53）。

4 社会主義的近代化としての農業開発

1969年に刊行された『モンゴル人民共和国史』第3巻は、1921年の社会主義革命から1966年までのモンゴル人民共和国の歴史を記述した「正史」である。2分冊からなり、ほぼ全訳されている（モンゴル科学アカデミー歴史研究所1988(1969)）。本稿ではこうした正史やロロムジャブの整理した、社会主義時代の政策史から概略を確

認しておく。

正史で言及されている農牧業に関する重要な諸政策のうち、耕作に関する最も早い時期の施策の1つとして、1922年に「全アイマクおよびシャビ領の播種地を登記したり、外国人に対して耕作地と草刈地を革命前にいかなる方法で貸していたかが調査された」とある（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969): 201）。清朝時代、ホショー（旗）や寺院は、領内の土地を漢人等に耕作等のために貸し与えることによって地代を得て重要な現金収入としていた。その実態を調査すると同時に、禁止する政策だったのである。一方、ホブド国境地帯では農業ホショーが設置され、屯田兵が再組織化されたことが知れる（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969): 479）。

ロロムジャブによれば、当時、モンゴルは、農業を外国人によって実施し、自ら従事していないために遅れていると見なされ、また食糧を移入に依存しているために搾取されていると見なされていた（Rolomjav 1987: 46）。そこで、「外国人農耕規則」によって外国人が排斥され²⁰⁾、「モンゴル人農耕規則」によってモンゴル人に農地が配分された²¹⁾。1922年にセレンゲ川流域のハラーに住む漢族から耕地を接収して、ハラー国营農地（*sangiin tariyalangiin gazar*）を最初に建設し、翌1923年にはホブドのタリヤーチン旗の「民衆の希望によって」²²⁾ホブド国营農地を建設した、とある（Rolomjav 1987: 54）。いずれも国营農場として1992年まで機能していた（表1参照）。

1931年になると「穀物自給」のスローガンが掲げられたが（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988-1 (1969): 303）、左翼偏向期の失政の1つとして記されている。1932年から始まる新転換政策のもとでは個人の主体性が重視されたため、個人による耕作と農産物販売が活発化した（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988-1 (1969): 346）²³⁾。

国营農場は1940年、「トラクター36台、穀物刈り取り機（コンバイン）166台、5,000 ha以上の土地の草を刈り、1,740 haの土地を耕した」とある（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988-1 (1969): 363）。また1937年に機械・草刈りステーションがソ連の援助により全国に10ヶ所建設されたが、そこでも耕作が行われた。この簡単な記述から、2つの点を指摘しておきたい。1つは初期の農業政策が、草刈作業と組み合わせられたものだったという点である。「*khadlan khadakh, tariya nogoo tarikh tukhai*（草刈および穀類・野菜栽培について）」という関連法の名称からもそのことが確認される（Rolomjav 1987: 52）。だからこそ、農業の成果として家畜頭数の増加が数字で示され、「遊牧的な牧畜に優れた方法が浸透しはじめた」ことの証として捉えられて

表1 国営農場等リスト

図8 番号	国営農場等の名称	ソム名	アイマク名	設立年	解散年
1	バヤンノール	バヤンノール	バヤンウルギー	1961	1992
2	ノゴーンノール★	ノゴーンノール	バヤンウルギー	1961	1992
3	ボヤント・テジェーリ	ボヤント	ホブド	1922	1993
4	オラントルゴイ	タリヤーラン	オブス	1979	1990
5	ハルヒラー★	ハルヒラー	オブス	1979	1992
6	テス★	テス	オブス	1975	1992
7	バローントローン	バローントローン	オブス	1930	1990
8	テス★	バヤンテス	ザブハン	1969	1992
9	ゴーリンホロー★	デルゲル	ゴビアルタイ	1962	1990
10	バイドラグ	バイドラグ	バヤンホンゴル	1953	1991
11	トゥブシルーレフ	トゥブシルーレフ	アルハンガイ	1943	1992
12	タリヤーラン	タリヤーラン	フブスグル	1943	1992
13	マクサルジャヴ	ホタグオンドル	ボルガン	1977	1992
14	ハルホリン	ハルホリン	ウブルハンガイ	1956	1990
15	サンサル	ラシャーント	ボルガン	1982	1992
16	飼料農場★	エルデネサント	トゥブ (中央)	1971	1990
17	バヤンノール★	バヤンノール	ボルガン	1979	1990
18	インゲトルゴイ	セレンゲ	ボルガン	1943	1992
19	オラントルゴイ	ジャルガラント	オルホンオール	1976	1992
20	ボルガルタイ	バローンブレン	セレンゲ	1976	1990
21	オルホントール	オルホントール	セレンゲ	1972	1992
22	ゼルテル	テウシグ	セレンゲ	1959	
23	ナイラムダル	ツァガーノール	セレンゲ	1976	1992
24	コミンテルン	ズーンブレン	セレンゲ	1930	
25	アルタンボラグ	アルタンボラグ	セレンゲ	1960	1992
26	シャーマル★	シャーマル	セレンゲ	1954(1995)	1991-93
27	フデル	フデル	セレンゲ	1972	1992
28	ユルー	ユルー	セレンゲ	1959	1992
29	バヤンハラート	ジャブハラント	セレンゲ	1977	1992
30	ノムゴン	サイハン	セレンゲ	1976	
31	ツァガーントルゴイ	サント	セレンゲ	1959	
32	エンヘタル	ホシャート	セレンゲ	1930(86)	1992
33	オルホン	オルホン	セレンゲ	1943	1991
34	バローンハラー	バヤンゴル	セレンゲ	1957	1992
35	オクチャブリ	スンベル	トゥブ (中央)	1976	1992
36	ズーンハラー	ズーンハラー	セレンゲ	1922	1992
37	バヤンチャンドマニ	バヤンチャンドマニ	トゥブ (中央)	1979	1992
38	ジャルガラント	ジャルガラント	トゥブ (中央)	1929(57)	1992
39	ボルノール	ボルノール	トゥブ (中央)	1927(59)	1991
40	バトスムベル	バトスムベル	トゥブ (中央)	1931(55)	
41	ザローチヨード	ツェール	トゥブ (中央)	1976	1990
42	オクタール	オクタールツァイダム	トゥブ (中央)	1959	1990
43	バヤンツォグト	バヤンツォグト	トゥブ (中央)	1959	1990
44	バルチザン	ウランバートル市	ウランバートル市	1977	1992
45	ガチョールト	ガチョールト	ウランバートル市	1963	1992
46	アタル	バヤンハンガイ	トゥブ (中央)	1976	1991

47	ノホルル	アルガラント	トゥブ（中央）	1976	1990
48	アルホスト	アルホスト	トゥブ（中央）	1969	1991
49	飼料農場★	ケルレンバヤンオラーン	ヘンティー	1974	1992
50	スンベル	スンベル	ゴビスンベル	1969	1992
51	チャンドガイ	ウルズィート	ヘンティー	1976	1992
52	ホルフ	ゴルバンバヤン	ヘンティー	1981	1992
53	オンドルハーン	オンドルハーン	ヘンティー	1954	1992
54	トゥメンツォグト	トゥメンツォグト	スフバートル	1960	1992
55	オノン	バヤンオール	ドルノド	1950	1991
56	エルデネツァブ	チョローンホロート	ドルノド	1957	1992
57	ケルレン	ケルレン	ドルノド	1959	1992
58	サルヒト★	バローンオルト	スフバートル	1961	
59	スンベル	ハルハゴル	ドルノド	1972	1992
60	シャリソゴル	ダルハンオール	ダルハンオール	1959	1992
61	エグウール	エルデネボルガン	フブスグル	1959-60	1992
62	オルズ	バヤントゥメン	ドルノド	1930	1992
63	タムサグボラグ	マタド	ドルノド	1954	
64	かわうそ・鹿		ウランバートル市	1964	1992
65	ソグノゴル		ウランバートル市	1931	1992
66	トルホラハ		ウランバートル市	1963	1992

★印付きは乾草や飼料専門の農場で、無印が一般的な国营農場である。
1959年以前には行政単位の区域や名称の変更が著しいため、ここでは現在の行政単位に基づいて示す。

いるのである（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988-1 (1969): 240）。もう1つは、農業機械の導入に焦点があてられている点である。世界各地と同様に農業機械の導入こそは近代化にほかならなかった。そこで、トラクター運転手やコンバイン運転手、機械技師、農業技師らを養成する目的で、1948年から農牧業専門学校に農業学科が開設された（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988-2 (1969): 78）。

ロロムジャブは、このような初期段階について3つの社会変容としてまとめている（Rolomjav 1987: 57）。第1に土地を人民のものに取り戻したこと、第2に共同作業の意義を理解せしめたこと、第3に新しい農業技術を獲得するようになったこと。

けれど、こうした初期段階の最大の特徴は、農業従事者が誰であれ、旧来の耕地を踏襲しているという点であろう。これに対して、社会主義時代の農業が飛躍的に発展する1959年以降は、ソ連の、いわゆる処女地開拓の政策がモンゴルにも導入されたため、新規開拓事業となった点で、モンゴルにおける農業史の画期と言えよう。端的に述べれば、アタル以前とアタル以後の相違である。

1959年は、農牧業における社会主義的集団化がほぼ100%完成した年であると宣言されている。それまで自発性を重視して形成されていた諸組合を統廃合し、行政域と一対一対応させることとなった。組合総数を減らし、各組合の規模を大きくし、組合

がそのまま郡（ソム）という行政単位となった。モンゴルの場合、コルホーズに相当するのはネグデル *Negdel*（牧畜協同組合）であり、ソフホーズに相当するのはサンギン・アジ・アホイ *Sangiin Aji Akhui* と呼ばれる国営農場である。ネグデルは主として牧畜を担当し、そのほかにジャガイモや飼料作物の栽培も行った。一方、農業とりわけ小麦栽培を担ったのが国営農場であり、酪農を担当する国営農場なども首都近郊に建設された。

本稿の冒頭で紹介したように農業開発は現代用語としてしばしばアタル *atar* と略称される。アタルとは総じて未経験であることを指し、ガザル *gazar*（土地）と連語にしてアタル・ガザルと言えば未開墾地を意味する。それを開拓することは公式にアタル・ガザル・エゼムシフ *ezemshikh* と表現される²⁴⁾。通常、開拓行為を指してアタルと略称されることが多いので、本稿でもアタルの語だけで農業開発の意味に用いることとする。

図10は、1960年代以降の耕地の変化を示す。この図から、耕地が急増した時期は2度あることが読み取れるであろう。1959年から始まって1965年にピークを迎える波と、1976年に始まって1988年頃にピークを迎える波とである。これらの波がそれぞれ第1次アタルと、第2次アタルに相当する。

国営農場に関する歴史学的検証は、文書類や新聞などの残された記録を用いることによって今後大いに進捗すると期待しながら、本稿では、当事者へのインタビューを

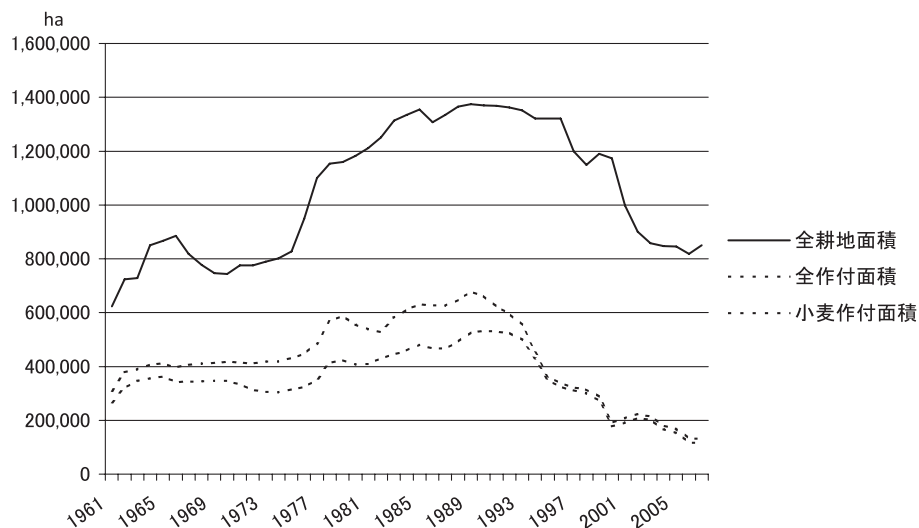


図10 農地の年次変化
 出典：FAOSTAT

試みてテキスト化した資料を用いて、当事者の記憶から農地開拓事業の実態に迫る。

社会主義時代の農業開発には、小麦栽培のための農地開拓のほか、野菜や果樹の栽培、豚や家禽類の飼養など各種の農牧業が含まれる。また、国营農場のほかにネグデル（牧畜協同組合）でも飼料作物やジャガイモの栽培を実施した。それらの多様な農業開発のうち、本稿では、国营農場の小麦栽培に的をしぼる。なぜなら、第1に、これまで述べてきたような「伝統的」な農耕と異なり、新しい方法が導入されたという質的な面において、第2に、現在もなお作付面積では約8割を占めているという量的な面において、ともに開発と保全の均衡を考察するうえで最も重要である、と判断されるからである。

4.1 第1次アタル（1959～1965年）

民主化後に改定された5巻からなる新しい正史には、第1次アタルに関してまとまった記載がある（Boldbaatar 2003: 312–313）。それによれば、1959年2月、党中央委員会と閣僚会議は「1959～1960年にかけてわが国の耕作を揺るぎなく増大させるために採る若干の方策について」という決定を下し、続いて第3回党中央委員会総会において未開墾地を開拓し、耕作を発展させる課題が提起された。とりわけ若い世代に対して「未開墾地を占有し、農業を発展させるにあたって尽力することは、わが国の若者の英雄的行為であり、荣誉である」というスローガンが提示された。1つの産業セクターの課題にとどまらない、熱狂的な社会運動（モンゴルでキャンペーンは、ロシア語を借用してカンパーニア *kampania* と呼ばれる）とする方針が採られたのだった。一般に「アタル（未開墾地）開拓のための全人民的運動」と称されていた。

1959年から1961年の3年間に30万haを耕すという目標が設定され、それを達成するためにソ連から1959年に自動車3,000台、トラクター2,500台、コンバイン500台、その他の農業機械類が導入された。古い正史のほうは1958年から1960年までの総数として、自動車3,000台、トラクター7,500台、コンバイン11,000台、発電機1,500台と記している（モンゴル科学アカデミー歴史研究所1988-2 (1969): 125）。いずれにせよ、大量の機械をソ連から供与されて奮迅した結果、1960年に早26万haの開拓に成功したため、目標は補正され、1961年に第2次が計画され、1965年までに1960年の81%増（47万ha）に達した。現在では、この2度にわたる計画をまとめて第1次アタルとして了解されている。

ロロムジャブによれば、1959年～1961年に新設された国营農場は、セレンゲ県のダルハン、ゼルテル、フブスグル県のエグウール、ドルノド県のケルレン、トゥブ県

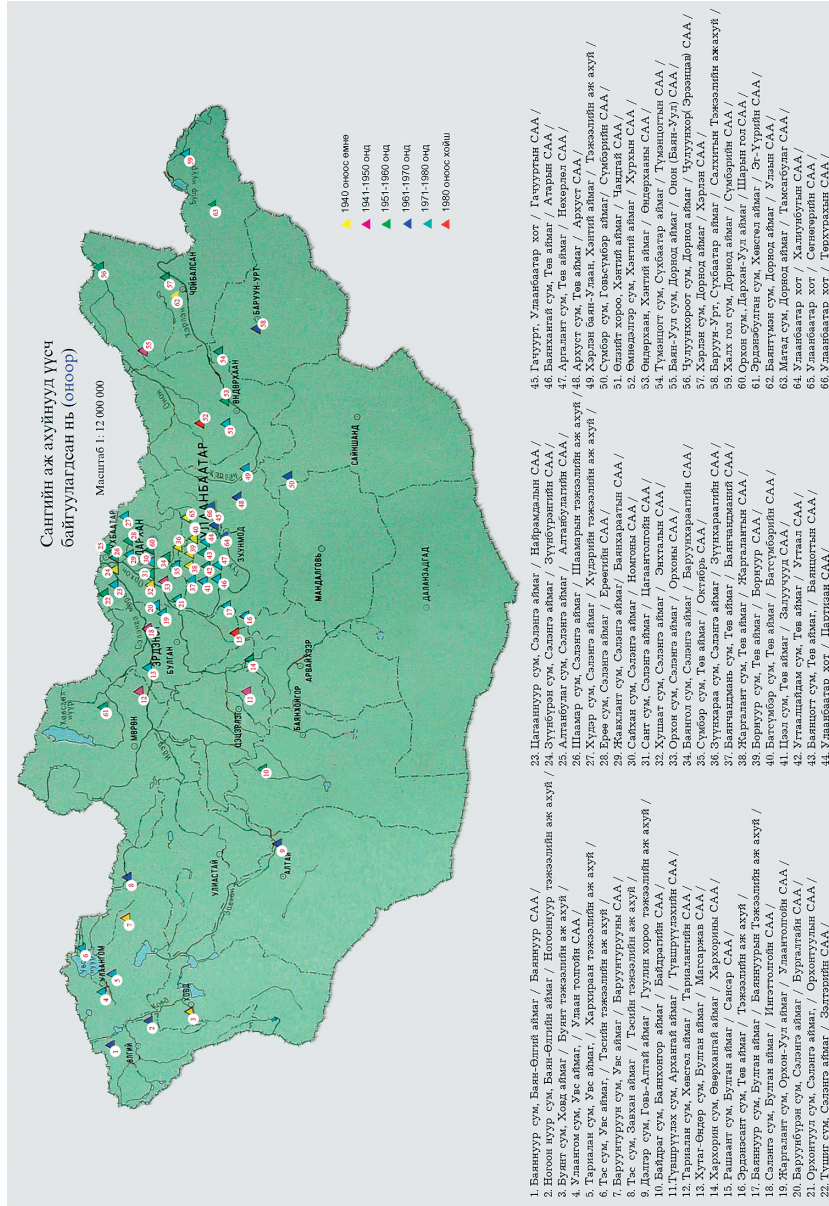


図 11 成立年代別の国営農場の分布

のバヤンツォグト、オクタル、スフバートル県のトゥメンツォグトであり、穀物栽培を主とする国営農場ジャルガラント、インゲトルゴイ、ツァガーントルゴイ、ズーンハラー、ユルー、ズーンブレンでの耕地も拡大させ、ネグデル（牧畜協同組合）での農地開拓も行った（Rolomjav 1987: 71-72）。それによって、面積や収穫が拡大したばかりでなく、1957年に小麦の単収は700 kg/haであったが、1960年には1,040 kg/haに増えて、質的にも向上した（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988-2 (1969): 125²⁵⁾。

ロロムジャブ自身は、第1次と第2次を区別することなくアタル政策史を記述しているけれども（1987年当時はそのような区別がなかったと思われる）、1976年1月29日に開催されたモンゴル人民革命党中央委員会第11回総会での「未開墾地を開拓し農業生産を増加させる件」という議題から、5つの成果が掲げられていたことを紹介している。第1に穀類の自給、第2に牧畜の高度化、第3に穀類および飼料に関する工業の発展、第4に機械化、第5に定住拠点の建設である（Rolomjav 1987: 77）。こうした成果をもたらしたアタルの、重要な条件のひとつがソ連からの技術的、経済的支援であり、例えば、専門家、技術者、農業技師、機械技師、それらのリーダー格21名をアドバイザーとして、総計300余の専門家が到来したという（Rolomjav 1987: 69）。実際にどのような支援であったかについては、当時の政策推進者から直接聞き取ることができる。

アタルを実施するために1956年に農業管理局長に任命されたのがTs. ローホーズ Lookhuuzである²⁶⁾。ソ連ではすでに、フルシチョフの提案に基づいて1954年2月、共産党中央委員会総会で「処女地・休耕地の開拓に関する決定」が採択されていたので、当該事業のモンゴル版が大きな政治目標として早晩モンゴルでも掲げられることは明らかであった。したがって、ローホーズ自身はこの任命について失敗したら失脚させられるという政治的な罨でもあったろうと認識しているほど（ローホーズ 2007: 97）、それは重要かつ困難な政策課題であった。

ローホーズによれば、1957、1958、1959年と連続的に党中央委員会総会で農業問題が議論され、国家計画委員会の委員長であったL. ツェンドと共に準備していた、という（ローホーズ 2007: 106）。彼の回想の中から²⁷⁾、当時の農業開発に関するいくつかの要点を以下にとりあげておこう。

〈訪ソとりわけカザフスタンの視察、ならびに専門家の招聘〉

政策実施に先立ち、ローホーズらはソ連農業省を訪問しており、2ヶ月滞在する間にしばしばカザフスタンの農場を現地視察していた、という（ローホーズ 2007: 66-

67)。この訪ソの帰国時、農場経営の専門家としてソ連農業省の財務局長をモンゴルに派遣するようにソ連側に依頼して成功している。

モンゴルで新しく組織された国営農場を実体化するには、広く経済学の知識があり、また新しく組織された国営農場の経営問題を知っている経験のある人が私には必要なのでした。モンゴルで私のアドバイザーとして3年余りセルゲイ・イワノビッチ・エリザロフはとても多くのことをしてくれました。当時はとても厳しい問題がありました。どんなことでも掌握している私たちの言葉よりも、ソ連から来ている専門家の言葉に耳を傾けるということですよ。ですから、中央委員会で議論する諸案件を決定する際には、S. I. エリザロフ氏が私にとって本当に大いなる支援となりました。

すなわち、ソ連人の助言のほうが重宝されるという政治的環境を利用した、という意味である。例えば、モンゴル鉄道にすでに導入されていた歩合給システムを国営農場に導入する計画を具体的に作成したものの、財務省は当初、反対していたので、その計画案を閣僚会議にかけ、その際にソ連人アドバイザーに発言してもらっている（ローホーズ 2007: 71-72）。また例えば、養鶏場の創設に関する反対についてもソ連人アドバイザーを同行して政策を有利に推進させている（ローホーズ 2007: 110）。

〈農業開拓をめぐる科学的根拠の獲得〉

そうした政策決定の局面ばかりではなく、どこに国営農場を設けるかといった科学的あるいは技術的な課題についても、ソ連の協力を仰いでいた（ローホーズ 2007: 68）。

ソ連農業省がYu. スタルコフという学者を長とする大規模な調査チームを派遣して来ました。この調査チームはモンゴルの土壌調査を総合的に行ない、農耕に利用できる全面積、農耕に適する地方を明らかにしました。それらすべてを示した地図を作ってくれました。彼らは、「モンゴルでは55万ヘクタールの未開地が農耕地として利用可能だ」ということを明確にしました。スタルコフを長とする調査チームの作ったモンゴル農業適切地域を示す地図は私の執務室につねに掲げてありました。

ローホーズが局長になる以前、1953年にそれまでの農業史をまとめたシュービン（Shubin 1953: 53）は、耕地の可能面積について、過去の調査結果を「真に受けるわけにはいかない」と批判的に検討しながら、開拓の可能性として最大304.8万haという見積もりをあげ（Shubin 1953: 53）、セレンゲ・オルホン川流域、オブス湖周辺、ゴビアルタイ、ケルレン川流域、ゴビオアシスという5つの地域を推挙していた（Shubin 1953: 93）。ローホーズの言う55万haという数値は、さらに少な目である。

〈農業専門家の養成〉

農業に関する専門家は、ロシア語からの借用であるアグロノムに人を表すモンゴル語の接尾辞としてチをつけて、アグロノムチ *agronomchi* と呼ばれる。徐々にモンゴル国内でも農業技師を養成できるようになった。

1959年に農牧業大学の農学科が卒業生を送り出しました。卒業をかなり早めたのです。卒業生はそのまま開墾地の国営農場へ行って働きました。ソ連のティミリャーゼフ農業アカデミーを卒業した人たちはわが国には数少なかったのです。専門家は全然足りませんでした。1つの国営農場には7、8人の農業技術者がいるべきでした。すべてではないとはいえ大半のところに専門家を配置しました。農場長の点では若干困難がありました。専門家が少なかったので、組織能力があり、一般常識を広く持ち、大衆と社交的に付き合える人を農場長に任命しました。以前に指導的な活動に携わったことのある経験者を任命したのです。他に方法はありませんでした。ソビエトの専門家は作付けと収穫の作業を手助けしました。

〈労働力の確保〉

国営農場の建設において大きな問題の1つに労働力の確保があった。というのも、以下のように、耕作に対する否定的な固定観念を打破し、意識改革を必要としたからである（ローホーズ 2007: 69）。

ただし、ここで問題がなかったのではなく、大いに問題がありました。とりわけ新しく建設した国営農場で働く労働者の確保が難問でした。家畜を放牧している遊牧民が家と家畜を放棄して土地を耕しに来るなどということはまれでした。ほとんどいなかったのです。そもそもモンゴル人は土地を耕すのが嫌いですよ。土地を耕して農作物を栽培するのは何よりも家畜の放牧地を破壊することなのでした。また一方で、「土地を耕して農作物を栽培するのは貧しい人の仕事である。ほかに生活する手段がない人びとが餓死しないように土地を耕し、農作物を栽培し、それを食べるのである！」という伝統的なモンゴル人の考え方があるのです。モンゴル人の脳に数千年もあるこの考え方を克服するのはとても難しいことでしたよ。「この思考を超えるには近代の科学と技術の双方が大いに役立った。他には何も役に立たなかった」と私は思っています。

一方、1950年代後半は牧畜協同組合を統合するにあたって大勢の遊牧民たちが家畜を失って首都へ移動してきていた、という（ローホーズ 2007: 70; ニヤムボー 2007: 176）。そうした人たちに対して国営農場は雇用の場を与えることとなった。つまり、政策によって失業した遊牧民への新たな雇用機会となったのである。若者を組織的にこの新産業分野に導入する役割を果たしたのは、モンゴル革命青年同盟（コムソモール）であった（ローホーズ 2007: 70）。

〈機械化のための人材養成〉

国営農場の労働者になるということは概してトラクターやコンバインを操作するということを意味する（ローホーズ 2007: 69）。

「トラクター運転手速成講座」を多くの県で実施し、青年たちは45日間の講習を受けたのち、トラクター運転免許を取得しました。ソビエトの専門家はわが国の青年の才能を高く評価していました。1959年、開墾で初の「労働英雄」が誕生しました。それはトラクター運転手のD. ビャムバツォグトでした²⁸⁾。この人は自分の割り当ての開墾計画を何度も超過達成して来ました。その後、アルハンガイ県のトゥブシルーレフ国営農場から労働英雄N. トワーンという人が誕生しました。

こうして国家による近代化プロジェクトのもとで「新しい人間」が実体化されていった。アタルを取り上げた文学作品として、例えばCh. チミド Chimid の小説『春と秋』（1962）や演劇『心の叫びから』（1959）がある。後者は都会で罪を犯した若者の〈再生〉の場所として国営農場が描かれており、1965年に映画化された（Jigjidsüren and Tsetseg 2005: 175, 421）。近代的な新しい経験を積み機会という意味で、国民全体にとって〈人生の偉大なる学校〉であることが芸術を通して国民全体に訴えられていたのである。同作家は第2次アタルの際にも、女性アグロノムチを主人公とする『大地の匂い』（1979）という映画の脚本を担当している（Jigjidsüren and Tsetseg 2005: 66, 421）。社会主義時代には、収穫期になると、労働力不足を補うために首都にある諸大学や諸職場から大勢の人びとが全国各地の国営農場に有給で派遣され（通常、8月15日から9月末までの45日間）、若者たちにとって出会いの場ともなっていた。

〈新しい生活様式の導入〉

清朝時代にも首都があったとはいえ、その住民がほとんど移住者であり、モンゴル人はもっぱら草原で遊牧に携わっていた社会にとって、近代的な農業の導入は、新しい生活様式の導入にほかならなかった（ローホーズ 2007: 109）。

「未開地開拓によってモンゴル農業に革命が起きた」と言われました。未開地の開墾によってわが国は小麦粉を完全自給したばかりでなく、伝統的生活様式にも大きな変化が起きました。農耕部門で働く人びとが定住や半定住の生活に移行し始めたのです。農耕にしたがって、かつてモンゴルにはまったく存在しなかった新しい経営が生まれました。農牧業部門に人びとが集まり、中心部や定住地が生まれました。文化・教育の発展の可能性が開かれたのです。国営農場の中心地は文化の一大中心地になりました。学校、幼稚園・

保育園，病院，通信局，文化会館といった施設が国営農場の中心地にできました。

ここに列挙されているような行政的サービスを遊牧民が受けられるようにする目的で，各県にソム（郡）やバグ（より下位の行政単位）の拠点が形成され，その拠点を利用すべく生活様式を半定住化し，一方で牧畜の生産様式はより頻繁に移動できるように指導されていた（利光 1983）。したがって，農耕地の開拓だけが生活様式の変化をもたらしたのではないが，首都や地方都市以外のいわゆる草原部においては，定住化ならびに半定住化の生活様式を牽引したのが国営農場という拠点であったことは，ここに語られている通りである。

〈農業開発の対象地域〉

以上のような手法によって，以下のような地域が初期の農業開拓の対象となった（ローホーズ 2007: 107）。

私たちは最初の開墾を，森林ステップ地帯の肥沃な黒土のあるオルホン・セレンゲ合流地点から始めました。西部諸県，ゴビ諸県，東部諸県では最初の年，開墾はそれほど行なわれませんでした。そういった地域は農耕ができるような，肥沃な黒土のある面積が小さかったのです。ヘンティー，ドルノド各県でも同様に，黒土のある土地は面積が小さかったのです。ソ連のチタ州と国境を接するエレーンツァブ国営農場にならいくらかあります。そこからこっち，ヘルレン国営農場，バヤンオール国営農場でも若干開墾をしました。フブスグル県のタリアラン国営農場，アルハンガイ県のトゥブシルレーフ国営農場，ウブルハンガイ県のハルホリン国営農場の各地では，大規模な未開墾地を耕しました。セレンゲ県のゼルテル，ツァガーンノール，ツァガーントルゴイ，アルタンボラグ，ユルーそしてダルハンの各国営農場，トゥブ県のジャルガラント国営農場では大規模な開墾を行ないました。

1 番初めに新しい土地の犁入れの式典をしたのは，ダルハン国営農場のツァイダム平原という場所でした。最初の犁を入れたのはそこです。この式典にはツェデンバル，サムボー，ジャグワラルなど党中央委員会政治局員が参加しに来ていました。

その後の第 2 次アタルと比較しながら，彼は次のようにも解説している（ローホーズ 2007: 78）。

わが国における農耕の発展の可能性は限られています。これは農耕を営むのに適した，肥沃な黒土のある土地が限られていることと関係があります。海拔 1,000 メートル以上は小麦ができません。それより低い土地の面積は，わが国では小さいのです。わが国全土の平均海拔は 1,500 メートルです。これは小麦の栽培に適した標高ではありません。農耕にもっとも適していると見なされるセレンゲ地方は海拔 900 メートル余りです。ハルハ河付近の地域もそのくらいの標高があります。アルタイの向こうのゴビもこのくらいの標高ですが，

そこには農耕に適した黒土はなく、黄色い粘土です。未開地開墾運動の開始前、ソ連から派遣されたスタルコフを頭とする調査チームが出した計算は、実情と非常に近い数値だと私は思います。スタルコフ率いる作業班はソ連で未開地開墾運動が始まる前に、農耕に利用できる黒土地帯を明らかにするための調査の経験がある学者たちでしたよ。彼らは、ここに小麦を作付けできる、ここにはできないということを非常に詳細に明らかにしてくれたのです。彼らは飛行機を使って、地域の最高・最低の標高を明らかにし、農耕に利用できるかどうかを明らかにしました。

後年、1970～1980年代にわが国は再び未開地開墾という名目で大規模な放牧地を台無しにしました。トゥブ県のルン郡より手前の広大な土地を耕し、作付けをしたのです。この地域は穀物や野菜の育つ条件の少ない、非常に劣った土壌の地域ですよ。ヘンティー県のステップ地帯もみな耕しました。これは科学的根拠なしに、調子に乗ってしたこと。ここでは決して好ましい収穫を得ることはできません。今ではすべて放棄されて、誰にも必要のない場所になりました。貴重な土地がこのように放牧地としての価値を失いました。こういった土地はもう修復することができません。このような土地では家畜が草を食いません。

私たちが最初に耕したオルホン・セレンゲ合流点やボルガン県の土地は現在でも高い収穫量をあげていますよ。私たちはかなりの科学的根拠をもってそういった地域を選択したと考えています。ですから長年のあいだ価値を失っていません。

以上のように、ソ連からは、政策を実施する局面における経営専門家による助言、研究者による科学的根拠の提示、農場現場での農業技術者による実践支援、開発資金の提供などあらゆる側面からの支援を得て、モンゴルでの新しい部門として機械化による大規模な農業開拓が推進された。

この農業開拓政策は1959年から1960年までは第2次5ヵ年計画（1954～1960年）に追加されるかたちで開始され、その後第3次5ヵ年計画（1961～1965年）として実施された。推進の責任者であったローホーズは、1964年、人民革命党中央委員会第6回総会で激しい政府批判の演説をしたことによって政界から追放されたが、すでにそれ以前の1962年にモスクワへ留学するという名目で政界から一時退避していたので、1962年の時点で次世代へ業務が委譲されていたと見てよいだろう。次世代の農業開拓政策のリーダーとしてSh. ゴンガードルジが挙げられる²⁹⁾。ローホーズと同様の証言をゴンガードルジから確認することもできる（ゴンガードルジ 2003: 179-186 など）。

ところが、続く第2次アタル（1976-1988）に対する評価については、当該事業に係わったゴンガードルジとそうでないローホーズとはまったく異なる。ゴンガードルジの語りは、両者を区別することなく、むしろそれらの成果が一切失われていたインタビュー当時 2001 年現在での農業問題が言及されるのに対して、ローホーズはインタビュー当時 2005 年現在での世論の慎重派を代弁するかのようになり、上述のように、第2次アタルを科学的根拠に基づいていなかった、と断定している。それではいった

い、第2次アタルはどのようなものだったのだろうか。本当に生態学的に適切ではない農業開拓が実施されたのであろうか。

4.2 第2次アタル（1976～1988年）

第2次アタルは、1976年から1982年、1982年から1988年の2度にわたる5ヶ年計画で推進された。民主化後に改定された新しい正史（第5巻）によれば（Boldbaatar 2003: 329）、1976年に「未開墾地を開拓し、農産物を増加することについて」議論され、新たに23万haの農地開拓が計画され、それを大きく上回る27万9,000haが開拓された、とある。初年度にノルマを上回るほど強力に推進されたと判断される。

図11と表1は、成立年代別の国営農場の分布とその名称等を示している³⁰⁾。まず、確認しておきたいことは、第1次アタル期も含めて国営農場の分布が民族学的な資料による農耕の分布とは明らかに異なっているという点である。旧来は表層水を利用できるニッチを利用して灌漑農業が行われてきたために、全国に農地が点在していた。それらのうち、西部や北部での「伝統的」な農耕地では、引き続き灌漑農業が推進された地域もあるけれども、社会主義時代の「近代的」な農業開発はもっぱら機械化を伴う乾燥農法として推進されたので、降水量に依存するため、その分布が北部に偏在することとなった（図11と図8を比較参照のこと）。

図11と表1（図にある番号は表のそれに等しい）を相互に参照することによって、第1次アタルが開始されるまでには全国に22ヶ所の国営農場があり、第1次アタルの当初（1959～1961年）に12ヶ所、それ以降の1960年代に8ヶ所が新設され、第2次アタル以降の1970年代後半からはもっぱら首都圏に集中して建設されていることが理解できる。

第2次アタルで新設されたことが確認される国営農場は以下の10ヶ所である（表1参照）。ウランバートル市を包み込むトゥブ（中央の意）県内に、アタル（＝未開墾）、ノホルル（＝友好）、オクチャブリ（＝十月革命）、ザローチョード（＝若者たち）、その北にあるセレンゲ県内にノムゴン（地名）、ナイラムダル（＝友好）、バヤンハラート（地名）、これらの2県の西側に隣接するボルガン県にマグサルジャヴ（人名）、サンサル（＝宇宙）、東方にヘンティー県のチャンドガイ（地名）である。中央県での設置は首都近郊であり、セレンゲ県とボルガン県の設置はセレンゲ川流域であり、最後者のヘンティー県の設置はケルレン川流域である。これらのうち、最後者を除いて、首都ウランバートルに続くダルハン（1965年に市として成立）、エルデネット（1976年に市として成立）の周辺に集中して建設され³¹⁾、農地開拓が進められ

た(図11参照)。

表1にあるように、第2次アタルが開始された1976年に、まさに「アタル」という名前の国営農場がトゥブ県バヤンハンガイ郡に建設された。その農場長であるタムジット氏のインタビューから³²⁾、その建設過程にかかわる要点を抜粋しておこう。

モンゴル人民革命党は今回も私の意向を聞くことなく、私はそのまま任命された。しかし、この任務は私にとって非常に好ましいものであった。それには大きな理由がある。1976年10月に行われた党中央委員会第11回総会で「未開墾地を開拓し、穀物を増産することについて」重要な決定が出されている。これはわが国で展開された第2次未開墾地開拓運動の端緒となった。こうして私にとって「第2次未開墾地開拓運動」へ参加するという素晴らしい機会が与えられた。

アタルという、国民を総動員する課題にリーダーの1人として参加したことに対して、いまなお自負をもっていることがうかがわれるであろう。彼自身によれば、具体的には、農場長として以下のような作業を行っている。

1. 農牧業省付属農牧業機械設備供給局からタイヤトラクター約10台、キャタピラトラクター9台、トラック7台、UAZ-469型ジープの購入
2. ゲル(天幕)約30張りの購入
3. 農牧業省にいるソ連専門家から助言を得て、耕作面積や種子の選定
4. 農業技師、畜産技師、獣医などの採用
5. 農場の命名
6. ソ連の建設トラストによる建物の建設
7. 家畜群の搬入、畜産部門の設立
8. 農業技術専門学校からの労働力の確保
9. 学校、商店など各種施設の建設
10. 収穫後の小麦の搬出
11. 他の農産物の生産

このように、国営農場の建設とは、新しい経済組織かつ地域コミュニティを創設することにほかならなかった。その管理運営に携わるのが農場長であり、農業の具体的な作業に関する指示は農業技師アグロノムチが担当した。アグロノムチは、耕起、播種、施肥、収穫など、その面積や位置およびそのタイミングを決定し、休閑期を設定して播種区域を決定した。また、灌水について、タムジット農場長は以下のように回想している。

わが国営農場で栽培していた小麦の品種は「サラトフー2」といった。この品種はモンゴルの気象条件下でも生育状態が良かった。作付けを終えてしまえば、水遣りの必要は特になかった。当時は雨も多かったのだ。当時、建設された国営農場の中には灌漑農業経営を行う国営農場はなかった。すべて天水でまかなっていた。作付作業に関して国営農場長の果たす役割はそれほど多くはない。わが国営農場の農業技師がすべてを行う。春、圃場を耕すことから始まって、種を蒔く、生長過程を管理する、施肥する、収穫時期を決めるといった耕作に関するすべての作業は専門の農業技師が担当し、実施していた。耕地を耕す、種を蒔く、収穫するといったすべての作業は機械設備で行う。人間の手で行う仕事はなかった。われわれは完全に機械化された農業経営を行っていたのだ。伝統的な人力による方法ではなかった。

このように、灌水の必要がなく、機械で農業を行うこと、すなわち「大規模な乾燥農法」の採用が、まさに当時の人びとにとって近代化の実現であり、そうした理解が十分に人びとに、少なくとも現場の指導者に、浸透していることが了解されよう。

タムジット氏は、インタビューに応じて、国営農場を新設する目的は、第1次アタルと同様であり、人口増加に伴う食糧供給問題の改善にあった、としている。ただし、とくにウランバートルやダルハンなどの都市の出現が食料需要を急激に増加させた、とも加えて語っている。図12に見るように、首都ウランバートルの人口増加に加え

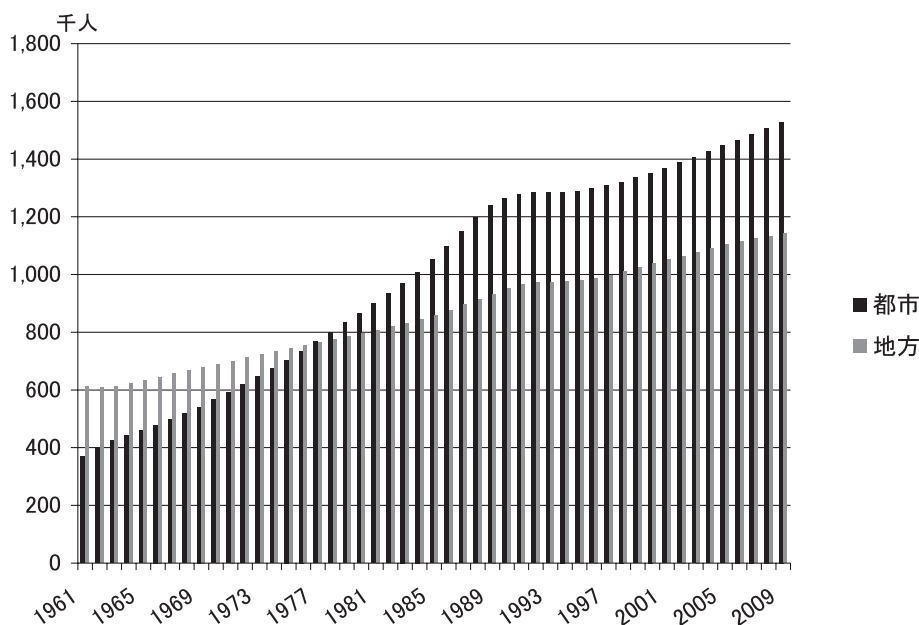


図12 都鄙人口の変化
出典：FAOSTAT

て、ダルハンやエルデネトなどの工業都市が建設された結果、1976年にはこれら都市部の人口が地方部の人口を上回るようになった。したがって、第2次アタルはまさにこうした人口配置の転換する時期に、単なる人口増加対策という以上に、都市人口の需要増大に対応する政策だったのである³³⁾。

第2次アタルに新設された国営農場の地域は、図8に示した降水量分布の観点から見れば、それ以前に建設されてきた国営農場と特段に異なるわけではなく、ほぼ同様の気象条件を備えている。さらに微地形や土壌を考慮して、上述で紹介したローホーズの依拠する見解のように「モンゴルでは55万haの未開地が農耕地として利用可能だ」ということであれば、農地総面積はすでに1960年代から60万haを超えており、それらのすべてが新規開拓でないにしても、1977年には100万haを超えていたので、不適切な地域での新規開拓もあったことになるだろう。しかしながら、アタルの最初の5年の成果としてソ連の研究者コノンコフ Kononkov 夫妻による『モンゴル国の農業』が1964年に刊行され、150万から170万haが農耕可能とみなした、という(Rolomjav 1984: 80)。そもそも、農業という人工的な営為に関しては、科学的根拠自体がきわめて可変的であり、幅があるものと了解すべきかもしれない。農地として最適ではないが不可能ではないところ、とでも言うておくのがよいだろう。いずれにせよ、第2次アタルの選定には、生産に適した自然条件に加えて消費地に近いという社会条件が大きく左右していたことは疑いない。

それでも、面積が増えると生産は増えた。生産量の年次変化(図13)は明らかに

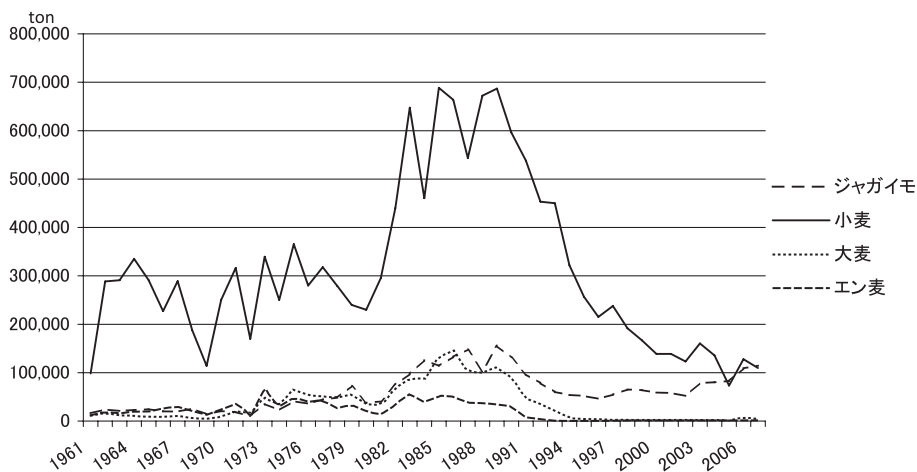


図13 農産物生産量の年次変化
出典：FAOSTAT

農地面積の年次変化（図 10）と関連している。これらのグラフの解説については次章で後述する。

こうした農業生産の増加によって、1980 年代は輸出も不可能ではなくなった（図 1 参照）。にもかかわらず、社会主義の崩壊とともに農業生産が急激に下落したことについては次章で述べる。

5 ポスト社会主義時代の農業生産

5.1 国営農場解体のプロセス

市場経済への移行に伴い、あらゆる産業方面で諸組織が解体もしくは民営化された。そうした移行過程について、途上国の急激な国際統合ないしグローバリゼーションを分析した大野によれば、モンゴル国はビッグバーン型に分類されており、急激な市場化改革が国民生活に大きな打撃をもたらした失敗類型のひとつと見なされている（大野 2000: 55）。というのも、開発援助のための経済学で知られる J. サックスのアドバイスを受けたとされるが、実際には市場原理主義にもとづく「ショック療法」が採用され、急激に自由主義体制へ移行したからである（ロッサビ 2007: 84-90）。

解体に先立って、国営農場にも牧畜協同組合にもトゥレース *türees* という契約関係が推進されていた。社会主義体制のもとで、契約に基づく私的経営を推進し、生産性を向上させていたのである。1986 年に農牧業大臣に就任したゴンガードルジは、2001 年のインタビューで当時を回想し、その手法が徒に放棄されたことについて、市場経済体制に移行する際に洗練されたモデルになっただろうに、と惜しんでいる（ゴンガードルジ 2003: 192）。

1991 年 5 月に民営化のための法律が国会で決議されると、国営農場や牧畜協同組合などの国営企業は直ちに、鉱物資源、運輸交通などを担う一部の企業を除いて、民営化された（Boldbaatar 2003: 422-423）。理念上は、民営化すべき国営企業の総資産が計算され、それを「投資権利書」と称される一種の有価証券にして国民に均等に配分するという方針が採られた（オチルバト 2001 (1996): 340）。当該権利書は、ポーランドなどの体制移行国諸国でバウチャーと呼ばれる資産引き換え券であり、モンゴルではクーポンないしビチグ *bichig*（書類の意味）とも呼ばれていた。民営化は大小の 2 種類に分けられ、それぞれ青色と桃色のバウチャーが対応した。これらの利用方法について国民のあいだに理解が浸透していなかったために大いなる混乱が生じた。本

来は、大民営化とは青色のバウチャー（ブルー・クーポン券）を使って大規模国有企業の株式を購入することであり、小民営化とは桃色のバウチャー（ピンク・クーポン券）を使って小規模国有企業の資産と交換することである（バトバヤル、バトヒシグ 1995: 153–154; 青木 1993: 97; ナムジム 1998: 185–186 など）。

1人あたり青色1枚（7,000 トゥグルク分）と桃色3枚（3,000 トゥグルク分）が配布されたが、それらをどう使うかは個人に任され、また、それを使って人びとが所属する組織をどのように民営化するかは、各組織に委ねられたため、実際には、事例によってかなり異なることが報告されている（風戸 2009: 140）。牧畜協同組合に比べて国営農場に関する解体プロセスに関しては報告がきわめて少ない³⁴⁾。国営農場が小さく解体されすぎたという反省から「3,000 ヘクタール以上の耕地をもつ株式会社を組織する」のが適当だという方針が1991年11月に政府から出された（二本 1993: 128）。しかし、国営農場の根本的な問題は、主たる生産手段が農地であるにもかかわらず、農地は分配の対象とならなかったことである。そのために後の2002年、首都ウランバートルのスフバートル広場にトラクターを乗り入れて農地の取得を求めるデモが行われたほどであった。解体後10年のあいだに、農地の占有権の取得に成功した農業企業家と、そうでない耕作者との格差が拡大したため、農業従事者のあいだで不満が募ったのである。

具体的な解体プロセスに関して、例えば、アタル国営農場の場合は、農業技師が以下のように証言している。要領を得た説明となっているので、長いがそのまま引用する。

私は1987年までトゥブ（＝中央）県の農業管理局に勤務し、その後、アタル国営農場で農業技師となった。トゥブ県には合計12ヶ所の国営農場があった。アタル、アルホス、ヌフルルなど計4ヶ所の飼料作物国営農場があった。これは栽培する作物の量に占める家畜飼料の割合が多い国営農場のことである。ここで栽培された家畜飼料は全県に配分されていた。雪が多く、寒い冬には家畜飼料は非常に重要となる。わが県のボルノール国営農場は野菜栽培で全国トップだった。

我々はこのような状況で1990年を迎えた。この頃から市場経済への移行が開始された。市場経済への移行の方法に大きな誤りがあったと我々は考えている。そのとき、全国的な国家資産の民営化が開始された。その当時、国家大会議で民営化法が制定され、我々はその法律に基づいて国営農場の民営化を行うことになったのである。この法律によって、わが「アタル飼料国営農場」を会社組織とし、独立採算制をとることになった。そして株券の発行を開始した。会社の資産をすべて分割し、割り当てられるべき本人に引き渡した。その結果、会社は47の小規模会社として分割されたのだ。例えば、以前にトラクターを運転していた人は会社からトラクターを得て、他の2、3人と共同で新たな会社を設立したのだ。こうして、こういった数多くの会社がそれぞれに事業を行い、利益や収入を得る必要があった。この状況は困難な課題をもたらした。その理由としては、この新たに設立された会社は事業を行うための流動資金を持たなかったからである。彼らが流動資金を得

ることはそもそも無理であった。この点がこの民営化の大きな間違いであった。事業を実施するためには、彼らは銀行から融資を受ける必要がある。しかし、銀行は融資を一応は行ったのだが、その利率は非常に高いものだった。銀行の融資の金利は一時、17%に達したといわれる。このような高率の銀行融資では、設立されてもない小規模会社には返済不可能である。なぜ銀行がそのように高い利率で融資を行っていたのかは私には理解できない。いや、そうではない、分かっているのだ。新たに設立された会社は民間会社であり、融資を行っている銀行は国営であった。国営銀行の融資政策は柔軟性に欠けた、非常に厳しいものであった。ここにも民営化のもう一つの誤りがあったと思う。国営銀行の融資の利率が柔軟性に欠けており、市場の需要に対応させることができなかったために、1、2年後には恐ろしい事態に至ったのだ。きわめて高利の融資を得てしまった各社は返済不能に陥った。こうして、農牧業分野の数多くの会社の経営が破綻し始めた。彼らは銀行融資の担保としてすべての資産を失ってしまったのだ。つまり、新たに設立された農牧業分野の小規模会社が国営銀行に喰いつくされたということである。しかし、一部の会社には担保にする資産さえなかった。結果として、銀行自身が支払能力を失った。こうして、さらに恐ろしい事態が引き起こされた。つまり銀行の破綻である。モンゴル経済にはこのような連鎖反応が生じてしまった。このような事態がモンゴル経済の悪化を招いたのだと思う。政治家はこういった事態について様々な説明を行ったが、一部にはこの政治から膨大な利益を得た人間もいたのだらう。現実にこのような事態が起こったのである。

この農業技師は、上記の語りから了解されるように、民主化を支持しつつも民営化の手法に誤りがあったと考えている。民営化の誤りとは、資金調達方法の整備の無さに尽きる。銀行からの資金調達は、第1に高金利であること（年利30～40%）、第2に短期返済であること（融資期間3ヶ月）、第3に審査に手間取ることという問題をはらんでいた。乾燥農法にとっては第3の難点も大きく影響する。なぜなら、灌漑せずに天水に依存するために播種のタイミングがきわめて重要であり、間に合うように出資されなければ、大きな収穫減すなわち収入減につながり、返済不能に陥るからである。

「アタル国営農場」が「アタル会社」として編成されたとき、そこには約1,500人が働いていた。全社員で総会を行い、「株券を引き渡して会社を出るか、従来通りに勤務するか」を問うたところ、「会社をやめない、従来通りにここで働きたい」という回答が出された。こうして「アタル」株式会社は自社の株券を発行し、そしてそれをトゥブ県の国家資産民営化委員会に提出した。しかし、ここでも大きな混乱が生じた。株価が下落し、一時は50トゥグルクにまで落ち込んだこともある。そのような理解不可能な事態が続いた。会社が利益を得られた場合のみ株券の配当金が支払われる。わが社は1992年に設立されたが、1997年までこのような状態が続き、その後、経営困難に陥り、会社を解散することが決定された。

モンゴルでは1994年に土地法が制定された。それを受けて、会社設立時から利用してきた土地の範囲を確定し、国に税金を納めることになった。当時、土地利用契約が発行されていた。1997年に会社の解散が決定したとき、裁判所の判決が出され、われわれが利用していた土地は国家資産となった。

1994年に制定された土地法は、1992年の新憲法で示された土地の私有化を実現するための基礎法であった。しかし、実際のところ、当該アタル会社が新しい土地法によって利用権を得た土地は、まさにその法律にしたがって、倒産後に国に没収された、ということになる。こうして、株主でもあり社員でもあった人びとには、値段のつかない株券のような紙切れが残った。

以上の語りは、一例にすぎないが、第2次アタルの事例としては普遍的ではないだろうか。今後、具体的な事例の調査が必要である。第1次アタルの事例としては、首都近郊の酪農場として1963年に設立されたガチョールトもまったく解体されてしまっていた（ミンジュール 2003: 105–108）。また、セレンゲ県の多くの旧国営農場では、複数の民間企業に解体されて、小規模ながら農業経営が維持されている³⁵⁾。開発時期に係わらず、民主化直前に53に上った国営農場について（二木 1993: 103）、解体や再生の過程あるいは人びとの試練について、まとまった実態調査は管見の限り、無い。勝者はその成功の秘密を黙して語らず、敗者にはその失敗を語っている暇は無いのかもしれない。

市場経済へ体制を移行する際、他のセクターに比べて先発的に回復する分野として、牧畜ばかりでなく穀物栽培のセクターも期待されていた（Russell et al. 2000: 54）。換言すれば、経済学的に *resilience* のある部門と判断されていた、と言えよう。しかしながら、実際のところ、農牧業のうちの耕種部門については、図15（生産量）や図1（自給率）に示されるように生産力はなかなか回復しなかった。

第1次アタルに比べて首都近郊という理由で開発された第2次アタルの地域は、消費市場までの距離がきわめて小さいという特徴があり、本来なら市場経済のもとで有利に機能するだろうメリットがあったにもかかわらず、それを活かす機会のないままに、耕作放棄地として残ることとなった。

耕作放棄地の総量は以下のように推定される。社会主義体制が維持されていた1989年の収穫面積は70万haであり、休閒地を含めると耕地は140万haと推定される。一方、第3次アタルが推進されるまでの2007年の作付面積はわずかに20万haであり、同じく休閒地を含めると40万haと推定される。その差100万haが耕作放棄地であると推定される。約20年にわたって耕作が放棄されていた地域は、おおよそ図14の写真のようにシャリルジ *sharilj*（ヨモギ属, *Artemisia*）のなかでもエーレム *eerem*・シャリルジ（ヨモギ属, *Artemisia macrocephala*, ちなみに中国名では大花蒿）のおいしげなる荒廃地になっている。シャリルジは、日本におけるスギ花粉のように、その花粉がアレルギー源として市民の健康を脅かしている。日本の水田の総面積が

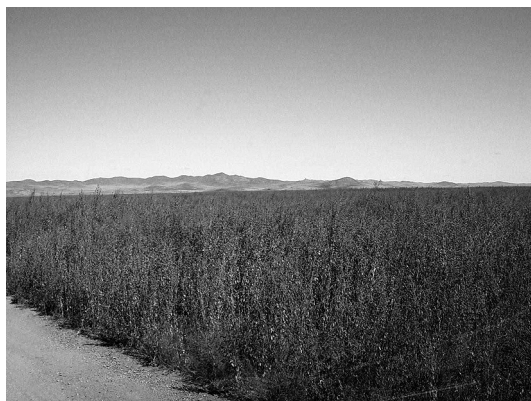


図 14 ヨモギ畑

190 万 ha であることと比べれば、いかに広大な面積が放棄され、民主化後の 20 年間、荒廃していたかが了解されよう。

旧国営農場がこうした荒廃地になってしまった原因は民営化の失敗にある。そして、問題の所在は、個別の組織の立場から微視的に見れば、上述の語りから明らかのように、資金調達の問題にあった。市場経済における市場とは、消費市場だけではなく、金融市場すなわち、資金調達の場も含まれていなければならないにもかかわらず、その整備がされないまま国営農場が解体された結果、経営破綻をもたらした。それゆえに、第 3 次アタル政策の焦点は、資金調達という問題の解消すなわち資金の提供となる。

5.2 第 3 次アタルについて（2008～2010 年）

農牧業省のホームページ（<http://www.mofa.gov.mn/mn>）は第 3 次アタルに関して QA コーナーなどを含む特設コーナーを設けて告知に努め、2010 年現在では第 3 次アタル専用の HP も設置されている（<http://www.atar3.mn>）。食糧自給をめざして、耕作放棄地の再開発を促す目的をもつ本政策の骨子は、耕種農業の設備投資に関する融資である。当初はトゥブ県、セレンゲ県など 11 県に対して総額 110 億トゥグルグ（2008 年 1 月当時のレートで約 100 万ドル、11 億円）のローン貸付金が予算化された。農業経営者は県に申請すれば、県から、農業用の機械を購入する等の費用の半分を融資してもらうことができる。使途が決まっているという意味で、いわゆるひも付き融資である。新規に購入しうる農業機械は、ロシア製トラクターや、カナダ製もしくはアメリカ製のスプリンクラーなど政府調達のものである。つまり、これらの農業機械を

購入することを条件に銀行から融資を受けることができる。

このような第3次アタルはどのように実施されているのであろうか。具体的な事例として、実際の農業経営者 UO 氏から聞き取り調査を行った³⁶⁾。その概要は以下のとおりである。

UO 氏は 40 歳代の鉱山技師である。鉱物資源探査のために、全国を調査する過程で、どこにどのような耕作放棄地があるかを知っていた。一方、国産の食糧や食品の価格が全般に高騰しており、食ビジネスは全般にチャンスがあるなかで、とりわけ穀物栽培は利の上がるビジネスだと判断して、小麦栽培のビジネスに参入した。食の安全性を確保するという観点からも好ましい。

具体的には、トゥブ（中央）県の東北部にあるモンゴンモリト郡で 1,200 ha を借用した。この利用権の設定を法的にモンゴルではエゼムシフ *ezemshikh*（占有権）という。農業技術については、地元のアグロノムチを顧問とし、自らは携わらない。1,200 ha での収穫目標は 400 ～ 500 t だというから、耕地の半分を休閑するとして単収を 0.67 ～ 0.83 t/ha（6.7 ～ 8.3 セントネル /ha）とみており、過去約半世紀の平均値（注 25 参照）よりやや低い。つまり、平均値より低くても利益があがるというわけであり、損益分岐点が低いようである。

政府の融資については、ひも付きである等の欠点が指摘され、より自由で、より低金利で、より長期の融資が受けられるように期待されている。インタビュー時点では同氏が融資を受けるかどうかは不明であった。

UO 氏の語りで興味深い点の 1 つは、穀類の栽培が家畜の飼料の製造にもなるという点について言及していることである。小麦のフスマが家畜の飼料となることを指しており、ビジネスの利点として語られている。首都周辺では、放牧範囲が小さく、放牧距離が短く、定住化傾向が強く、定住牧畜地域（富田 2008: 221）とされる状態にあり、そのために家畜飼料の需要が増大しており、耕種農業に対して牧畜からのニーズがあることを伝えている。つまり、耕種農業は牧畜の定住化をさらに推進すると考えられる。

以上は一事例にすぎないが、鉱産物資源開発会社が農業ビジネスに着手する例は他にも認められ、特異なことではない。モンゴルでは社会主義時代に、機械化され、天水にたより、大規模に行う産業として穀物栽培が導入された。それはほとんど鉱工業に類似していると言っても過言ではない。ただし、UO 氏が述べるように、一般に鉱物資源開発よりも農業開発のほうが持続的であると見なされる。たしかに、鉱産資源は埋蔵量が無くなれば終わるのに対して、農業開発は資源を採取するものではなく、

生産するものなので持続的ではある。しかし、実際のところ、収穫量が維持されるためには地力の維持に努めなければならない。例えば、上述のコノコフらは、「ジャルガント国营農場は 50 年利用した耕地の 1 ha から、雑草と闘い、化学肥料を投入して 19～30 セントネル (= 1.9～3 t) の小麦を収穫した」と記している (Rolomjav 1984: 80)。こうした成果の誇示はむしろ、継続的に利用するためには相当なコストがかかることを示唆している。以下、本章の最後にその点について考察を加える。

5.3 統計から把握される成果と問題

社会主義時代からポスト社会主義時代までの農地面積の拡大 (図 10) と収穫量の年次変化 (図 13) のうち、小麦栽培について重ねあわせたものが図 15 である。小麦の作付面積と生産量の関係はほぼ相関していることがうかがわれる。

そこで相関を示すと図 16 のようになる。1961 年から 2007 年までを通して、相関係数 0.83 と高い相関を示している。そのことはしかし、生産性が上がっていないということでもありうる。そこで、単位面積あたりの収穫量を算出して年次変化をあらわすと図 17 のようになる。全体として微増していることが確認され、単位面積当たりの収量の増加という、いわゆる土地生産性の向上はあったと認めてもよい。しかし、年変動は大きい。これこそ、乾燥地域の大きな特徴である。図 10 のように面積の増加と比較して、図 13 のように生産量のほうは変動が激しいのは、降水量や気温の年較差を大きく反映していると推測される³⁷⁾。

ここで、興味深い点は、図 16 の相関関係が一定ではないことである。40 万 ha を境にして分散が異なってくる。明示するために作付面積を 40 万 ha 以下と以上で分けて相関を示したのが図 18 である。40 万 ha 以上になると、勾配が大きく、いかにも「規模の経済」の原理が働いているように思われる (Russell et al. 2000: 155)。ただし、それ以外にも、化学肥料や自走式スプリンクラーの導入など技術的な変化による効果があったのかもしれない。ここで注意を喚起したいのは、そのように 40 万 ha を超えたときに期待値が大きくなっているという点ではなく、当り外れが大きくなっているという点である。40 万 ha を境にして、相関係数は 0.72 から 0.68 へと小さくなり、一方、変動係数は 0.26 から 0.30 へと大きくなる。生態学的な非均衡モデルが妥当とされる降水量の変動係数は 0.30 であることから見ると、まさに変動が問題となる閾値に入る。

このように、40 万 ha はいわば耕境であり、それ以上になると、降水量などの自然条件の変動が大きく影響して、投機的な農業になることを意味している。したがっ

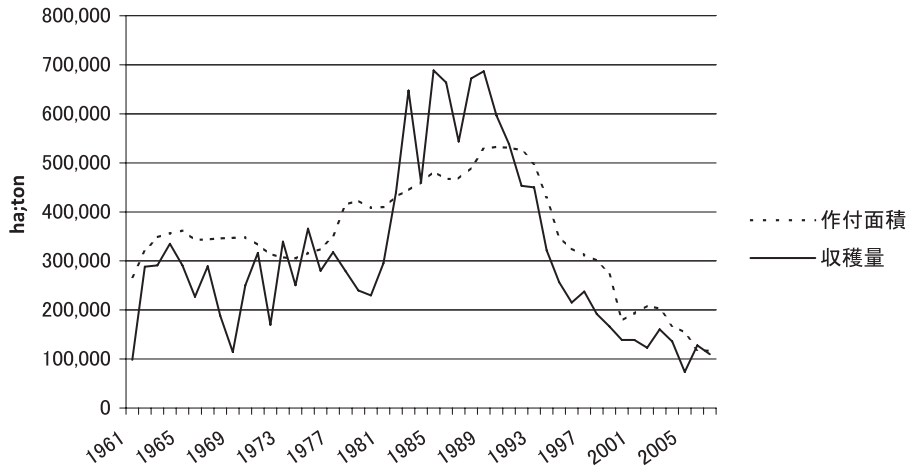


図 15 小麦の作付面積と生産量の年次変化
出典：FAOSTAT

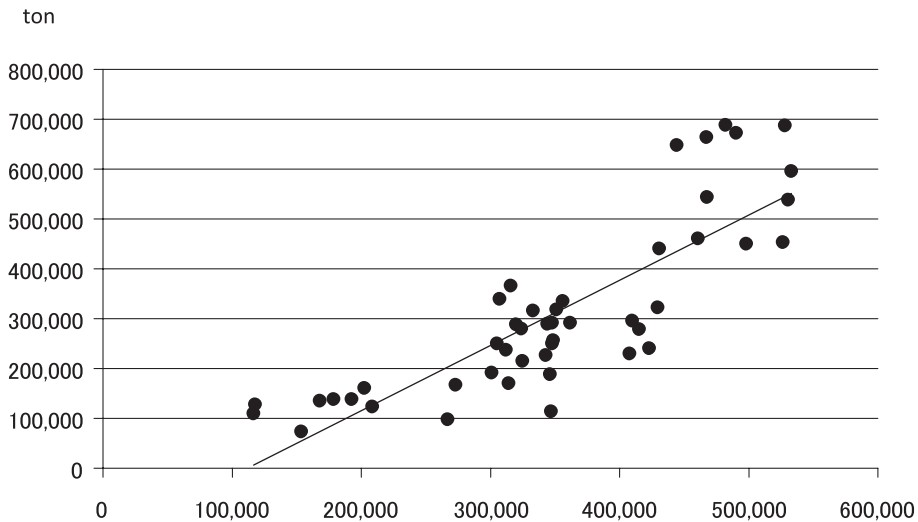


図 16 小麦の作付面積と生産量の相関関係
出典：FAOSTAT

て、モンゴル国全体で生産量の安定性あるいは社会的な持続可能性という点を考慮するならば、1つの基準として、全土における小麦栽培の作付面積はより適切な地域を選んだうえで40万haにとどめておくこと、そのための耕地面積は休閑地を考慮して80万haと設定しておくこと、が妥当ではないかと思われる。

2009年現在、作付面積は約27万haに達し、第3次アタル以来、毎年3万5,000ha

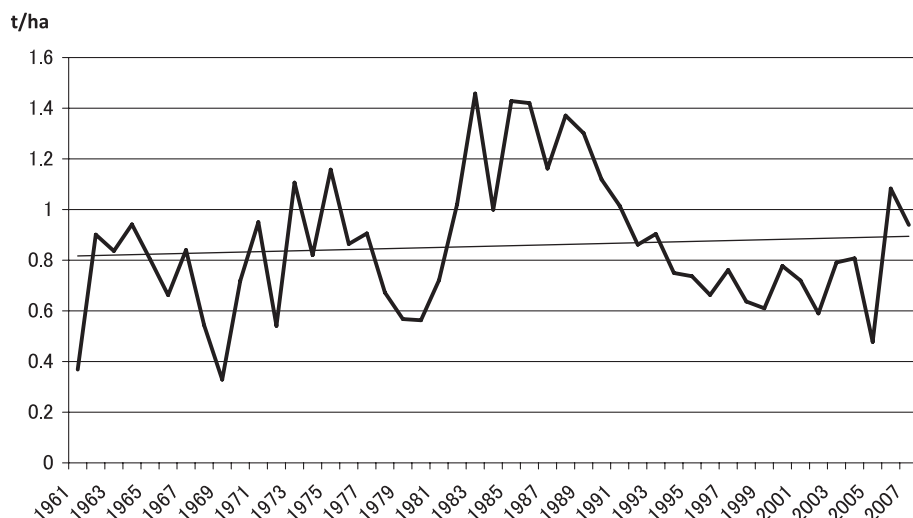


図 17 単位面積あたりの小麦生産量の年次変化

出典：FAOSTAT

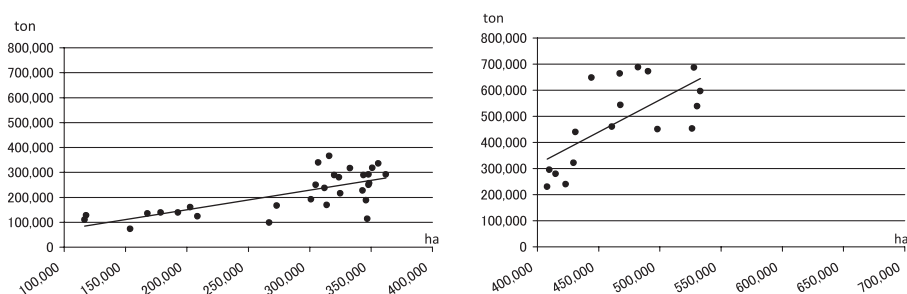


図 18 小麦の作付面積と生産量の相関関係（40 万 ha 未満と 40 万 ha 以上）

出典：FAOSTAT

の割合で増加した。もし、増加がこの速度のまま続くならば、2 年後には 40 万 ha に達する。リスクの大きな乾燥農法に関して、あらかじめ総量規制をしておくとするれば、40 万 ha 前後の設定が妥当であろう。総量規制について、これまでのように農学的な「科学的根拠」に求めると見解の差が大きい。過去の事例に即して言う、上述したようにローホーズが根拠とするスタルコフの 55 万 ha（ローホーズ 2007: 68）からシュービン（Shubin 1953: 53）が批判するシムコフ時代の 1,000 万 ha まで、ざっと 20 倍もの幅がある。そこで、代わりに、乾燥地域における年変動を重視して、過去の統計を参考にして総量規制を設定するなら、作付面積 40 万 ha と休閑地 40 万 ha とで耕地として合計 80 万 ha が目安となるに違いない。

先述したように、図5や図6に示された「伝統的」な農耕と、図11に示された国营農場の位置を比較すると、前者では表層水を利用できるスポットに応じて散在していたのに対して、後者では国土の北半分に偏在し、図8の降水量の分布に対応している。すなわち、穀物栽培の基本的な方針が小規模な灌漑農業から広域的な天水農業に転換されたことを意味している。それゆえに、天候に大きく依存する危険性は増したことになる。

6 今後の研究課題

2010年現在、市場経済への移行に伴う経済的混乱も収束し、ポスト社会主義期というよりもむしろ「ポスト移行期」にある。すでに、移行期を過去としてまとめて振り返ることができる時期なのである。移行期における諸課題のうち、遊牧を主たるなりわいとしてきた社会にとって最も大きなインパクトを与えたものとして、筆者はためらわず「土地の私有化」を挙げたい。

モンゴル国では1992年、民主化後の新憲法において土地私有化の方向性が提示され、続いて1994年に土地法が制定された。2002年になると、当該土地法の改正と同時に手続法としての土地私有化法が制定され、2003年から施行されている。この10年にわたる長期的な法整備期間に、法に先駆けて人びとは土地への投機と実質的な私有化の活動を展開した。法的整備とそれを見越した人びとの営利活動の結果、これまで土地が私有化されたことのなかったモンゴル国では未曾有の大変換期を迎えた。筆者はこれを「不動産社会化」と名づけている（小長谷2006、印刷中）。従来、動産社会であったモンゴルで、不動産の価値が高まり、価値観が大きく変換することを指している。土地法における「エゼムシフ（保有権あるいは占有権）」や「アシグラハ *ashiglakh*（利用権あるいは使用権）」の設定そのものはただちに土地私有化を意味しないが、「土地私有化過程」として位置づけられる。さらにそれは、従来、動産社会であったモンゴルの「不動産社会化過程」であると位置づけられる。

こうした土地私有化の流れは、ADBやIMFなどの国際金融機関による開発言説を受容する過程で決定的となった時代潮流である。そして、土地に対して個人的な所有権を設定すべきであるという考え方を支えていたのが「コモンズの悲劇」という言説であった（Sneath 2002）。また、「コモンズの悲劇」の言説とともに支配的な概念として利用されていたのが「牧養力」であった。単位面積あたりで何頭の家畜を飼うことができるか、という具体的な数字を使うことによって、コモンズの悲劇を回避するに

は、面積あたりの頭数制限が必要である、というわけである（例えば Russell et al. 2000: 173 など）。

しかし、遊牧には「牧養力」という概念や「コモンズの悲劇」という言説が論理的に整合しない。なぜなら、これらの概念や言説は、固定的な一定の放牧地を想定して構想されているのに対して、遊牧は自然条件の変動に対して自ら移動することによって適応するために一定の閉じられた系を想定していないからである。それを象徴するように、面積の単位を表す在来的なモンゴル語がなかった。ガザル *gazar*（土地の意）というモンゴル語は距離をも意味し、1 ガザルはおよそ 500 メートルであるけれども、その二乗を表現しうる単位はなかった。この端的な特徴に示されているように、面積は想定されない、もしくは空間は無限である（そのつど移動していけばよいから）ため、単位面積当たりで考察することによって成り立っている「牧養力」や「コモンズの悲劇」は遊牧にはなじまないのである。

このような直感的な理解は、今日では「非均衡モデル」（Behnke et al. 1993）という理論的な理解として決着するに至っている（上村 2004）。非均衡モデルとは、年間降水量の変動係数が 30% 以上もしくは 300 ～ 400 mm 以下であれば、一定の自然条件を前提にした制度構築が不適切であることを指す（Ellis et al. 1993）。「牧養力」や「コモンズの悲劇」は変動のない環境を想定しているという意味で、典型的な「均衡モデル」に属する概念である。これに対して、アフリカのような乾燥地域では自然条件の変動が激しいので「非均衡モデル」で理解しなければならない、という理解が提示されたのだった。

モンゴルでも、開発言説はすでに「均衡モデル」を脱却し、「非均衡モデル」に拠って私有化よりもむしろコモンズの積極的な応用へとシフトしている（Sneath 2002）。移行期の 20 年をかけて、ようやく遊牧にふさわしい生態学的理解をモンゴルは国際社会から借用することができるようになった³⁸⁾。

そもそも「コモンズの悲劇」に関しては悲劇ではない諸事例を収集して分析する研究が蓄積され（例えば Ostrom ed. 2002 など）、「コモンズのガバナンス」論（Ostrom 1990）がノーベル経済学賞に至っており、もはや「コモンズの悲劇」は支配的言説ではなくなった、と言える。しかしながら、賽はすでに投げられて久しい。土地の私有化の動きは加速しており、定着化の動きも加速している。つまり、非均衡モデルがふさわしい自然環境において、均衡モデル的な土地利用が進展してしまっているのである。生態学的には「非均衡モデル」がふさわしい環境であっても、土地利用の種類によっては「均衡モデル」や、それと軌を一にする「牧養力」という概念や「コモンズ

の悲劇」という言説が適切になりうる，ということである。

「牧養力」の原語は言うまでも無くキャリング・キャパシテイ carrying capacity であり，本来，文脈に応じて多角的に翻訳されてしかるべきである。あらかじめその汎用性を高めておくなら，「環境容量（一定の条件下での可能最大値）」となる。その意味で，先に述べた 40 万 ha という上限は，農業におけるキャリング・キャパシテイである。これまで遊牧に対して不適切にも導入されてきた諸概念を農業に適用して環境保全に役立てることは大いに可能であると思われる。

モンゴルで農牧業省に政策アドバイザーとして滞在していた日本人専門家によれば，世界銀行のレポートは，単収の大きな変動があるために小麦の自給は長期的にサステイナブルでないとみなしており，そうした不安定性を克服するためには，灌漑の導入が不可欠であること，しかしそれは河川水や地下水の減少および塩類集積といった危険性をはらんでいることを指摘している（小宮山 2009a: 16）。塩類が集積しないほどにたっぷりと灌水すれば，単収が上がり，全体としてより少ない面積で自給をめざすことができるだろう。また，天水の多寡による影響力も小さくなり，生産量の安定化を図ることもできるだろう。けれども，そのような灌漑の導入は根本的に水資源の枯渇を招く恐れがあるため，環境に影響力を及ぼす技術は社会的に制御されなければならないのである。その際の 1 つの実践的解として作付地 40 万 ha，休閑地を含めて 80 万 ha（全国土の 0.5%）という総量規制は，環境保全の目安となりうるのではないだろうか。

一般的に，鉱産資源を採りつくす鉱業よりも，農産物を作る農業のほうが，確かに持続的ではある。ただし，アグリ・ビジネスマンが語る持続性とは，ビジネスとしての持続性であって，自ら利用している土地について長期的に持続ができる，という意味ではない。アグリ・ビジネスマンは，土地法に基づいて，長期間の占有権を設定し，利用料を支払い，収量が低減すれば利用を途中で止めればよい。現行法のもとでは所有権を設定することができないので，むしろ保全を考える必要から解放されている。占有権者は土地法上，名目的に保全の義務を負っているものの，拘束力は弱く，別の土地をまた占有すればよい。現在の土地法は，土地を代々所有して生活として農業に従事する，といった農家には不向きだが，土地に投資して利を稼ぐアグリ・ビジネスマンにとってはきわめて都合がよいのである。法制度は明らかに，開発と保全の均衡を左右する制度的な主要因子であり，モンゴルの土地利用に関連する現行法では農業による乱開発を予防することはできない。

さらに付言すれば，牧地法案も重要である。当該法案は長年議論され，今なお成立

していないうちに、2009年冬の国会に提示された最新案は、過去の案に比べて著しく内容を変えた。2009年当時の最新案では、保全の義務に関してほとんど言及がなく、播種耕作や定住牧畜など土地への投資を必要とする土地利用転換がよりいっそう容易になる。明らかに、そうした農牧業ビジネスの推進力が内包されている。2010年現在もいまだ成立していない法案からは、法整備を迫り越して変化している社会の実情を看取することができるけれども、それについては今後の課題として取り置きたい。現段階ではひとまず、定着牧畜の進展にともなって、牧畜についても早晚、均衡モデルで考察しなければならないだろう点を指摘しておくにとどめる。

そもそも遊牧に関しても実は、夏のあいだ降雨に応じて草は成長し続けるため、人びとは夏の放牧地を無限の自然資源と捉えている一方、その他の季節の放牧地については有限と捉えている (Fernandez-Gimenez 1993: 42)。換言すれば、均衡モデルと非均衡モデルの双方を必要とする自然資源の利用が実践されてきたのである。さらに、昨今では、市場への近接性など社会資源の利用がより重要となるために、移動の縮小による定着化傾向が認められるとともに、定着牧畜そのものが推進されている。そのため、遊牧にも均衡モデルがふさわしい状況が展開している。これまでは、自然環境の差すなわち年間降水量の多寡ないしはその偏差の多寡に応じて、両モデルの適合性が指摘され (Fernandez-Gimenez et al. 1999: 882; Sneath 2003: 444)、あるいは両モデルの連続スペクトルとしての設定 (World Bank 2003: 3) が提案されてきたが、これからはむしろ社会環境の変容に応じて両モデルの適合性を判断しながら、開発と保全の均衡を考察していく必要があるだろう。

食糧の自給こそが経済上の目標であるならば、ブレ社会主義時代に実施されていて、長期的な持続が実証されている農業を再開することも、開発と保全の均衡に効を奏するだろう。

本稿では、農業という単語を狭義の耕種農業すなわち *cultivation* (耕作、植物の栽培) の意味で用い、とくに穀物栽培に焦点をあてて、その開発と保全の均衡を探るために歴史を概観した。その結果、モンゴル高原北部において耕種農業は、政治的文脈に応じて、自然条件を最大限に利用して開発されてきたことが確認された。かつてモンゴル高原の南辺部において、農耕と遊牧の境界の歴史の変遷について検討した地理学者は、自然現象ではなく人文現象であると断じたが (多田 1940: 20)、そこで示された実態的な境界よりもなお北部に位置しているモンゴル高原北部では、農耕に適したニッチが活用されてきた。そして、人間の自然への働きかけが妥当であるか否かは常に自然によって試されてきた、と言えるであろう。持続可能な地点で適切に持続さ

れている場合を除いて、持続不可能となった地点は放棄され、灌漑農業の場合はしばしば塩類集積地として、天水（乾燥）農業の場合はしばしばヨモギ畑として今日に至っている。

このような歴史的経験を通じて人びとは、農業に関する知識（自然に対する人為の技術についての知識）あるいは農業による自然からの応答に関する認識（人為に対応する自然環境そのものについての認識）を獲得していたと思われる。開拓と放棄を繰り返して断続的であり、かつまたつねに外発的な指導に誘導され、蓄積されてきた TEK は、必ずしも経験に裏打ちされた「伝統的な技術」だけの体系ではないだろう、と推測される。放棄された耕地は亡霊を生み出すこともあり³⁹⁾、禁忌の規範を生み出しうる一方で、収量の多い年は投機心をあおり、過剰なアクセスを生み出しうる。いずれにせよ、そうした認知 perception を含む広義の知識 knowledge に関する研究は管見の限りまだ無い。近代の農業開発に限定しても、もちろんその経済的効果については社会主義下の同時代から大いに喧伝されてきたけれども、人びとの知識や認識がいかに蓄積されてきたかという点や、大地に対してどのような結果として蓄積されてきたかという点についてはほとんど研究されておらず、今後の大きな課題となるだろう。すでに述べたように、社会主義以前から利用されていた全国に散在する耕作地点のうち国営農場の分布と一致するのは国土のおよそ北半分の部分に限られており、それら以外のスポットはむしろ牧畜協同組合の耕地として継続的に利用されている可能性がある。

本稿では、モンゴル本国の所掌官庁においてさえ整理されていなかった国営農場について不完全ながらひとまずリスト化し、地図化の作業を終えたので、今後の研究の基礎資料となる。それぞれの旧国営農場の歴史については、今後、地方史編纂の成果によって急速に進むだろうと期待される。

また、実践的な側面としては以下の2点について今後の課題が残っている。第1に、過去の負の遺産として言及した、耕作放棄地のヨモギによる荒廃については、植物学（藤田 2003 など）や土壌学（天谷 1980; 田村 2003; 浅野 2006 など）と協業することによって、実践的な研究が可能であると思われる。第2に、未来の負の遺産として予測的に言及した、土地法および牧地法の抱える問題については、法学（松本 2007 など）あるいは法社会学（棚沢 2006 など）と協業することによって、実践的な成果が得られるだろうと思われる。

備 考

本論文の脱稿後、2010年8月、モンゴルでの急激な農業再開発に関する調査を行った際に、元農牧省大臣ゴンガードルジ氏より、2009年11月3日に開催された、アタル50周年を記念する学会の論文集（ウランバートル、2009年）を譲り受けた。当該書には、ゴンガードルジ氏自身の筆になる農業簡史と、複数の研究者による、今後の農業開発上の課題が掲載されている。それらの内容を本稿に盛り込むことはできなかった。学際的な共同研究の進歩と合わせて後日に期したい。

注

- 1) 答弁の内容はニュースとしてウェブ上（<http://www.news.mn>）で一部公開された。また同様の報告は2009年11月6日付けで農牧業省のHP（http://www.mofa.mn/mn/index.php?option=com_content&view=article&id=205:2009-11-06-03-26-33&catid=1:latest-news&Itemid=279）に掲載されている。その邦訳は文末に参考資料として付した。なお、当該資料については総合地球環境学研究所のプロジェクト「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」（プロジェクトリーダー山村則男）により提供を受けた。記して感謝する。
- 2) 1961年から2007年までの自給率については、鈴木由紀夫氏より、FAO統計に基づいた試算を提供していただいた。記して厚く感謝する。なお、小麦粉の輸出入量を小麦量に換算するにあたっては、日本の農水省が国際農業統計で用いている係数0.72（小麦量＝小麦粉量／0.72）が用いられている。
- 3) 遊牧民に牧畜を指南する指導書は歴史的に数多く書かれてきた。例えば1853年に書かれた『ト・ワンの教え』（萩原1999）をはじめとして清代には「善書」と総称される指導書が広められていた。社会主義時代には農牧省大臣であったJ.サンボの『牧民に与ふる書』をはじめとして、家畜種ごと、あるいは地域ごとの指南書が多数作成された。ポスト社会主義期になると、ODAの一環として多種多様なマニュアルが作成された。さらに2009年現在ではモンゴル人研究者や実務者による、遊牧に関する20巻本シリーズが刊行され始めた。こうしたマニュアルの盛況はそれ自体、TEKの所在について改めて根本的な議論が必要であることを示しているだろう。
なお、『ト・ワンの教え』からは、東部のケレン川流域で一般のモンゴル人がギビを栽培していたらしいことが了解される（萩原1999: 231）。
- 4) 文献史料および研究蓄積が豊富な元朝時代とそれ以前に分けて概観する。モンゴル語文献については、モンゴル科学アカデミー歴史研究所所長チョローン氏のご教示によるところが大きい。記して厚く感謝する。
- 5) 「アラブの旅行記」（林1997: 110）という言葉について確かめるために、筆者である林俊雄氏より文献について直接、ご教示いただいた。記して感謝する。
- 6) チンカイ（1169?–1251）は漢字で田鎮海と綴り、ケレイト出身のモンゴル人であると伝えられている。チンギス・ハーンに仕えて侍従に任じられ、1219年、チンギス・ハーンがホラズムに侵攻するときにはモンゴル高原の守りに当たった。ウイグル式モンゴル文字を能くしたため、宮廷に仕えるビチクチ（書記官）になった。チンギスの後継者であるオゴデイ・ハーンも彼を登用し、文書官の最高責任者（ウルグ・ビチクチ）となった。南宋からの使者である徐霆の旅行記『黒韃事略』の疏には、チンカイがサインしなければ文書が発効しないと記されている（杉山2004: 451）。1241年のオゴデイ・ハーンの死去後は罷免され、その長男グユグが即位すると返り咲き、1248年のグユグ・ハーンの急死後は、次に即位したモンケ・ハーンによって謀判の疑いにより処刑された。ローマ教皇インケンティウス四世の命令により、モンゴルへ使いたカルピニの報告によれば（護1989: 83）、グユグ・ハーンから教皇への書簡は、チンカイらがモンゴル語からペルシア語に翻訳した（杉山1996: 117）。
- 7) 耕種農業に関して日本および日本人による各種の支援活動が行われてきた。ODAでは、国営農場の解体にも係わらずハラホリンに穀物倉庫を建設した案件が問題視されたが（栗林

- 2000: 8 など)、その後も種子の提供等が実施され、また NGO では、米作りや野菜栽培の指導など多様な活動が行われている。実践的な活動についてはいずれも特定の地域での小規模な活動であるために、本稿では考察の対象から外すこととする。
- 8) 例えば、中国内蒙古自治区アラシャン盟での聞き取りによれば、「チョルフル（ツォルヒルのこと——引用者注）と言う植物があります。この実でもまたザンバーを作ります」とある（小長谷・サランゲレル・児玉 2008: 46）。また本稿の 3.4 でも後述される。
 - 9) 邦訳にあたってはナチンションコル氏らにご協力を仰いだ。また訳注については応地利明氏にご指導を仰いだ。記して深く感謝する。
 - 10) 当該論文には自身の経験知が記されており、いつ頃まで農業が行われていたかについては、バトジャルガル氏ご自身からのご教示による。なお、同氏の土地法に関連したレポート『西モンゴル調査概要 2007』にも農業に関する記述は少なくない。当該レポートは名古屋大学から他の調査結果とともに刊行される予定である。
 - 11) 休閒期についてゴビアルタイ地域における伝統的な技術としてシュービンは評価している（Shubin 1953: 81）。
 - 12) 一般に、モンゴルでは清朝時代、寺院のもとに寄付されて集中した家畜群を貧民に再配分して委託放牧することによって（小長谷 2007: 38; 利光 1986）、寺院による富の再配分が実施されていたが、寺院の少ない西部においては穀類の分与という形で福祉が果たされていたと見なすことができるかもしれない。
 - 13) 両者の同質性と流入時期の差異など、詳細な比較はいまだ行われていない。また、ホブド県マンハン郡のザハチンのあいだに「トルド・タラーチンないしタラーンチ」という氏姓がある（Badamkhatan 1996a: 343）。断続的な移民の流れと混住の経緯が蓄積してきたと考えられる。
 - 14) 植物の同定についてはナチンションコル氏にご教示いただいた。記して厚く感謝する。
 - 15) シャラブ（1869–1939）は現在のゴビアルタイ県に生まれ、故郷の寺院で仏画の修行を積み、大麦の粒に絵を画くなどの才能で知られていた。したがって、その描かれた農耕シーンに西モンゴルの実態が反映されている可能性も否定はできない。ロマーキナの研究によれば（Lomakina 1974）、22 歳で上京してから、活仏のもとで庇護されながらも仏画ではない絵を頼まれずに描く、という性格から「マルザン *marzan*（ひねくれもの）」と呼ばれ、革命後は国立出版社に勤務してレーニンやモンゴルの闘士スフバートルの肖像画などを画いた（小長谷 1998: 30）。
 - 16) またそのほか、当該農業シーンに言及している数少ない研究例としてアウラガ遺跡の分析に関する論考がある（阿子島・中村 2006）。当該遺跡はモンゴル国東部のヘルレン川流域にあり、チンギス・ハーン時代の兵站基地であった、と推測されている（白石 2001: 85–86）。阿子島らは、当該遺跡周辺の耕作地後について検討し、継続的に利用されていなかったであろうことを明らかにすると同時に、過去の農業開発について、その持続性に関する歴史学的検討が必要である、と指摘している。
 - 17) A. D. シムコフ（1902–1942）は、コズロフ調査隊の一員として 1923 年に初めてモンゴルを訪れ、1927 年から典籍委員会（モンゴル科学アカデミーの前身）の職員となり、以来、モスクワへ召還される 1939 年までのあいだに 15 回に及ぶ調査隊を組織して、モンゴルをくまなく調べ、「歩く百科事典」と呼ばれた（Badarch et al. 2003: xi–xiii）。その著作集は、『国立民族学博物館調査報告』でシリーズとして 3 巻計 4 冊（Konagaya et al. 2007a; 2007b; 2008a; 2008b）で刊行されている。また、その刊行を記念する国際シンポジウムについても速記録が刊行されており（小長谷編 2007b）、同時にツォルモンによる伝記（ツォルモン 2007）も全訳掲載してある。
 - 18) 当該寺院に属した遊牧民たちの生活史に関するモノグラフ（Yündenbat 2009）は「リグ川の農耕」（本稿でいうレグ川のこと）という章を設けて当該地域の農業史についても詳しい。とくに V. D. ヤキモフによる調査報告から（Iakimov 1930）、灌漑の方法、耕地面積、収穫量などの実態が示されている。すなわち、もっぱら大麦を、ラクダによる犁耕で、収穫まで一般に 6 回の灌水によって栽培していた。農具としては犁型犁タイプ（図 5）、作物としては公的経営タイプ（図 6）であり、野菜、燕麦、キビなども栽培されていたので、本稿で示した類型としては北部タイプとみなしうる。また、1920 年代末に寺院での耕作が政策上禁止されると一度途絶えるが、1939 年春、「オラーンチフ」と呼ばれる人の発案によってウブルハンガイ県バロンバヤンオラーン郡のオラードブあたりの人家から種子をもらって耕作を再開し、1954 年からは「オラーンオチ」牧畜組合で本格的に農業が再開されたことなど

が知られる。

なお、国立中央古文書館には、清代の農耕に関する文献史料がボヤンチョールガン氏によって『モンゴルの農業史』としてまとめられていることも知られる。

- 19) ただし、オリジナルな調査者であった A. D. シムコフはスターリン時代の粛清の犠牲となったため、その名では言及されず、代わって E. M. ムルザーエフの業績（1948 年の『モンゴル人民共和国——自然地理学的記述』）として言及されている。なお、本書によりムルザーエフは 1951 年にスターリン国家賞を受けた。本書のテキスト、地図、写真の多くがシムコフの報告に依拠しているにもかかわらず、それについて言及はない（Rupen 1964: 289）。またシムコフは、1938 年の科学アカデミーによる西モンゴル調査について、耕地の配置、播種される穀物、収量、土地利用と灌漑のシステム、農家の戸数等のデータが集められたという手書きの報告が残っており、西モンゴルの農耕についても論文を書く予定であった（Konagaya et al. 2008b: 568）。しかし、粛清されたために日の目を見なかったのである。
- 20) 1928 年、コミンテルン第 6 回大会でのモンゴルからの報告に、中国人による耕地 36,624, ロシア人による耕地 1,860, 寺院による耕地 720, モンゴル人民による耕地 456（単位はデシャチーナ, 1 デシャチーナは 1.0925 ヘクタール）とあり、総じて約 4 万 4,000 ha の耕地があり、ほとんど漢人の耕作によるものであったことが了解される（Rolomjav 1987: 55）。
- 21) 16 歳以上のモンゴル人に 40 ウル, 16 歳未満のモンゴル人に 10 ウルの耕地が配分される規定であった。ウルは 1×360 アルド（アルドは尋。両手を水平に伸ばしたときの両端のあいだ、約 1.5 m）であるという（Rolomjav 1987: 51）。
- 22) 「民衆の希望によって」という表現は、組合等への参加申込書に必ず「自らの意思で」と書き込まれなければならないかったキーワード（ミンジュール 2003: 45）に類似しており、社会主義的集団化があくまでも「自発性」に基づくことを示す定型的表现であった可能性も高い。実際には、自発的ではない強制も少なくなかった（ニヤムボー 2007: 176）。
- 23) このように政策の路線が変更されたため、国営農場はいったん閉鎖されたり、再開されたりしており、個別の農場の通史的理解を妨げている。表 1 は、あくまでも作業途上ながら、読者に利するところがあると判断して本稿に掲げておいた。
- 24) エゼムシフは一般に占めるという意味をもつ。民主化以降、土地の私有化を促進するための一連の関連法においては、所有権と利用権の中間に位置する権利であり、占有権ないし保有権と邦訳されている。現在の人びとが自ら体験してきた近代化の歴史において、土地のエゼムシフとはまさに農業開拓を実態的に意味する言葉であったことは意味深い。つまり、土地私有化過程における占有権を示すモンゴル語は、モンゴルの歴史的経緯に即すると、土地に対して労働力や資本を投下することにほかならないのである。
- 25) FAOSTAT（国際連合食糧農業機関の農林水産統計データベース）を通じて一般に公開された、モンゴル国データを用いると、1961 年から 2007 年までで 0.86 t (8.6 セントネル) となり、社会主義時代（国営農場が解体される 1991 年まで）に限定すると 0.91 t (9.1 セントネル) と算出される。1 t/ha（1 ヘクタールで 10 セントネル）がモンゴル国における、小麦の平均収穫量の目安である。ただし、灌漑すれば平年単収 2 t/ha が期待され（小宮山 2009a: 15）、第 3 回アタルのもとでの資金を得て導入されている、大規模なセンターピット灌漑では 3～4 t の収穫を挙げているという（小宮山 2009b: 56）。
- 26) ローホーズ氏（1923–）は（本文中敬称略）、人民革命後まもない頃、現在のゴビアルタイ県チャンドマニ郡に生まれた。父は、貴族出身の僧侶であったために 1932 年に逮捕され、兄は軍隊に召集され、相次いで兄と母が死亡した。1934 年に小学校に入り、經理専門学校に進学するために 1939 年にウランバートルへ上京する。經理専門学校を卒業すると同時に指名されて党幹部学校にさらに進学し、1944 年の卒業時に人民革命党ウランバートル市委員会の教育宣伝課長に任命された。さらに同年秋には党中央委員会に講師局（後のマルクス・レーニン主義室）が新設されたので異動し、全国に向けて社会主義思想を普及するという責務を担った。その後、彼はモスクワへ留学して 1953 年に帰国すると、理論的に武装してツェデンバル書記長を批判するようになったため、疎んぜられるようになった。1954 年に地方に追われて、故郷ゴビアルタイ県の党委員会第 1 書記に任命された。ただし、そこで農牧業の課題に積極的に取り組んで好成績を残したため、1956 年に国営農場管理局長に任命された。失敗すればいつでも放逐されるほどの重大な職務を精力的にやりこなした。それゆえに、ツェデンバル書記長との確執は解消されるどころか、ますます深まった。そこで、1962 年秋、彼はみずから、留学という名目でモスクワへ退避し、ツェデンバル批判の準備を整え、1964 年末にモンゴル人民革命党中央委員会第 6 回総会に出席した。この総会での

批判によって「反逆者」とレッテルを貼られ、一介の遊牧民として地方に追放されることとなった。ただし、追放された地方で伝統工芸品を製作して裕福になった。そして、そのことがまた罪となり、投獄された。ようやく彼がウランバートルに帰還できたのは1989年である。

- 27) ローホーズへのインタビューは2005年6月にウランバートルで行った。彼の回想録はその全文がモンゴル語 (Lkhagvasüren and Konagaya 2007) と日本語でそれぞれ公開されているので参照されたい。
 モンゴル語文 http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/bitstream/10502/2020/1/SER72_001.pdf
 日本語文 http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/bitstream/10502/2016/1/SER71_002.pdf
- 28) 1958年にウランバートルで出版された『モンゴル人民共和国・宣伝員必携』(上)(下)には、国営農場で最初の労働英雄について詳細に記されている。それによれば、トゥブ県のユルー国営農場のトラクター労働者ナムジリン・ビヤムバツォクトは1950年から1958年までトラクター労働者として働き、技術能力熟練し、労働の非常な大成果を収めたので彼にモンゴル人民共和国人民大会議幹部会の命令によりモンゴル人民共和国労働英雄の称号を与え、チョイバルサン勲功章「アルタン・ソヨムボ」勲章を与えて表象した。N. ビヤムバツォクトは1954年に「ナティ」トラクターを使って1,300 haの土地を耕し、700 リットルの燃料を節約した。1956年には「DT-54」トラクターを使用して、1,000 haの土地を草刈し、既墾地 64 ha、処女地 150 haを開墾し、600 haに種子を播付け、耕地開墾 1,133 haに達し、1,300 リットルの燃料を節約した。また1957年には既墾地 1,400 haを耕し、年鑑計画を200余%達成した。このように活動して、N. ビヤムバツォクトは計画ノルマを7年間連続達成してわが国の社会主義農業に働く人々の中から一番最初にモンゴル人民共和国労働英雄の称号を勝ち得た」とある(宮地・木村 1977(1963): 76)。
- 29) ゴンガードルジ氏(1937-)は(本文中敬称略)、モンゴル国のなかでも農耕の伝統の非常に少ないドルノゴビに生まれた。1954年にモスクワ大学へ留学予定だったところ、期せずして著名なティミリャゼフ農業単科大学で学ぶこととなり、1960年に帰国して早々、短期間の実地勤務を経て、ローホーズのもとで国営農場管理局に勤務した。第1次アタルをローホーズのもとで実施し、ローホーズ追放後も第2次アタルが始まるまでのあいだ、1968年から1975年までのあいだ農牧業省の第1副大臣を務めていた。その後も農牧業省大臣や首相を務めている。ゴンガードルジへのインタビューは2001年8月に実施した。その全文はモンゴル語と日本語でそれぞれ公開されている。
 モンゴル語文 http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/bitstream/10502/1590/1/SER42_001.pdf
 日本語文 http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/bitstream/10502/1585/1/SER41_005.pdf
 また、その抜粋は一般書にもまとめている(小長谷 2004)。
- 30) 国営農場の分布は、モンゴル人民共和国地図帳(1988)に依拠しているが、その具体的な名称と成立経緯等についてはチョローン氏にご教示いただいた。総合地球環境学研究所のプロジェクト「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」(プロジェクトリーダー山村則男)での成果である。
- 31) 3大都市を含む首都圏での国営農場のうち、オクチャブリは1929年設立のジャルガラントから、ザローチョードは1959年設立のオクタルから、ノムゴンは1972年設立のオルホントールから、ナイラムダルは1959年設立のゼルゲルから、バヤンハラートは1959年設立のユルーから独立した。したがって、農業地区として設定されていた地域において、実質的な農地化が進展した、と言えるだろう。また、バヤンチャンドマニは、1958年に農業技術者養成所が設置され、後に1979年から兵糧のための国営農場となった。なお、オブス県タリャラン郡のオラントルゴイ国営農場は1979年にゴールデンベリー(モンゴル語でチャツアルガナ)の栽培のために設立されたものである。
- 32) タムジット氏(1938-)は(本文中敬称略)、ザブハン県テルメン郡の生まれで小学校を卒業してから、県中心地でモンゴル革命青年同盟の呼びかけに応じて、友人と共にトラクター運転手の教習を受ける予定であったが、1人取り残され、革命青年同盟の組織化の仕事に携わることとなった。働きながら夜間中学を卒業したのち、ウランバートルの財務専務学校を卒業し、成績優秀なために国家計画委員会下の革命青年同盟委員長に任命された。モスクワにも留学し、全国各地の労働委員長等を務めたのち、1976年、突然、国営農場長を命じられ、当該農場はアタルと命名された。彼に対するインタビューは2008年9月12日に行った。その全文は本稿末尾に掲載する。このインタビューと邦訳は、名古屋大学加藤久和教授をリーダーとする科学研究費補助金「モンゴル国の土地法制に関する法社会学的研究」の資金を得

- で行われた。記して感謝する。
- 33) モンゴルの都市化を受けて始まった 1970 年代の農業開拓は、明らかに首都圏での自給という地域経済的な発想を持っていた。モンゴル国では広大な国土に希薄な人口が分散的に居住するため、交通や運輸の便が一般に悪く、そのため経済発展に大きな支障をもたらしていると人びとは考えている。それゆえに距離コストのかからないように首都圏で農業生産を自給するという計画が策定されており、市場経済へ移行した時点でもなお農牧業省はそのようなプランを有していた。
- 34) 国营農場のうち酪農場であった組織については、その解体について言及している研究 (ZOLZAYA 2005) や、その後の酪農経営状況についての研究がある (トウシンバット, ダワスレン・新沼 2008)。解体プロセスについてもまた農業とりわけ耕種農業についての研究は牧畜に比べて等閑視されてきた、と言える。
- 35) 科学研究費補助金「モンゴル国の土地法制に関する法社会学的研究」(代表者: 加藤久和) のなかで、棚澤能生と雨宮洋美がセレンゲ県の農耕地域に関する調査を担当し、解体過程と実態を明らかにした。その報告は名古屋大学から刊行される予定である。
- 36) 科学研究費補助金「モンゴル国の土地法制に関する法社会学的研究」(代表者: 加藤久和) の途中経過を公開するシンポジウムがウランバートルで実施された際に、インタビューを実施し、その邦訳も当該研究費によるものである。邦訳の全文を本稿末尾に掲載しておく。なお、インタビューの段取りからモンゴル語のテキスト化にいたるまでは I. ルハグワスレン氏に協力を仰いだ。記して感謝する。
- 37) 降水量については 1 つの観測地点のデータであり、一方、生産量は全国の合計であるために、データの質が整合せず、統計的に証明できない。ただし、県レベルではすでに証明されている。セレンゲ県において、1999 年から 2008 年まで 10 年間の、小麦を含む穀物の単収と、県内の観測地点における 5 ～ 6 月の降水量の合計との相関係数が 0.93 と算出されており (小宮山 2009a: 14)、初夏の雨と収量との相関関係が明瞭である。
- 38) 梅棹忠夫は「ボドとシュトツ—牧畜生態学の断面」(1953) で牧畜経済の単位が、家畜にあるモンゴルと、草原にあるヨーロッパとの比較というかたちで、原理的な差異に言及していた。結論としては「文化の問題である」としながらも (梅棹 1990: 392)、立論の過程ではモンゴルで平衡論が成立しない理由について「現状が、飽和にはるかとおいもの」だからであるとみなしていた (梅棹 1990: 391)。換言すれば、ヨーロッパでは飽和に近いから均衡論が成立し、モンゴルでは過疎であるために均衡論ではない、と量の問題として論じていたことになる。
- 39) チンカイ屯田付近には「鬼子」の伝説があり、清朝時代の漢人の侵入に伴うと推測されている (村岡 2006: 40)。外来の「他者」が不在になると、そこに幽霊が出るという現象は、21 世紀の今日も確認されることである (Delaplace 2010)。

文 献

日本語文献

青木信治編

1993 『変革下のモンゴル国経済』東京: アジア経済研究所。

阿子島功・中村篤志

2006 「モンゴル東部スージン平原の耕作跡について」『山形大学歴史・地理・人類学論集』7: 1-17。

浅野真希

2006 「モンゴル国北東部における草原土壌の特性および環境要因との相互作用について」『ユーラシア研究』35: 58-62。

天谷孝夫

1980 「モンゴル農地土壌とその改良」『モンゴル研究』11: 18-27。

- 内田吟風ほか訳注
1971 『騎馬民族史1 正史北狄伝』 東京：平凡社（東洋文庫 197）。
- 梅棹忠夫
1990 「ボドとシュトッス」『モンゴル研究』（梅棹忠夫著作集第2巻）pp. 311-391, 東京：中央公論社。
- 応地利明
1987 「犁の系譜と稲作」渡部忠世編『アジア稲作文化の生態基盤——技術とエコロジー』（稲のアジア史第1巻）pp. 167-212, 東京：小学館。
- 大野健一
2000 『途上国のグローバリゼーション——自立的発展は可能か』 東京：東洋経済新報社。
- 大葉昇一
1982 「モンゴル帝国＝元朝の称海屯田について」『史観』 106: 82-95。
- 大村敬一
2002 「伝統的な生態学的知識」という名の神話を超えて——交差点としての民族誌の提言」『国立民族学博物館研究報告』 27(1): 25-120。
- 尾崎孝弘
2010 「社会主義から民主化へ」白石典之編著『チンギス・カンの戒め——モンゴル草原と地球環境問題』 pp. 141-159, 東京：同成社。
- オチルバト, P.
2001 (1996) 『モンゴル国初代大統領オチルバト回想録』 内田敦之ほか訳, 東京：明石書店。
- 小畑弘己
2010 「遊牧民族と農耕——古民族植物学からみた漠北」白石典之編著『チンギス・カンの戒め——モンゴル草原と地球環境問題』 pp. 101-116, 東京：同成社。
- 風戸真理
2006 「遊牧民の離合集散と世話のやける家畜たち——モンゴル国アルハンガイ県におけるヒツジ・ヤギの日帰り放牧をめぐる労働の組織化と群れ管理」『アジア・アフリカ地域研究』 6(1): 1-43。
2009 『現代モンゴル遊牧民の民族誌——ポスト社会主義を生きる』 東京：世界思想社。
- 上村 明
2004 「ポスト社会主義モンゴル国の牧畜における土地利用——開発の論理と遊牧の実践」（名古屋大学で開催されたモンゴル法研究会でのレジメは下記のアドレスでウェブ上に提示されている。）http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/kamimura/docs/pastureland_use_in_Mongolia.pdf
- 栗林純夫
2000 「モンゴル農業の現状と経済協力の課題」『国際農林業協力』 22(9): 27-28。
- 棚沢能生
2006 「シンポジウム：論点と課題」『名古屋大学法政国際教育協力研究センターニュースレター』 No. 19: 9-11。
- 小長谷有紀
1997 「モンゴルにおける出産期のヒツジ・ヤギの母子関係への介入」『民族学研究』 64(1): 76-95。
1998 「モンゴルのプリューゲル ひねくれものシャラブ」小長谷有紀・楊海英 共編『草原の遊牧文明——大モンゴル展によせて』 p. 30, 大阪：千里文化財団。
2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人びとの証言』 東京：中央公論新社。
2006 「不動産社会へと転換しつつあるモンゴル」『朝日 21 関西スクエア』 会報 81 号：1。
2007 「モンゴル牧畜システムの特徴と変容」『E-journal GEO』 2(1): 34-42。
2008 「食の安全から、環境の保全へ」『天地人』 2: 15。
印刷中 「草地における現状と課題」『平成 17-20 年度科学研究費補助金〔基礎研究（A）〕「モンゴル国の土地法制に関する法社会学的研究」（研究代表者：加藤久和）研究成果報告書』。
- 小長谷有紀編
2003 『モンゴル国における 20 世紀——社会主義を生きた人びとの証言』（国立民族学博物館調査報告 41）大阪：国立民族学博物館。

- 2007a 『モンゴル国における 20 世紀 (2) ——社会主義を闘った人びとの証言』(国立民族学博物館調査報告 71) 大阪: 国立民族学博物館。
- 2007b 『モンゴル国における社会主義的近代化——シムコフ資料の再評価から』国立民族学博物館・機関研究「社会主義的近代化の経験に関する歴史人類学的研究」プロジェクト。
- 小長谷有紀・サランゲレル・児玉香葉子
2008 『オーラルヒストリー——エジネーに生きる母たちの生涯』京都: 総合地球環境学研究所。(中国語・蒙古語・日本語版)
- 小宮山博
2009a 「モンゴル国の小麦自給に向けた取組みと課題」『日本とモンゴル』118: 6-16。
2009b 「遊牧の国モンゴルの農牧業事情」『農業』1527: 52-56。
- ゴンガールドジ, Sh.
2003 「モンゴルの大地を切り開いた政治家——モンゴル国国家大会議議員 シャラビン・ゴンガールドジは語る」小長谷有紀編『モンゴル国における 20 世紀』(国立民族学博物館調査報告 41) pp. 175-202, 大阪: 国立民族学博物館。
- 佐口 透
1986 『新疆民族史研究』東京: 吉川弘文館。
- 佐口透ほか訳注
1972 『騎馬民族史 2 正史北狄伝』東京: 平凡社 (東洋文庫 223)。
- 佐藤憲行
2009 『清代ハルハ・モンゴルの都市に関する研究——18 世紀末から 19 世紀半ばまでのプレーを例に』東京: 学術出版会。
- 沢田 勲
1996 『匈奴——古代遊牧国家の興亡』東京: 東方書店。
- 島田正郎
1993 『契丹国——遊牧の民キタイの王朝』東京: 東方書店。
- 白石典之
2001 『チンギス・カンの考古学』東京: 同成社。
2002 『モンゴル帝国史の考古学的研究』東京: 同成社。
- 白石典之・相馬秀廣・加藤雄三・A. エンフトル
2009 「モンゴル国フンフレイ遺跡群の調査とその意義——元代「孔古烈倉」の基礎的研究」『国立民族学博物館研究報告』33(4): 599-638。
- 白石典之編著
2010 『チンギス・カンの戒め——モンゴル草原と地球環境問題』東京: 同成社。
- 杉山正明
1996 『モンゴル帝国の興亡』(上) 東京: 講談社 (講談社現代新書)。
2004 『モンゴル帝国と大元ウルス』京都: 京都大学学術出版会。
- 相馬秀廣
2010 「農業とともに歩む」白石典之編著『チンギス・カンの戒め——モンゴル草原と地球環境問題』pp. 184-197, 東京: 同成社。
- 多田文男
1940 「内蒙古に於ける農耕地帯と遊牧地帯の境界線とその移動」京城帝国大学大陸文化研究会編『大陸文化研究』pp. 337-356, 東京: 岩波書店。
- 田村憲司
2003 「モンゴル草原の土壤保全にむけて——土壤学から見たモンゴル高原」『科学』73-5(849): 541-545。
- 張 穆
1939 『蒙古游牧記』須佐嘉橘訳, 開明堂出版部。
- ツオルモン, P.
2007 (1990) 小長谷有紀訳「黄毛のダムディンスレンと呼ばれた A. D. シムコフ」小長谷有紀編『モンゴル国における社会主義的近代化——シムコフ資料の再評価から』国立民族学博物館・機関研究「社会主義的近代化に関する歴史人類学的研究」プロジェクト, pp. 58-82。

- トウシンバット, ダワースレン・新沼勝利
 2008 「市場経済移行に伴うモンゴル農業経営の変化——都市近郊における酪農経営を事例として」『農村研究』106: 96-107。
- 利光有紀
 1983 「“オトル” ノート——モンゴルの移動牧畜をめぐる」『人文地理』35(6): 68-79。
 1986 「モンゴルにおける家畜預託の慣行」『史林』69(5): 770-794。
- 富田敬大
 2008 「ポスト社会主義モンゴル国における遊牧民と土地私有化政策」『Core Ethics』4: 213-225。
- ナムジム, T.
 1998 『モンゴルの過去と現在』(上・下) 村井宗行訳, 兵庫: 日本・モンゴル民族博物館。
- ニャムボー, B.
 2007 「B. ニャムボー——正直を貫いた政治家」小長谷有紀編『モンゴル国における20世紀(2)——社会主義を闘った人びとの証言』(国立民族学博物館調査報告 71) pp. 157-219, 大阪: 国立民族学博物館。
- 蓮見治雄
 1993 『図説モンゴルの遊牧民』東京: 新人物往来社。
- 萩原 守
 1998 「遊牧世界に垣間見る農耕風景」小長谷有紀・楊海英共編著『草原の遊牧文明——大モンゴル展によせて』pp. 100-102, 大阪: 千里文化財団。
 1999 「『ト・ワンの教え』について——19世紀ハルハ・モンゴルにおける遊牧生活の教訓書」松原正毅・小長谷有紀・佐々木史郎共編『ユーラシア遊牧社会の歴史と現在』(国立民族学博物館研究報告別冊) 20: 213-285。
- バトバヤル, バトヒシグ
 1995 「モンゴルの市場経済移行と国有企業民営化」丸山信郎『アジア社会主義諸国の体制転換と経済協力の課題』pp. 143-170, 東京: アジア経済研究所。
- バトジャルガル, Z.
 2005 「母なる自然の叡知が創造した生活の「わざ」と知恵」『科学』75-3 (871): 363-367。
- 羽田 明
 1982 『中央アジア史研究』京都: 臨川書店。
- 羽田明ほか訳注
 1973 『騎馬民族史3 正史北狄伝』東京: 平凡社(東洋文庫 228)。
- 林 俊雄
 1983a 「匈奴における農耕と定着集落」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』pp. 3-32, 東京: 山川出版社。
 1983b 「鮮卑・柔然における農耕と城塞」『古代オリエント博物館紀要』5: 377-394。
 1985 「掠奪・農耕・交易から見た遊牧国家の発展——突厥の場合」『東洋史研究』44(1): 110-136。
 1997 「遺跡の宝庫, モンゴル」小長谷有紀編著『暮らしがわかるアジア読本 モンゴル』pp. 106-115, 東京: 河出書房新社。
- フェイガン, B.
 2008 『千年前の人類を襲った大温暖化——文明を崩壊させた気候大変動』東郷えりか訳, 東京: 河出書房新社。
- 藤田 昇
 2003 「草原植物の生態と遊牧の持続的利用——植物学からみたモンゴル高原」『科学』73-5(849): 563-569。
- 二木博史
 1993 「農業の基本構造と改革」青木信治編『変革下のモンゴル国経済』pp. 103-133, 東京: アジア経済研究所。
- プルジュワルスキー (プルジェヴァルスキー), N. M.
 1939 (1875) 『蒙古と青海 上巻』田村秀文・高橋勝之共訳, 東京: 生活社。
- プレンスイン, B.
 2003 『近現代モンゴルにおける農耕村落社会の形成』東京: 風間書房。

- ボズトネフ (ボズドネフ), A. M.
1908 (1898) 『蒙古及蒙古人』東亜同文会編集部訳, 東京: 東亜同文会。
- ポターニン, G. N.
1945 (1881) 『西北蒙古誌 第2巻 民俗・慣習編』東亜研究所訳, 東京: 龍文書局。
- 松田孝一
2006 「クビライ政権時代のチンカイ地区 (簡記)」『平成 16・17 年度科学研究費補助金「中世北東アジア考古遺蹟データベースの作成を基盤とする考古学・歴史学の融合」(研究代表者: 村岡倫) 研究成果報告書』 pp. 47-54。
2010 「モンゴル帝国の興亡と環境」白石典之編著『チンギス・カンの戒め——モンゴル草原と地球環境問題』 pp. 84-100, 東京: 同成社。
- 松本恒夫
2007 「体制移行国における市場経済化と土地所有権——モンゴルの場合」『海外投融資』15-2(86): 25-27。
- 三崎良章
2002 『五胡十六国——中国史上の民族大移動』東京: 東方書店。
- 宮地亮一・木村肥佐生
1977 (1963) 『モンゴル人民共和国・宣伝員必携』ビブリオ。
- ミンジュール, R.
2003 「牧民の暮らしを変えた, 牧民のなかの牧民——モンゴル国の労働英雄 レンチンギーン・ミンジュールは語る」小長谷有紀編『モンゴル国における 20 世紀』(国立民族学博物館調査報告 41) pp. 7-108, 大阪: 国立民族学博物館。
- 村岡 倫
2003 「モンゴル西部におけるチンギス・カンの軍事拠点——2001 年チンカイ屯田調査報告をかねて」『竜谷史壇』119・120: 1-61。
2006 『平成 16・17 年度科学研究費補助金〔特定領域〕「中世北東アジア考古遺蹟データベースの作成を基盤とする考古学・歴史学の融合」研究成果報告書』。
2007 「チンカイ城と長春真人アルタイ越えの道——2004 年現地調査報告をかねて」『竜谷史壇』126: 1-35。
- 森安孝夫
1997 「『シルクロード』のウイグル商人——ソグド商人とオルトク商人のあいだ」『岩波講座 世界歴史 11 中央ユーラシアの統合』 pp. 93-119, 東京: 岩波書店。
- 護 雅夫
1950 「中国古代における遊牧国家と農耕国家」『歴史学研究』147: 1-13。
- 護雅夫訳
1989 『中央アジア・蒙古旅行記』東京: 光風社出版。
- モンゴル科学アカデミー歴史研究所
1988 (1969) 『モンゴル史』(2 冊本) 田中克彦監修・二木博史ほか訳, 東京: 恒文社。
- 楊 海英
1991 「家畜と土地をめぐるモンゴル族と漢族の関係——オルドスの事例から」『民族学研究』55(4): 455-468。
- 李 志常
1961 「長春真人西遊記」岩村忍訳『世界ノンフィクション全集』19: 311-391, 東京: 筑摩書房。
- ロッサビ, M.
2007 『現代モンゴル——迷走するグローバリゼーション』小長谷有紀監訳・小林志歩訳, 東京: 明石書店。
- ローホーズ, Ts.
2007 「Ts. ローホーズ——追放を生き抜いた政治家」小長谷有紀編『モンゴル国における 20 世紀 (2) ——社会主義を闘った人びとの証言』(国立民族学博物館調査報告 71), pp. 11-156, 大阪: 国立民族学博物館。
- 陳 得芝
1980 「元称海屯田考」『元史及北方民族史研究集刊』4: 14-17。
- ZOLZAYA, Z.
2005 「モンゴル国の酪農業の現状と将来展望」『畜産の研究』59(11): 1235-1241。

英語文獻

- Badarch, D., Raymond A. Zilinskas and P. J. Balint
2003 *Mongolia Today: Science, Culture, Environment and Development*. London: Routledge Curzon.
- Behnke, R. H., I. Scooners and C. Kerven (eds)
1993 *Range Ecology at Disequilibrium: New Models of Natural Variability and pastoral Adaption in African Savannas*. London: Overseas Development Institute.
- Delaplace, G.
2010 Chinese ghosts in Mongolia: Histories of ethnic parasitism. *Inner Asia* 12(1): 127–141.
- Ellis, J. E., M. B. Coughenour and D. M. Swift
1993 Climate Variability, Ecosystem Stability and the Implication for Range and Livestock Development in Behnke et al. 1993 pp. 31–41.
- Erdenebaatar, B.
1996 Socio-Economic Aspects of the Pastoral Movement Patterns of Mongolian Herders. In C. Humphrey and D. Sneath (eds.) *Culture and Environment in Inner Asia*, vol. 1, pp. 58–110.
- Fernandez-Gimenez, M.
1993 The Role of ecological perception in indigenous resource management: a case study from the Mongolian forest-steppe. *Nomadic People* 33: 31–46.
2000 The Role of Mongolian Nomadic Pastoralists' Ecological Knowledge in Rangeland Management. *Ecological Applications* 10(5): 1318–1326.
- Fernandez-Gimenez, M. and B. Aleen-Diaz
1999 Testing a non-equilibrium model of rangeland vegetation dynamics in Mongolia. *Journal of Applied Ecology* 36: 871–885.
- Fletcher, J. J.
1986 The Mongols: Ecological and Social Perspectives. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 46: 11–50.
- Humphrey, C. and D. Sneath
1999 *The End of Nomadism?: Society, State and the Environment in Inner Asia*. Durham: Duke University Press.
- Jenkins, G.
1974 A Note on Climatic Cycles and the Rise of Chinggis Khan. *Central Asiatic Journal* 18(4): 217–226.
- Minorsky, V.
1948 Taim ibn Bahr's Journey to the Uyghurs. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 12(2): 275–305.
- Narama, C., Kicengge, J. Kubota, V. Shatravin, M. Duishonakunov, G. Moholdt and K. Abdrakhmatov
2010 The lake-level changes in Central Asia during the last 1000 years based on historical map. In Mitsuko Watanabe and Jumpei Kubota (eds.) *Reconceptualizing Cultural and Environmental Change in Central Asia: An Historical Perspective on the Future*, pp. 11–27. Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature.
- Ostrom, E.
1990 *Governing the Commons: the Evolution of Institutions for Collective Action*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ostrom, E. (ed.)
2002 *The drama of the commons*. Washington, D.C.: National Academy Press.
- Rupen, R.
1964 Mongols of the 20th century, Part I. *Uralic & Altaic Series* 37. Bloomington: Indiana University.
- Russell, N. P., Y. Adya and T. Tseveen
2000 Role of the livestock and crop economy in the Mongolian economic transition. In F. Nixon (ed.) *The Mongolian economy: a manual of applied economics for a country in transition*, pp. 154–174. Cheltenham: Edward Elgar Publishing Ltd.

Sneath, D.

- 1999 Spatial Mobility and Inner Asian Pastoralism. In C. Humphrey and D. Sneath, *The End of Nomadism?*, pp. 218–277. Durham: Duke University Press.
- 2002 Mongolian in the ‘Age of the Market’: Pastoral Land-use and the Development Discourse. In Mandel Ruth E. and C. Humphrey (eds.) *Markets and Moralities: Ethnographies of Postsocialism*, pp. 191–210. Oxford: Berg Publishers.
- 2003 Landuse, the Environment and Development in Post-socialist Mongolia. *Oxford Development Studies* 31(4): 441–459.

World Bank

- 2003 *Mongolia Environmental Monitor 2003: Land Resources and their Management*.

ロシア語文献

Dorj, D.

- 1971 *Neolit Vostochnoi Mongolii (The Neolithic Age of East Mongolia)*. Ulaanbaatar.

Graivoronskii, V. V.

- 2007 O Vklade A. D. Simukova v izuchenie kochevogo zhitovnovodstva i zemledeii v Mongolii, (About the contribution of A. D. Simukov to the research of animal husbandry and agriculture in Mongolia). In Y. Konagaya, S. Bayaraa and I. Lukhagvasüren (eds.) *A.D. Simukov Trudy o Mongolii i dlia Mongolii*, Tom.1 (*A. D. Simukov Works about Mongolia and for Mongolia*, Vol. 1), pp. 75–83.

Iakimov, B. A.

- 1930 Vozmozhnosti zemledeliia v Iuzhnoi gobi (Feasibility of Cultivation in the south gobi). *Khozhaistvo Mongolii (Mongolian Economy)* 5(8): 39–48.

Konagaya, Y., S. Bayaraa and I. Lukhagvasüren (eds.)

- 2007a *A.D. Simukov Trudy o Mongolii i dlia Mongolii*, Tom.1 (*A. D. Simukov Works about Mongolia and for Mongolia*, Vol. 1) (Senri Ethnological Reports, No. 66). Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2007b *A.D. Simukov Trudy o Mongolii i dlia Mongolii*, Tom.2 (*A. D. Simukov Works about Mongolia and for Mongolia*, Vol. 2) (Senri Ethnological Reports, No. 67). Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2008a *A.D. Simukov Trudy o Mongolii i dlia Mongolii*, Tom.3-1 (*A. D. Simukov Works about Mongolia and for Mongolia*, Vol. 3-1) (Senri Ethnological Reports, No. 74). Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2008b *A.D. Simukov Trudy o Mongolii i dlia Mongolii*, Tom.3-2 (*A. D. Simukov Works about Mongolia and for Mongolia*, Vol. 3-2) (Senri Ethnological Reports, No. 75). Osaka: National Museum of Ethnology.

Lomakina, I.

- 1974 *Marzan Sharav (Marzan Sharav)*. Moskva.

Shubin, V. F.

- 1953 *Zemledelie Mongoliskoi Narodnoi Respubliki (Cultivation of the Mongolian People's Republic)*. Moskva.

モンゴル語文献

ASM (Academy of Science in Mongolia) (ed.)

- 1979 *Mongol Ard Ulsyn Ugsaatny Sudlal khelnii Shinjleliin Atlas (Atlas of Ethnography and Linguistics in the Mongolian People's Republic)*. Ulaanbaatar.
- 1990 *Bugd Nairamdakh Mongol Ard Vlg Ündesnii Atlas (Basic Atlas of MPR)*. Moskva.

Badamkhatan, S. (ed.)

- 1987 *Mongol ulsyn ugsaatny zui(1) (Ethnography of Mongolia, vol. 1)*. Ulaanbaatar.
- 1996a *Mongol ulsyn ugsaatny zui(2) (Ethnography of Mongolia, vol. 2)*. Ulaanbaatar.

- 1996b *Mongol ulsyn ugsaatny zui(3) (Ethnography of Mongolia, vol. 3)*. Ulaanbaatar.
- Boldbaatar, J. (ed.)
- 2003 *Mongol ulsyn tüükh(5) (History of Mongolia, vol. 5)*. Ulaanbaatar.
- Dalai, Ch.
- 1992 *Yuan ulsyn tüükh (History of Yuan Dynasty)*. Ulaanbaatar.
- Dashinyam, L. (eds.)
- 1999 *Mongol nutag dakhi tüükh soyolyn dursgal (Historical and Cultural Monument of Mongolia)*. Ulaanbaatar.
- Jigjidsüren, G. and D. Tsetseg (eds.)
- 2005 *Mongol kinony neverkhii toli (Encyclopedia of Mongolian Movie)*. Ulaanbaatar.
- Lkhagvasüren
- 2003 *20 zuuny Mongolchund (The Twentieth Century in Mongolia: Interview About the Way to Socialism)*. (Senri Ethnological Reports, No. 42). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Lkhagvasüren, I. and Y. Konagaya
- 2007 *20 zuuny Mongolchuud (2)—Sotsialist Mongolyn uls töriin amidral (The Twentieth Century in Mongolia (2): Political Life in Socialist Mongolia)*. (Senri Ethnological Reports, No. 72). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Perlee, Kh.
- 1959 *Mongolyn ert, dundad ueiin khot suuriny товчоон (Mongolian Old Cities in the Ancient and Middle Ages)*. Ulaanbaatar.
- Rolomjav, B.
- 1976 *Mongolchuudyn тарялалгийн уламжлалаас (About the tradition of Mongolian cultivation), Түүхийн Судлал (Study of History)*. 12(8): 100–105, (in Mongolian).
- 1983 *Mongolyn зарим нутгийн ардын тарялалгийн хувишаа, хөгжлийн асуудалд (Transition and Challenges of Development in Mongolian Traditional Cultivation), Түүхийн Судлал (Study of History)*. 16(6): 54–61.
- 1984 *BNMAU-yn тарялалгийн хөгжлийн асуудлыг зөвлөлт эрдэмт судалсан нь (Soviet Studies on Agricultural Development of Mongolian People's Republic), Түүхийн Судлал (Study of History)*. 18(10): 76–82.
- 1987 *BNMAU-yn тарялалгийн хураангуй түүх (Brief History of Agriculture in Mongolia), Түүхийн Судлал (Study of History)*. 20(1).
- Ser-Odjav, N.
- 1977 *Mongolyn ертнii түүх (Ancient History of Mongolia)*. Ulaanbaatar.
- 1987 *Bayanligiin khadny zurag (Petroglyph of Bayanlig)*. Ulaanbaatar.
- Sharkhüü, Ts.
- 1975 *Khuvisgalin ömnök Mongol dakhi Gazryn Khariltsaa (Land Relationship before Revolution)*. Ulaanbaatar.
- Sükhbaatar, G.
- 1971 *Shenbi (Shenbi)*. Ulaanbaatar.
- Tseveendorj, D.
- 1976 *Khadny sineer ordson zoson zurag (New discovery of Petroglyph), Археологийн Судлал (Study of Archeology)*. 7(4), Ulaanbaatar.
- 1980 *Khongioгийн голын khadny sug zurag (Petroglyph of Khongio), SUA*. 1980-4 pp. 74–77.
- 1999 *Mongolyn Ertнii Урлагийн Түүх (Ancient History of Mongolian Arts)*. Ulaanbaatar.
- Tsolmon, P.
- 1990 *Shar Damdinsüren khemeekh A.D. Simukov (A.D. Shinukov called as Yellow Damdinsüren)*. Ulaanbaatar.
- Yündenbat, S.
- 2009 *Lamin Gegeen Shabiin Түүх (The History of People of Lamin Gegeen)*. Ulaanbaatar.

参考資料 1

S. バダムハタン監修『モンゴル国民族学（第2巻）』1996より
農耕に関する抜粋の邦訳

注1 () は原注, [] は訳注。

注2 地名や集団名はカタカナで記した。

注3 植物名や方言, 特定の表現については, 初出時のみ, モンゴル語のローマ字綴りを添えた。

ドルベド族（同上書 55-57 頁）〔オブス県〕

〈農耕〉

オイラート・モンゴル人たちは生業として, かなり古くから農耕を営み, その経験と知識を有しているという優れた特徴をもっている。一般に, 山岳地域に分布している遊牧民の生業の歴史を見れば, 牧畜のみならず, 牧畜を中心に営むとともに他の副業を営むと同様に農耕を並行させてきたことは, 普遍的な現象である。この法則に関して, モンゴル人も例外ではなかった。

ドルベドたちが農耕に従事してきた主要な場所は, かなり湿潤な気候をもつ, 山の褐色土および山の黒茶土のある, シーレム・ハルヒラー山の東斜面や低い平地であり, 小川に沿って位置している。また, この地域には農耕の数百年の歴史があり, それを生活の糧としてきたホトンたちの農耕も隣接して発展してきた。しかし, ドルベドたちの領域の南部で, ゴビ的な地域であるザブハン川の左岸やヒャルガス湖の盆地あたりでは農耕が認められない。

ドルベドの農民たちは大麦アルバイ *arvai* (有芒種), ホジゴル *hojigor* (無芒種) と少量の小麦ボーダイ *buudai* (白い穀物) を栽培していた。当該地の農耕は, 山岳地帯の灌漑農耕に属する。したがって, 気候が温暖な低地と比べると, 多様な作物の栽培には適していなかった。言い換えれば, 遅く暖かくなり, 早く寒くなる独特な気候が強く影響していた。

ドルベドは, 鉄の先端をもつ木製の犁アンジス *anjis* (現地語でアンディス *andis*) で耕し, おもに去勢牛 (現地語でツアル *tsar*) またはラクダに牽引させていた。耕起には2〜3人が参加し, 1人は去勢牛 (もしくはラクダ) を誘導し [はなづらとり],

もう1人が犁を操作する〔すきもち〕。土地（現地語でタリグ *tarig*〔畑〕）をあまり深く耕してはいなかった。十分な収穫が得られていたことから判断すると、あまり深く耕す必要はなかったのであろう〔乾燥地の浅耕〕。畑を用意するにあたって、距離をあけて「平地を作る」、距離をあけずに「鼻〔畝〕を作る」、そして耕していた。畝を作って耕した後、畝に沿って、木製の箱もしくは小さな袋から種子を出して播く。種子を入れた入れ物を肩にかけ、前に播いて、歩きながら播く。播いた後に種を埋めるために、土の塊を砕く目的で、丸太ニールボー *niilbuu* を曳いていた。これが軽くなるように、もっぱらポプラの幹を取ってその枝を払って両端をきれいにし、ボルbul（鐙）〔ASM 1979: 149 に図示あり〕をはめて、牛かラクダに回転させながら曳かせた。

畑の灌漑には、「ボフ〔一般に種牡牛を意味するので、以下の訳文では種牡牛とする。ただし、原義はトルク語で水路の意であった可能性が高い。現代トルコ語では *bogúz* が海峡など水の流れが挟まっているところを指し、水路は *arik* である〕」というショードー〔水路〕で灌漑する方法を広く用いていた。河川から耕地に沿って引いた主水路をボフといい、そこから畑ごとに分流させた副水路を「アリグ *arig*」と呼んでいた。アリグをさらに分枝して、分水路「チフ〔一般に耳を意味する〕」を掘って、耕地全体に灌漑していた。新しい耕地を耕し、水を引くなどの農作業は、農耕を営む特定の集団のあいだで一定の習慣で決めていた。言い換えれば、同じ生計目的をもつ数世帯を統率する、耕地区画の責任者ゾミヤー *zumiya* といった人たちが仕切っていた。

畑を5回にわたって灌漑するため、「畑には5回の水、人には10回の月〔妊娠期間〕」という諺がある。まず耕す前に、「ガザル・オス〔土の水〕」を与えて、その場所を水に浸してやわらかくする。これは、土地を耕し、種が発芽するために重要な意義をもつ灌漑である。その後、耕起して播種する。土の表面が乾燥してきたら、「ハル・ショロー・オス〔黒土の水〕」、その後に短い間隔で「ゲゼグ・オス〔辮髪の水〕」を与えていた。なかなか発芽しない場合や、芽が枯れそうになったときに与える。また、「シャンハグ *shankhag*・オス」、最終的に「ハドール・オス〔鎌の水〕」を与えて、実が熟するのを向上させる。その数日後に収穫する。ドルベドとホトンの農耕文化で興味深いことは、最初の「土の水」に関連して「氷の種牡牛」と呼ばれる水路を掘ることである。これはハルヒラー川の耕地にだけ見られる。これを掘るとき、氷を溶かして穴を開け、氷の下から水の流れを引く、それをウヘグ・テビフ *ukheg tevikh* する。このように、純粋に地元生まれの生業の知識の興味深い伝統があったのである。

穀物を収穫し、脱穀する広場を用意する等は、この生計活動の重要な部分である。秋に穂が黄色になり、茎が白くなったら、収穫の合図である。その茎がまだ青みがかっていると、未だ完全に熟していない証拠である。耕地が平らでなく、窪地や凹凸があると、水のたくさんあるところでは熟するのが遅れる。したがって、丁寧に平坦にしていた。穀物を鎌や刀やキール *kiir* (刀) で収穫する。収穫後、世帯ごとに、ハラム *kharam* [脱穀機の置かれた脱穀場] の上に、丸く並べて置き、木製熊手で (アイル *air* で) ひっくり返し、約1週間乾燥させて脱穀する。脱穀するには馬、去勢牛 (あるいは去勢ヤク) に踏みつけさせた。家畜が踏みつける時、穀類の茎の下方をハラムの中心 (キーセン *kiisen*) に向け、脱穀する時にハラムから出てきた穀物は4つの歯をもつ熊手で中に入れる。馬や去勢牛をハラムの中央の棒につないで、背後から追って踏みつけさせる方法 [牛蹄脱穀] が一般的であった。こうして馬や家畜をつないで追うことを、「ホシ・トーホ *khosh tuukh*」と呼ぶ。ハラムの上で (踏みつけたあと)、残っている穀物のサム [茎や枝] もまた4歯の熊手で外へ取り出す。あるいは、穀物を木製シャベルでハラムのそばに積み上げる。早朝の風 (ジラン *jilan*) が吹く (走る) 頃、風に向かって積み上げた穀物を空いているハラムの方に投げ上げてゴミを払った [風選]。脱穀する時は必ず2つのハラムを近くに作る。1つのハラムからもう1つのハラムに穀物を投げると、一番向こうに穀類、手前にヘルゼン *kherzen* もしくは *khersen* (小さい丸い黒いもの)、ヘベグ *khebeg* [皮] は一番手前に落ちる。このヘベグとヘルゼンを赤いハルガナ [マメ科植物] 製の箒で外へ掃き出す。脱穀した穀物はおもにラクダの毛で作った、オルモグ *ormog* という袋に入れて家に持ち帰り保存する。

世帯の条件に応じて、裸麦とりわけ大麦を何度か脱穀し、きれいにしたあと粉にしていた。大麦を乾燥した状態でたたき、ふるい、さらに湿らせてたたくことを「タリヤー・ウスレフ [穀類の毛を取り除く]」という。このように「毛」をとりわけ再度きれいにし、炒った後、「石をとる」と称して混入している小石やヘルゼンを除去する。さらにたたいて皮を除去する。皮はイヌや家畜に餌として与える。例の裸麦は炒ってたたいて、その後ふるって石臼 *teerem* で挽いて粉にする。穀物を脱穀するには数段階の作業があり、温めて煎る、加湿する、たたく、風で飛ばすなどの方法を合わせて用いることが観察された。穀物を食用する最終段階は、挽いて粉にすることである。世帯ごとに石臼を自分で作っていた。いまでもこの伝統は絶えてない。

生計のどのような部門でもその発展を示す指標は道具の名称である。ドルベドの農作業の場合、近隣集団の間で一般的に普及していた鉄の先端をもつ木製犁を、現地語でオイムス [靴下] をウデール [細い皮ひも] や皮ひもでつないで、犁の表に犁を

ひっぱる「矢の木」を取り付け、片方の先端にラクダのホム〔鞍〕や、牛のヤンギヤ〔鞍〕の両端から出た短い紐につなぐ。犁の木製部分をすべて自分たちで作り、ただし、鉄の先端は少数の地元の職人が作っていた。

〈採集〉

ドルベドの生計において、食用の野生植物の採集は非常に小さなウェイトにとどまる。従来、研究者はあまり注目してこなかったし、関連情報も非常に少なかった。乳製品や肉食に加える、野生の穀類に関しては、この地域では稀である。と同時に、とくに穀物をそれなりに自給していたので、採集に関心をもつほどの具体的な理由がなかった。

ドルベドは、知る限り、肉食に加える食材として、山岳丘陵地域ではネギ類、ゴビ地域では「強いターナ *taana*」「水のターナ」という2種類のターナを摘んでいた。ネギの種が落ちる直前に、棒で掘って（摘んで）日陰に干す、あるいは冷凍して保存する。ネギは、小麦粉料理や、内臓料理や、ハム（キーム *kiim*）の調味料として好んで用いられた。2種類のターナは、手で摘み、アールツにまぜて、乾燥させて、これを砕いて粉にし、スープ料理の調味料として用いられた。

ウールド族（同上書 110–113 頁）〔ホブド県〕

〈農耕〉

ホブド、ボヤント川流域周辺で農耕していた伝統はかなり昔からのものである。

19世紀から20世紀にかけて、ウールドたちは、北ハルオス、ショラグ、ホンギオン川の合流地帯、ツァガーンモドン、ゴールサン、バンディ、ツァン、ビトゥーエレグ、ボージョーン谷より上下、ホブド川流域の肥沃な土地で耕作をしていた。上述の地では、風がなく、温暖で、日当たりがよく、山に囲まれて、湖や川に囲まれており、湧き水や河川水、植生に恵まれていた。ウールドの農作業は基本的に3段階に組織される。

- 1) 耕地を選び、土地を耕し、水を引き、水路を引き、種を播く
- 2) 収穫する
- 3) 脱穀する

という基本作業によって成り立つ。

農作業は4月末ないし5月初めから始まる。耕地としては、やわらかく、褐色土壌で、平坦なオープンスペースを選ぶ。その後、整地し、四角に区切り、区画の周り

に土を高く盛って囲い込む。その中に水を入れる。そのままにして1～2日おく。土壌を全体的に均一に浸す。そして、手鋤に馬、ラクダ、去勢牛のいずれかをつないで、おもに家庭内の労働力によって耕す。耕起の後、露出した植物の茎や根、石などを除去する。こうした作業を「四角くする」という。この作業を丁寧にするほど、雑草がなくなり、作物の生育がよくなる。そこに水を供給するため、川から水路を掘って水を引く。これを「ジャンジン・ボフ〔將軍・種牡牛〕」という。この水路を掘る作業は、農耕に従事する近隣世帯がすべて参加する。「種牡牛祭」という、水と豊作を祈り、自然をなぐさめる独特の習慣がある。この水路から、各世帯が分枝を引く。その水路はもっぱら世帯主の名で命名される。

ワールドは、大麦、青い穀類（ホジゴル）、小麦（赤）という3種の作物を栽培していた。口承によれば、降水の少ない年に、灌漑を短い間隔で行っていた。と同時に、作物の生育期間中にわたって、3～4回の灌漑を行っていた。

生産量、土壌の肥沃度を向上させるために、耕地周辺に、春秋の季節になると移動してきて家畜を滞在させ、家畜の寝床によって肥料を与えるという伝統的なやり方がもっぱら行われてきた。これを「家畜の寝床」というと同時に、ラクダでボーツ〔糞〕を運んで播くという施肥が広く普及していた。これは、遊牧民が施肥する基本的な方法の1つである。農作業の重要な部分は収穫作業である。農耕に従事するすべての世帯が、夏営地から秋営地に9月上旬に移動した後に収穫していた。木製の柄のある手作りの鎌を持って収穫し、「ツァン *tsan*〔倉?〕」という名前の特別に作られた場所に、露天状態で穀物を下ろす。これをハルハは「ウトレム〔脱穀場〕」といい、ドルベト、バヤドは「ハラム」といい、トルゴート、ザハチンは「ツァン」などと、それぞれ呼ぶ。

すでに場におろした穀物をひっくり返しながらか、数日間そのままにしておき、よく乾燥させてから、ばらして、4～5頭の馬を一行につないで、人は場の真ん中に立ち、一番近い馬の手綱を持って回す。あるいは、場の真ん中にある棒に数頭の馬を上記と同じようにつないで後ろから追う。全部の穀物を2～3日の間、踏ませて、粒を茎から外す。

その次に、専用の敷物あるいは清掃して用意した場所で、穀物を柔らかい風（穏やかな風）に向かって木製の熊手で一定の速度で投げ上げて、ゴミを分別する。主にヒツジのなめし皮あるいはヤギの皮で作った袋に保存すると同時に、近隣のカザフ遊牧民と物々交換で手に入れた模様のある袋に入れていた。それを「カザフ袋」と命名していた。彼らは、黒っぽい大麦を重視しており、これを石臼に入れて粉にするのはそ

れほど好まなかった。なぜなら、挽いた粉の粒が大きく、また「ヒーテイ」(冷性)であると認識していた。大麦にはノギがあるので粉にしようとするなら、まずノギを除去しなければならない。

大麦を木の箱に少しずつ入れて、長期間にわたって碎くと同時に、これを「ツォグノノ *tsognono*」という。このようにノギがほとんどなくなった時点で、木の容器に入れて、何度もよくふるって、皮からはずす。「ハラルダイ *kharaldai*」といわれる黒い種を得る。それを鑄鉄の鍋に入れて弱火で炒る。木製容器に入れてよく冷ます。再び臼に入れて碎く。皮がたくさん出てきて、更にふるいにかけて何度も繰り返し、きれいにすると散髪作業が終了する。

既に準備できていた大麦を少しずつ臼に入れてよく碎き、出てきた粉をイルゲグ *irgeg* に入れて、何度もイルゲグする。イルゲグとは、一種のふるいであり、テブシ(皿)の入り口に合わせてある。ふるいにかけて最初に出てくるのは、褐色であるため、「ボル・ゴリル(黒い粉)」と言い、2度目に出てくるのは白い粉であってこれを「大麦の中心部」と呼ぶ。これらすべての過程を合わせて、「穀類を選別した、選別された」という。

大麦の中心部はおいしく、上質であると認識されており、接客用や、高齢者には乳脂肪に混ぜて供する。お茶を入れ、ふりまいて、飲む。そして、親しい人には土産物として与える習慣もある。黒い粉はおもに子どもたちに与えるので、「子らの粉」とも呼ばれる。このように、用意した粉を分別して家畜の皮製の袋に入れて保存するほか、稀にこのような袋には装飾して4つの足に房がつけられていることもある。口承によれば、トラム *tulam* [牛皮製の袋] に保存された粉は、質がよく保たれるのみならず、散らからずに運ぶのに便利であった。

この地域では作物を加工する作業は主に女性たちが従事していた。ウールドたちは誰の家がどのくらい穀物を収穫したかや、交換する時に主に羊鍋(ジャラブチ)、黒いおタマ(猟師鍋)を以って単位とする。

そのため、各世帯はお互い誰の家が幾つの鍋(ハイス)を収穫したと話す。

われわれの情報によれば、収穫の多い世帯は100～200ハイスの穀物を収穫していた。当時のモンゴル農耕を調べたロシア人研究者は、収穫の多いのは15鍋、普通5～6鍋、少なくて2～3鍋と見ていた。これから見れば、一世帯当たりの穀類はそれほど多くなかっただろう。

一般に、ウールドの農耕は、生計上ある程度の意味を果たす重要な地位を占めていたことを指摘しておく必要があるだろう。伝統的な農耕に使用していた道具とその名

称、形状は、他の地域に分布している農作業道具とそれほど違いがない。主として鉄の先端をもつ木製犁、木製か鉄製のシャベル、手鎌、杵と臼、ウールドでは「オール、シャーバル」という、木製のふるい（イルゲグ）、火打石、熊手（アズ）、フォーク、手臼などがある。これらを当時のロシア、中国の商売人から購入するほか、自分たちで製作していた。

〈採集〉

ウールドの採集に影響している特徴として、草本の食物、実と根、ベリーなどに分類することができると同時に、主に食用、調味用、治療用などの目的で利用していた。これについて簡単に述べると、モホールス *mokhooros*、ダイオウ（大黃）*gishüüne*〔タデ科レウム属、*Rheum nanum*〕、カンゾウ（甘草）*chiher övs*〔ウラルカンゾウ、マメ科カンゾウ属、*Glycyrrhiza uralensis*〕、マオウ（麻黄）*zeergene*〔マオウ科マオウ属、*Ephedra*〕、ネギ *songino*〔ネギ科、*Allium*〕ギョウジャニンニク *khaliar*〔ネギ科ネギ属、*Allium victorialis*〕、アサツキ *khümkeher*〔ネギ科ネギ属、*Allium schoenoprasum*〕、ヤマネギ *mangir*〔ネギ科ネギ属、*Allium senescens*〕、キノコ類、シーベリー *chatsargana*〔グミ科、*Hippophae rhamnoides*、中国語では沙棘〕、ハマビシ *kharmag*（ハマビシ科、*Nitraria.*）、シュロソウ *balchirgana*〔ユリ目メランチウム科、*Veratrum*〕、メギ *toshlog*〔メギ科メギ属、*Berberis sibirica*〕などがある。

トルゴート族（同上書 166–168 頁）〔ホブド県〕

〈農耕〉

トルゴートの生計において農耕は小さくない位置を占めていた。19世紀から20世紀の初頭にかけて、ボルガン川の周辺でまったく家畜のない、あるいは家畜の少ない人たちが、牧畜に従事すると同時に、手作業農耕を営んでいた。トルゴートたちは5月から農作業を始めると同時に、農作業を世帯ごとに分担して専門分担という形で行っている。皆に行き渡らせる水路をボフという。それで水を流して耕地に順番に水を引く。トルゴートの分けられた畑への水やりを見ると、

区分された畑をタグト *tagt* という。土地の状況に応じてタグトの大きさは20～30平方メートルで、それより大きい場合もある。タグトを区切る土手（水を流さないようにする）をハトラム *khatram* といい、ボフから水を流す水路をアリグという。アリグからタグトに向けて水を流す水路をチケン *chiken* といい、水を流すことを「耳を蘇らせる」という。1つのタグトの水は、平地で1トー〔指尺〕あまり〔約20センチ〕

チ]程度の深さがあり、たくさんのタグトに順番に灌漑されて全体に行きわたる。

タグトに引かれた水が定着する期間は、場所によって6昼夜であり、場合によってはそれより短い。非常に土壌の固い場合や、厚くて粘着な土壌の荒地には長期間にわたって水を張っておき、薄い土壌で砂利まじりのところには48時間水を張る。これらに対して農民たちは、基礎が良い、基礎が薄い、と区別する。このように耕して種を播くため、水をやることを「土の水」という。この水を与えてから、1～2日間寝かせて、牛馬がすべらないようにするが、過剰に乾燥させず、湿度のある段階で、去勢牛、馬、あるいはラクダに犁を曳かせて耕す。

種が発芽し始めると(40～50日後)、2度目の水を与える。これを「黒い土の水」という。このとき芽生えた種の苗は40～50センチまで成長している。このあと約2週間以内に「辮髪の水」という3度目の水を与える。

成長具合と乳製品の生産時期を勘案して、最終の水やりを行う。これを「鎌の水」という。この水やりは収穫前に行うので、そう呼ばれている。収穫するまでの期間は合計80～85日である。

穀類を手鎌で収穫すると同時に、収穫作業自体を早朝から行うことはない。日が昇って地面が乾燥した後、収穫作業を始める。露の湿気のあるときに収穫すると穀類が腐敗しやすいので注意する。収穫する際に昼休みをとる。昼の茶を飲むという。収穫が終わると、1～2頭の小家畜を用意し、作業人数に応じてふるまう。収穫するとき、トルゴートではバシガチン *bashigachin* も集まってくる。彼らはもっぱら貧困で、労働力が不足しており、独身、高齢、老人の子どもたちである。彼らは落ち穂拾いをして、羊皮製の袋に入れて持ち帰っていた、と言われている。収穫に参加する人たちには、調理されたお茶と食べ物を腹いっぱい食べさせて、味見させる習慣がある。ただし、作業が終了した後に肉を配る時、収穫高の一番多い人が年寄りにアイラグ〔どぶろく馬乳酒〕、アルヒ〔牛乳蒸留酒〕、歌をささげる。彼らは作物と関連する祝詞を述べる。このように収穫日は祭りの性格をもつ日となる。

穀物を2～3日の間に、家の壁の形にして丸めて積み上げる。これをテレムレフ *teremlekh* という。積み上げた穀物を収穫した後、中央に棒を立てる。この棒をキース *kiis* もしくはフイス *huis*〔へそ〕といい、棒を立てることを「へそを生やす」という。この棒が、踏みつけさせ脱穀する去勢牛や馬等をつなぐのに用いられる軸となる。棒に近い馬の首から、2番目さらにその他の馬へとつないで、乗馬した少年がへそ棒につないだ馬たちを鞭でたたき、背後から追い、回す。これに用いる馬の数は、場所の面積による。穀物は最初の段階で茎が多くついているので、馬たちを速く追

う。しばらく馬が疲れないうちは走らせて、茎から落とす。馬が疲れてくると、追い方を変えて、普通に追う。このとき、真ん中の馬がようやく回っているとき、端っこの馬はかなり走っている。このように穀類を茎から外すことを「イフ・サバン *savan* [実]・ガルガハ」という。

そのあと、十分にまだ踏まれなかった穂が残っているため、さらに少数の馬をつないで踏ませる。このような踏ませる作業を「トルゴイロホ *tolgoilokh*」「マイフラハ *maihlakh*」「モンドホ *mondokh*」などという。穂を分別したあと、木のシャベルで、茎と枝を風に飛ばすように投げ上げる。そのあとに穀物のほとんどがきれいになり、混じりものが残る。

このような3回目の投げ上げのことを「追い出し清掃」という。ここで述べた3つの選別には、つねに風力を利用している。

トルゴートたちは穀物を分別したあと積み上げて整理して、3方向に香をたく。日が昇る南東方向と、水路の方向すなわちアリグが取水している方向、河川が流れる方向である。

また、脱穀済みの穀類をゲルの形にして整え、頂上をシャベルで平らにし、穀類を並べて天窓の形にする。これで全体的にゲルの形を模倣しており、穀物で作ったゲルの天窓の上に白い石もしくは氏族のタムガ印を描いて見せる。

穀物を特別の袋で量って袋詰めをした後で、脱穀作業に参加した親族およびそのために集まった人びとに供する。これをヒブセン *khivsen*（裁断された絨毯）という。（貧しい人には1シャベル＝1.5～2キログラム）。

調査当時、トルゴートたちは農機具を自分たちで製作していた。場合によっては近隣地域の道具も利用している事例があった。彼らは犁の先端をボプラや柳、鉄で作る、木製の本体に木の釘で設置し、ウドという紐で固定していた。牛と馬に犁を挽かせる道具がなかった。牛のヤンギヤ〔鞍〕か、ラクダのホム・シャト〔鞍〕から、皮紐をつないで引いていた。

バヤド族（同上書 226–228 頁）〔オブス県東部〕

〈農耕〉

バヤドたちは耕地を選択する、取得する、耕す、整地する、灌漑する、施肥する、収穫する、脱穀する、種もみの量を調整する、といった面でたいへん豊富な知識をもっている。以下に簡単に述べよう。

準備作業：タリグ（耕地）を灌漑する水源、耕地の高さや形を考慮しながら、場所

を選定する。選定した後、そこに水を引くために、春の中の月の10日ごろに、テス川、ジョロー川の氷を割り、土が見えるまで掘り、川岸から高い土手を作り、水が流れる方にボルガス柳やゼゲス葦でふさぐ。

耕起作業：畑の場所を、春の末の月の解凍期に耕す。主たる労働力は人間と家畜（去勢牛、ラクダ）、ボイトグ・アングス（アングス）〔ボイトグは子供靴〕などである。犁をつけた家畜を引く人が1人、家畜を追う人が1人、犁の操作をする人が1人、それぞれ分担して作業に参加する。家畜を引く人や犁を操作する人は、経験豊かな人である。家畜を引く人は一定のスピードを保ち、犁を操作する人は土壌の様子に応じて犁の深さを調整する。進行方向の障害物を除きながら、畑を耕す。

畑を耕したあとに土の塊を砕き、平坦にするのに、イレベル *ilever* という少し重みのある丸太を曳く。そのように均したあと、耕作用に分けて準備する。

播種作業：播くのは2種類の大麦と小麦である。大麦にはノギありと禿（裸麦）がある。農民は播種するのに、ザグノール *zagnuur* という器から手で播く（ラクダの足跡1つ当たりに5粒播く）。一握りの種を横に1歩、縦方向に2～3歩の面積に播く。また、人間の手のひらサイズの面積に1粒と換算して播種する。このように播種した1粒から70粒が実る〔かなり高い収穫量〕。天水のほかに、水路を引いて灌漑するという伝統がある。この灌漑の独特な特徴は、畑に水を引く段階に応じて大小の水路を掘ってある。大きな水路をボフといい、分枝したものをソマン・ボフ〔直訳すると矢の種牡牛、矢とは軍事起源の集団組織〕、サルガツ・アリグ、チフ・タグなどと分けられる。

灌漑作業：バヤドの手作業農耕では、土壌の肥沃度に応じて、1度、3度、4度と分けられる。1度灌漑とは、肥沃な土壌に十分に水をやり、家畜の足跡に水がたまる程度になると土地を耕して、収穫する。3度灌漑とは、耕してから、ガザル・オス、ハル・ショローン・オス、ゲジグ・オスという3度にわたって灌漑することを指す。4度灌漑とは、畑の大型イネ科植物あるいはか灌木の地下部を除去して燃やした後、ガザル・オス、ハル・ショローン・オス、ゲジグ・オスとテベグ・オス、ハドール・オスというように、作物の「根が出る」「芽が出る」「成長する」「成熟する」の最初を観察して灌漑する。播種してから根が出るように土をかぶせて水を入れるのは7～14日とする。この灌漑は、畝と畝のあいだに播かれた種に十分な水を与えるためのものである。2度目の灌漑をその1ヶ月後に、種の発芽の頃に与える。次の灌漑は、前回の灌漑より、丸半月後に行う。最後に、作物が成長し、生育が完了する段階で、ハドール・オスを与える。畑にガザル・オスを行き渡らせるために整地する。この仕

事には全員で参加する。整地するのに場所の高低を調べる。大量に水が流れると、ボフ〔大水路〕の土手が崩れることを考慮し、ボフを北〔奥〕、中間、先端のボフというようにすべての場所に分ける。農耕に最も経験豊富な人が、他の人びとを率いて、大水をホイト（北）、中、下というように流す。

見張り作業：黄色いゲル〔夏用〕あるいは草製の小屋をたてて穀物を見張る。アイバル *aivar*（人型）とマノーハイ（かかし）を畑の周辺に立て、鉄砲を鳴らして鳥を追い払う。家畜の糞などで煙を出す。

収穫作業：秋に手鎌やナイフで収穫する。収穫した穀物を乾燥させ、脱穀し、粉に挽くなどの段階的に加工する。実が固くなり、色づき始めたときに、手のひらでたたいて収穫する。収穫する前に、ハラムを用意する。平坦で固い場所を選び、シャベルで整地する。地面を平らにけずって、それを水で濡らし、太いハルガナや細いハルガナを箒として掃く。これはゲルに相当する面積で、そこに収穫したまを積み上げる。丸く並べ、列にして乾燥させる。乾燥しているのと、してない穀物を並べるには、穂を日に当たり、風通しのよい方に向ける。並べた穀類の中心つまりハラムの中心に、へそ棒（キーセン）を立て、並べた穀物を棒（シヨンゴー *shongoo*）を回して踏みつける。厚さに応じて、4頭の馬を並べて、穀物を踏ませる。最もおとなしい馬をへそ棒に入れて、その手綱をへそ棒につなぐ。長い綱をへそ棒につなぎ、馬の尾につなぎ、4頭を並べて時計回りに踏ませる。ただし、牛の場合は反時計回りにすると決まっている。子どもたちが家畜を追う作業にあたる。枝や茎を取り出し、家畜に踏まれないように気をつけながら、穀類が明瞭になることを「底を作る」という。茎を取り除くと、細いヒエン *kien* と実が残る。へその両サイドに穀物を積み上げる。風が吹くとき、木製熊手や木製シャベルで投げ上げる。最初に落ちてくる純粋な穀物を「額の穀類」といい、最後に落ちてくる穀類（ヒエグテイ *khiegtai*）を「足の穀類」という。このように分類して等級を付ける。後者を別に積み上げる。積み上げた穀類に、卍を描き、シャベルを日が昇る方向に向かって指すと、恵みをもらうためにやってくる子どもたちや老人たちに「額の穀類」をささげて、「足の穀類」から1シャベル分を（服の）裾に供する。袋詰めにしてから地面を掘って貯蔵する。

粉ひき作業：食に利用するため、大麦を少量の水で湿らして皮を取れやすいようにして、砕いて乾燥させる。ふるいにかける。風に皮がとぶ。火を起こし、鍋を熱くし、1 椀ずつ入れて炒る。フェルト付きの木製攪拌棒あるいはシュルグール *shürgüür*（アルチョール *archuur*）で炒る。穀物を皿に入れて冷ます。再び、臼に入れて杵で砕くと、穀物の皮が落ちて分別される。碾き臼、容器、ホブチなどを用いて粉に挽く。粉

を皮袋トラムに入れる。

大麦の粉は腹もちがよく、茶でこねて飲む〔食べる〕、ウルムやブーヒー〔いずれも乳脂肪の多い乳製品〕とまぜて食べる。また、穀粉を練って食べる、茶碗に入れて茶と飲む、茶碗の底に粉を入れて茶をそそぎ、なめる、などの方法で穀粉を利用する。

ウリヤンハイ族（同上書 285-287 頁）〔バヤンウルギー県〕

〈農耕〉

ウリヤンハイ地域のホブド、サクサイ川流域では昔から農耕を営んできた伝統がある。この地域の農耕の方法や作物の種類などは、オイラートの人たちのあいだで 17 世紀以降、普及した農耕である。したがって、ウリヤンハイの農耕は、わが国のアルタイ山脈の西アルタイのエルチス、オロンギーンサブ、イリ河、ハミの境に見られるアリグすなわち灌漑農業の一部である。

ウリヤンハイでの農耕は、代々、牧畜と並行して行われてきた。これは、農牧を複合させるだけの人力や畜力があり、商品経済に興味のある世帯があつて、当時のウリヤンハイ地域の社会経済にプラスの影響を及ぼした。

ウリヤンハイの農耕について概要を論じよう。

耕作地を選定するには、第 1 に、水路を引く水源から 500 ～ 600 メートルの距離であり、また立地的に川面より低い場所であり、第 2 に、家畜の放牧地から離れている場所であり、日が早く当たる平坦な場所であり、第 3 に、土壌が長年にわたって可耕地であることを判断する必要がある。このように耕作地を選定し、土地の主が自ら労働する。

春先、雪が解け始めると、犁を去勢牛につけて、耕作地の端から端まで直線的に耕していく。その次に、耕したところに長い丸い木でならす。すべての場所を四角く分ける。この 1 ショー四方を「タグト」という。すべてのタグトは 1 ショー〔10 ムー〕ほどで、高く土を盛って区切られている。この盛り土を「フトロム *hotrom*」という。このように整地することによって、すべての地区に等分に配水され、水路に流水する作業が軽減される。整地したあとに、播種する。「農耕の歌」という名前の木製容器あるいは袋に、種を入れて、首からぶらさげ、片手で袋から種を取り、播く。1 掌当たり 4 ～ 5 粒になるように播種する。種を畑の端から端まで播き、種播する人は、種を傷めないように、底の柔らかい靴をはくかあるいは裸足で播種する。種をまいたあと、3 日目に最初の水をやる。これを「ゲジグ・オス〔辮髪の水〕」という。21 日後、水をやることを「ドンド・オス〔中間の水〕」という。そのあと 41 日後に、その春の

降水量や湿度条件に応じて3度目の水やりを行うかどうかを決める。

川から引いた水路を「ボフ〔種雄牛〕」といい、そこからタグトに引いた水路は「アリグ」という。アリグに水が流れると、すてのタグトの土手をシャベルでくずして水を入れ、水が行き渡ればまた土手をふさいで、水流を変える、という形で、すべてのタグトに水を入れる。発芽し始めた畑では、家畜の侵入あるいはその他のものから守る目的で、小屋を立てて見張る。夏営地に移動したあとも、たまに帰り、生育状況をチェックしていた。畑の1株から40～50粒の実がなればよい。20粒程度であれば「簡単な頭」でよくないとみなした。

秋の最初の月の後半に山麓から降りて秋営地に来ると、収穫作業が始まる。収穫は作物を手鎌で穂ごとに刈り取り、一束になれば結んでこれを「一包み」として並べておく。そして一包みの作物を脱穀した場所に運ぶ。

脱穀する場所「ツァン」は、およそ14歩であり、黄土を緻密に固め、真ん中に「キーセン」と呼ばれる棒を立てたものである。このツァンの上に穀物を積み上げる。2～3日積んでおくことを「タリヤー・オルツラハ〔穀類を小屋のように立てる〕」という。そして、乾燥した穀類を並べて積んで、片方から20センチ（1ト）程度の厚さに広げて並べる。その上に去勢牛あるいは馬をつないで、内側の牛をへそ棒につなぎ、子ども1人をその上に乗せ、その他のつながれている牛たちを一定の速度で歩かせる。1人の子どもはフォークをもって牛糞が落ちないように場を清潔に保つ（3、6、9頭の牛）。牛に踏まれて穀類の実が落ちた茎類はその場から出される。こうして脱穀が終わると、ツァンの上には茎から離れた穀類が残るので、それをシャベルでツァンの片隅に積み上げる。これを風の方に向かって木製シャベルで投げ上げると、残ったゴミや枯れ草が飛ばされる。このように穀物をきれいにし、別の場所に積む。きれいにして用意した穀類をセルヒ（3歳以上の去勢ヤギ）の皮で作ったトロムに入れて、料理に使う分とする。来年の種モミには、「オールハイ」という専用の穴に保存する。ウリヤンハイたちの主たる農耕は、他のオイラートモンゴル族と同じく、赤い大麦（モンゴルアモー）、青い穀類、ゾルガーダイ〔六条大麦？〕であった。

厳しい大陸気候の山岳地域では、これらの作物が淘汰を乗り越え、代々にわたって栽培され、家畜の飼料に使ってきたことはオイラートやウリヤンハイらの知恵であり、労働の果実である。

ザハチン族（同上書 352-354 頁）〔ホブド南部〕

〈農耕〉

19世紀から20世紀の境にザハチンはかなり大規模に農耕を営んでいた。ザハチンの2つの旗、ウエンチ、ボドンチ、アングスティン川沿いのボーミン谷、ダルティン谷、ナリン谷、バルラギン川沿いのバルラギン赤い丘近辺、アングルタド・ハリョーンの草地に農耕地が多く分布していた。

アルタイ山脈の北斜面、ゼルレギン川の、ツァガーアラル、オールハイ、シルゲドなどの地域で5つの郡のザハチンたちが農耕に携わっていた。

ザハチンの農耕は灌漑農業である。農作業を早春、3～4月に始めていた。畑をザハチンたちは「アングス」〔犁の語が畑に転用されている〕と呼んでいた。アングスを選ぶとき、土壌の色や肥沃度から「エルセンツェル〔砂っぽい〕・ザーラグ」と「ラータイ・ショロー〔土壌〕」を適切と判断してきた。前者は黒土で、比較的固く、このような土に小麦大麦がよく育つと認識されている。

それから、そのつぎにアングスを整地する。長方形に整地し、周辺に土を盛り、土手とし、「フトロム」を作り、「ホドラー *khudraa*」とする。ホドラーを小さく区切り、それを「タグト」と名付ける。

アングス〔畑のこと〕を灌漑するときに、みなで川から「將軍種牡牛」と名付けた水路を掘り、その最初の起点にオボーを立てることと、水路を作ることを重要視するため、当該地域住民は総出で、オボーの上に木を立て、それにハダグを結び、羊のゴルガルダイ *gurgaldai* などの部位を捧げ、それらを羊の毛皮の毛のついた面で覆う習慣がある。オボーの隣に羊の丸煮を供えて、読経して、宴会ののち、みなで水路を下って、畑を分ける。

將軍種牡牛〔大水路のこと〕とアングスのあいだに、「ソマン・ボフ〔矢の種牡牛〕」という名前の水路を引き、全世帯のアングスに水が行きわたるように開ける。「種牡牛の耳」を作り、水を入れ、ホドラーを灌漑していた。1つのホドラーは1つの耳をもつ。

アングス、ホドラー〔畑〕を用意し、播種する前に、「土の水」を行き渡らせ、6～7日後に播種する。直接アングスによって上から7～10センチを耕す。種を鳥に食べられないように、風で飛ばされないように、土を碎いてかぶせる。ラーの土壌〔前述の土壌分類の後者〕の場所では、7日前、砂っぽい場所では、耕起する。一般的に5月15日から6月1日のあいだに耕す作業を終えるべきだったという。

土地を耕す30日あるいは40日後に、「黒土の水」を与える。水は少量、少なめに

与えるべきであり、アンジス〔犁〕の跡を埋まるまで水を入れていた。30日目に「砂地」、40日目に「ラータイ」を与える規則があった。水を与えすぎると農地が悪くなると言われている。

この灌漑のあと、7～10日後に、「辮髪の水」を与える。水は十分に与えるべきである。そして30日あるいは35日後に「鎌の水」を与える。このあと、20日あるいは25日後に収穫作業が始まる。また、収穫する前に乾燥しすぎると穂が落ちてしまうので、穂が落ちてしまうので水を与えたほうがいい。

ザハチンが分布する地域では、作物が90～120日のあいだで熟するとみられている。収穫にあたって、作物が熟した場所から刈り取りしながら、10日間で終了する。収穫後、その場所に基本的に3年間は栽培しないで休閑する。

穂の付いた作物を「ツァング *tsang*」とよび、束にして「ツァングの寝台」に積み上げる。それは、土を固めたもので、石と砂がなく、真ん中に棒が立った、円形の場所を指す。その棒を「ツァングのへそ」と名付ける。

ツァングをフォークでひっくり返し、量が多い場合は10日から15日、少ない場合7日から10日乾燥させる。このように穂付きの作物の一部を「ツァングの寝台」に並べておく。外側に置いた細い束の穂が内側向き、内側に置いた束の穂は外側向きに、交互に置く。ゾーザイ〔茎の上のほう〕で結んでへそ棒につないだ数頭の馬で回して歩かせて、ツァングを踏ませる。

ツァングを踏ませるときにまた風に向かってフォークをいれながら脱穀する。デルスの箒で脱穀した穀物をへそ棒の南側に積み上げる。家主が穀物の頂上をならし、上に家紋を書き、その模様を自分の倉敷で押し、その上に白い石を置く。そのような興味深い習慣があった。そして、農民たちはお茶を飲み終わって穀物を袋詰めする。最初の3シャベルは必ず、新しいヤギの皮袋に入れて保存する習慣があった。残りの雑混じりの穀物は「ヒブセン」と言い、「ヒブセンを分け与える」と言って主人から他のすべての人びとに1シャベルずつ裾に入れて分け与えた。またへそ棒を倒すときに、穴に必ず穀類を入れて主人は祝詞を述べる習慣があった。

作物の種類は、主としてノギのある麦〔大麦〕であった。家畜の飼料として小麦、ショモール *shomool*、ワンドウイ〔豆〕を栽培していた。作物の先端をトゥルー〔穂〕と言い、それを特別な場所に穴を掘って保存すべきである。

穴を掘って貯蔵することについて。山麓でそれほど日差しが届かない場所に、豊作で入れ物が不足するときに、穀類を穴に保存していた。穴を四方形に掘り、そこに乾燥させた穀物を折れて貯蔵していた。

農具としては、犁、鎌、シャベル、ジョートー〔雑草取り用の鎌〕、穀類用袋、挽き臼、熊手、デルス〔ハネガヤ草〕の箒などが使われてきた伝統がある。

ミャンガド族（同上書 391 頁）（オブス県）

G. E. グルム・グルジュマイロや、C. J. ジャムツァラノたち研究者は自著でミャンガドたちは農耕をしないと記録している。

19 世紀末、ホブドのアンバンの命令で、ウールド、ザハチンの旗とともに、ミャンガド旗から穀物を収穫する時期に、「無賃男性」という大勢の人びとを供出し働かせた。たとえば、ミャンガドから 5 世帯、ウールドから 5 世帯というように「無賃男性」が乗馬して畑に行き、鳥たちを追い払い見張り役をしていた。

私たちの調査によると、20 世紀の初頭に、ミャンガドたちはそれほど農耕を営んでおらず、ソンドイリン川の末端に数少ない人びとが小規模の畑を作り個人的に収穫をしていた。

ミャンガド族の出自と歴史の研究に貢献した、ボショグトサンダクの父親であるシャルボホという人がソンドイリン川で初めて農耕をしたという歴史があるという。

それはともかく、ヤダムジャブ、サンジゲンの時代からミャンガドたちは農耕をしていたということはあるまい。しかし、ミャンガド旗の富裕な人びとと寺院の財産管理人は、毎年キャラバンによってオランゴムやオブスのホトンたちから 1 年分の需要を満たす大麦の穀類と穀粉を購入して利用していた。

参考資料 2

2009年12月11日の首相による国会報告「農牧業の発展」全文和訳

[] は訳者による注。

S. バトボルド首相は本日、国家大会議の午後の会議において、農業および牧畜分野の事業の現状、直面している問題というテーマで報告を行った。この報告について全文をここに掲載する。

国家大会議議長、
国会議員のみなさん、

モンゴル国の政府は、国民の食糧自給、安全を保障する目的において、“未開墾地開拓第3運動”——農業発展の国家プログラムを2年目の今年も成功裏に実施している。

“未開墾地開拓第3運動”——農業発展の国家プログラムを実施し始める以前は、総作付面積のうちわずか30%程度が使用され、農業生産において使用している機材は老朽化して技術的な要求を満たすことができなくなっていたことから、小麦需要のわずか24.9%、野菜の47.0%、ジャガイモの86.0%をそれぞれ国内で自給するにとどまっている。

国家プログラムを実施した2年間において、政府から明確な政策・計画に従って以下の方策を実施した。その結果、上記の状況は根本的に変化してきている。

まず、最初に農業生産を復活させることに関係したいくつかの法案を国家大会議に提案し、審議して承認された結果、輸入している農業用のトラクター、コンバイン、機材、小麦生産および灌漑用機材、肥料、農薬の関税および付加価値税の免除、国および各製粉工場に、購入した小麦に対する報賞を与え、モンゴル国開発基金の資金の一部を食料用小麦の備蓄という形で配置させたことなどは、小麦の価格を安定させる、生産を増加させる、農業分野の経営体の経済的能力を向上させることにおいて、重要な支援となった。

政府はプログラムの枠組みにおいて、農業従事者の1,500以上（重複あり）の経営

体、個人に対して7,800トンの石炭、2万3,300トンの種子、1,000トンの化学肥料、225.2トンの農薬を与えて支援を行った結果、計画した水準の作付けが行われ、2008年には25万6,400ヘクタール、2009年には26万9,000ヘクタールにおいて質の良いオリンシurinsh〔春に耕起して播種の準備をした耕地のこと。休閑地と訳されることもある。〕が準備できた。

“未開墾地開拓第3運動”——農業発展の国家プログラムの枠組みにおいて、3つのクラスの計560台の牽引大型トラクター、115台の種まき用コンバイン、380台の牽引用農機具（プラウ）を輸入して導入する事業を実施した結果、農業生産において使用している牽引大型トラクターの65%が刷新された。農業に従事している小規模な経営体、個人に機材、技術サービスの享受の機会を与える目的で11アイマグの22ソムで機材提供サービスを行う共同組織を設立したことで、4,000以上の野菜栽培者の手作業による労働を機械化することができた。

すべてのソムに農業ステーションを設立し、30トンの容量を持つ貯蔵庫、24平方メートルの面積を持つビニールハウス、小型トラクターを配備した。世帯経営体の生産を機械化させる目的の枠組みにおいて、98台の全装備を含むジャガイモ用中型トラクターを、104台の全装備を含む干し草用小型トラクターを、それぞれ供給する事業を組織した。

“緑の革命”プログラムおよび国連の食糧農業機関（FAO）から実施されているプロジェクトの枠組みにおいて、940ヘクタールに作付するジャガイモ、野菜の種子を8,000世帯に供与したことは、収入の低い世帯の生活に好影響を与えたとともに、ジャガイモ、野菜生産を12-16%増加させた。ウランバートル市のビニールハウス専門の経営体を設立する目的で、計4万3,200平方メートルの面積を持つ310のビニールハウス全装備を供与したことは、栽培の種類を増加させ、市場に販売する製品数、量を増やす条件を整えることになった。

果実生産を支援する目的で、プロジェクトを選抜し、19アイマグの78経営体、組合、個人に、計9億2,000万トゥグルグの長期融資を行い、果実栽培面積を300ヘクタール増加させ、首都のハンオール地区では20ヘクタールの面積の苗を生産する栽培園が設立された。

プログラムを実施した2年間に、灌漑システムを新設する、修理して再利用する事業に国家予算から108億トゥグルグを費やし、灌漑所有面積において、2008年には8,800ヘクタール、2009年には5,300ヘクタールそれぞれ増加したことで、総面積は

3万5,000ヘクタールに至った。

農業分野で実施された上記の方策の結果、2009年には39万2,900トンの穀類、そのうち38万9,100トンの小麦、15万6,000トンのジャガイモ、8万1,400トンの野菜をそれぞれ収穫し、年間に必要とされる小麦の97%、ジャガイモの100%、野菜の50%を国内生産の収穫で供給する可能性を得ることになった。

将来は、穀類、小麦、ジャガイモの需要を国内生産でまかなうレベルに到達させ、また、国内で生産された製品の販売に困難をもたらす可能性があることと関連して“輸入製品の関税率、税額を承認することについて”国家大会議の決定において、穀物関税を年間5%としていたものを、2009年12月からは15%、ジャガイモおよび小麦粉の関税を月の区別なく15%にそれぞれ引き上げるという意見を、生産者や問題を担当する省が出していることを調査している。先頃、未開墾地開拓の50周年記念がそれぞれの地方で行われた。セレンゲ・アイマグで行われたこの行事において、私はモンゴル国総理大臣として自ら参加し、農業従事者たちと喜びを分かち合ったことで、地元みなさんに喜んでいただいた。

では、次に、牧畜分野の事業の現状、成果、直面している問題について申し上げる。

昨年の年末の家畜頭数調査（センサス）の結果、国家レベルで4,330万頭の家畜が集計された。また今年の11月1日の状況では、1,480万頭の家畜が生まれ、1,390万頭の子家畜が成育している。専門機関が行った推計からみると、4,820万頭以上の家畜が冬営をしている。現状では21アイマグ・首都の540万頭の家畜が他のアイマグ、ソムの土地でオトル（移牧）を行っている。

政府は政府から牧民について準拠する政策書および牧民世帯の収入を免税とする法案を国家大会議で承認させ、実施する事業を組織している。

牧畜分野の2009-2010年の冬営準備を行うことについての問題について、政府は2009年7月22日の会議で議論し、“冬営準備を十分なものとするいくつかの方策について”政府第221号決定を出し、地方に通達し、実施を組織した。政府は100万トンの天然の干し草、17万6,900トンの工場生産および手生産の飼料を準備する命令をアイマグ、首都に発して実施した。最新の情報によると、国家レベルで95万7,200トンの干し草、12万4,000トンの工場生産および手生産の飼料が準備されている。

政府の実施管理機関、食料農牧・軽工業省、自然環境・観光省、非常事態庁、気象環境調査庁の関係する専門家が参加した作業部会は、今年9月にドンドゴビ・アイマグの5、ウムヌゴビ・アイマグの6、ウブルハンガイ・アイマグの8、バヤンホンゴル・

アイマグの6, ゴビアルタイ・アイマグの9, 合計5アイマグの34ソムの干害の状況を定め、結論を出した。この結論によると、上記のアイマグの総面積の50-80%は干ばつ、20-40%は干ばつの傾向にあるということから、政府は“家畜冬営準備に関連させて取る追加方策について”政府第296号決定を出し、5アイマグの国家備蓄10ヶ所に2,300トンの干し草、飼料を配備するときに必要な輸送費として3億9,380万トゥグルグ、オトルを行っている牧民に保健、社会および政府サービスを行うために必要な増加支出のために、7アイマグに2億800万トゥグルグを政府の予備資金から、草資源がありながら、水の供給ができていない5アイマグの12ソムに井戸を掘るのに必要な1億4,940万トゥグルグを食料農牧・軽工業省大臣の2009年予算の範囲からそれぞれ計上させる問題を決定し、実施させる方策を取った。

また、関係する省が共同調査を行い、2009-2010年の冬、春には、国家の20の特別保護区に9アイマグの39ソムの68万400頭の家畜、国境地帯にある8アイマグの29ソムの1,225世帯の51万7,500頭の家畜をそれぞれ一時的にオトルという形で冬営・春営させる問題を決定し、オトル移牧を組織している。

アイマグ間の特別要請によるオトルの放牧地について、総面積の計57万7,300ヘクタールの土地で家畜が冬営・春営する可能性、資源を調査し、ドルノゴビ・アイマグのマライハ、バヤンホンゴル・アイマグのボルアルガラント、ザブハン・アイマグのバガハイルハン、ドルノド・アイマグのチョイバルサンのオトル地帯の土地に8アイマグの45万頭以上の家畜を冬営させる契約協議を行い、オトル移牧を組織している。

地方のレベルにおいて、オトル移牧を組織する方向で調整した結果、現在の状況ではドンドゴビ、ウムヌゴビ、ドルノゴビ、バヤンホンゴル、ザブハン、トゥブ、スフバートルの各アイマグから計1,789世帯66万2,100頭の家畜が他のアイマグ、ソムにオトル移牧をして冬営・春営する問題を調整し、解決を行っている。

我が国には、地方の人口、牧畜に水を供給するための4万2,419基の井戸がある。この中の3万5,982基の井戸が利用されている。これは総家畜の50%に水を供給することができるということである。食料農牧・軽工業省は放牧地への水供給を目的として、2017年までに毎年1,000基の井戸を新しく掘ることを計画した。そして、ここには毎年140億トゥグルグの投資が必要だという試算を行っている。2009年に放牧地への水供給を行う方策の枠組みで、38億トゥグルグで16ヶ所のアイマグ、オトル地帯の土地に新しく216基の井戸を建設するという計画のうち、現状では180以上の井戸が建設され、総事業の83.3%が達成されたという報告がある。また、地下水の探査

を4億トゥグルグかけて5アイマグで行い、その結果、水の出る可能性のある地点数が300ヶ所以上増えることになっている。

気象環境調査庁が評定した結果から見ると、2009-2010年の冬・春の総牧草地の35%は余裕のある状況で、そのアイマグ・ソム自体の家畜以外にある一定数の家畜をオトルで受け入れて冬営する可能性がある、10%はオトル移牧の計画はできないが、その地方の家畜は冬営させる可能性がある、30%は牧草地の許容量を1～5倍超過している、25%は牧草地の許容量の5倍以上も超過した状況にある。

牧草地、干し草用の草地での害虫・害獣（ネズミ）駆除作業の枠組みにおいて、2009年には牧草地の植物に被害をもたらしている野ネズミ〔原語はウリーン・ツァーガン・オゴトノ *ülin tsagaan ogotno*、ハタネズミ属のネズミで草地に穴を掘り、草を根から食べてしまう〕やバツタを駆除する作業を計46万5,000ヘクタールの土地で国家予算からの支出によって実施させた。この結果、予想値で11アイマグの69ソムの牧草地の許容量を36万ヘクタール増加させることが可能となった。

家畜の群の保健、伝染病・寄生虫病からの予防、診断検査を2009年には計4,630万頭（重複あり）の家畜に実施し、63億トゥグルグを支出した。

今年、家畜、食肉の輸出を増加させる方向で、明確な方策を取って実施させている中で、政府の第297号決定を出し、家畜・食肉を輸出する国境の税関数を7ヶ所増やして、計19ヶ所とした、計68万頭の繁殖用家畜を輸出する制限数を各アイマグに与え、地方行政機関と共同して組織し、88の個人・経営体を選抜して特別許可を与えている。しかし、現状では4,540頭の繁殖用および食用のウマ、650頭の繁殖用ヒツジを輸出したという情報が入っている。

国家レベルにおいて、年間に8万5,000トンの大型家畜の肉を生産する稼働能力を持つ32の屠畜工場がある中で、18工場はここ3年間安定して稼働している。2009年度、工場生産の方法で加工された食肉・肉製品の輸出は以前の年と比較して増加する傾向にある。現状では、牛肉5,700トン、馬肉5,600トン、計1万1,300トンの肉が輸出されている。

我が国は、経済関係のある諸外国のうち、ロシア、カザフスタン、中国、日本、ウクライナ、アラブ首長国連邦と獣医学分野での共同事業および、畜産品の輸出入時の禁止条項について相互合意協定に基づいて、議定書を結んでいる。家畜・食肉を輸出するときの検疫、禁止条件、要請を満たす目的で、2009年に“モンゴル国からロシア国へ繁殖用および食肉用のヒツジ、ヤギを輸出する検疫証明”の形式を最終合意した。また、ロシアに家畜、食肉を輸出する工場への証明書交付および関係する一部の

税関の状況を適合させ、結果を出す目的で、ロシアの検疫・禁止植物管理局の調査官をモンゴルに3回招き、計12ヶ所の肉工場に証明書を与え、その上、ザブハン・アイマグのアルツ集落税関の禁止状況、検疫の衛生状況が輸入国の要求に適合しているかどうか、共同で検査を行った。また、2009年には中国と“食料品輸入、輸出の安全共同活動についての協定”を締結した。

食料農牧・軽工業省から一部の地帯を口蹄疫から保護された状況にすることについて結論を出させたことで、世界動物保健機関（OIE）に問題提示をしている。

家畜、食肉輸出の主条件として、家畜が健康である、検疫、禁止項目が適した条件である、現代的な技術を有する、国際基準に適合した食肉加工工場を持つことなどを、興味を示した国々は挙げている。これに対して、政府からは、ソム・区で業務を行っている家畜病院および繁殖の第一生産段階の単位を強化する、能力を向上させることに対して、効果的な方策を実施するよう、食料農牧・軽工業省に命じ、作業が行われている。

現状では全国の70%近くが雪に覆われており、ゴビアルタイ、バヤンホンゴル、ドンドゴビの各アイマグ、オプス・アイマグの東および東北側のソム、トゥブ・アイマグの東南側のソム、ゴビアルタイ・アイマグのアルタイ南ゴビのソムでは、家畜の冬営状況は非常に厳しいものとなっている。また、専門機関からの警告によると、ザブハン、ゴビアルタイ、アイマグでは雪害（ゾド）の状況が特に悪化する可能性があること、ウブルハンガイ、ドンドゴビ、バヤンホンゴル、ウムヌゴビの各アイマグの冬営状況について、政府の作業部会を任命して調査を行った。また、ドンドゴビ、トゥブのアイマグには私自らが赴き、地方の冬営状況を現地視察した。家畜の冬営において、発生している状況を調査した作業部会の意見結果を、関係する省、エージェンシーが分析し、この先取るべき方策についての意見を作成して政府の会議において2回審議を行い、干し草、飼料を国家備蓄から出して販売する、補充させる、家畜の医薬品を供与する、組織的な多くの面を持つ方策を実施する方向で決定を出した。この先冬営をどのように調整するか、牧民への政府・社会サービスを向上させる問題を政府がただ決定を出すだけではなく、近々開催されるアイマグ、首都の行政長の協議会の時に継続して審議し、責任課題として与える。

将来、牧畜分野で以下の方策を段階的に実施する要求が出ている。

2010年を“政府から牧民について準拠する政策”を実施する年と定め、その政策の枠組みにおいて実施する事業を強化させる；

獣医学機関を強化させ、一部の家畜伝染病から家畜の群を健全化し、隣国および興

味を示している各国に家畜・食肉を輸出する条件を満たすという必要性が出てきている。このような要求を満たさない限り、我が国に何百万頭の家畜、何千トンの肉があったとしても経済循環に組み込めないことははっきりとしている。この枠組みにおいて、国家大会議の一部の議員の考案した“モンゴル家畜”国家プログラムを国家大会議で承認することを政府は支持していることを表明する。

ご静聴ありがとうございました。

冬営が困難になっていた一部のアイマグで実施する方策について決定が出された。

2009 年 12 月 11 日

政府の臨時閣議が今日行われ、以下の問題について審議し、決定された。

政府の臨時閣議が行われ、一部のアイマグでは冬営状況が悪化していることと関係して、実施する方策について決定が出された。

決定によると：

- ・国家備蓄から供出して、アイマグに配布する家畜の医薬品の配分、国家備蓄の支部、地点に追加して配置させる干し草、飼料の量およびその輸送経費、国家備蓄からアイマグに供与、補充する自動車、ディーゼル、無線の配分、国家備蓄の一部の支部から冬営が困難となったアイマグの牧民に販売する干し草・飼料の配分を定めた。

これに従って：

- ・牧民がオトルを行っているアイマグにオトルの調整本部を設立し、牧民に対して、政府・保健・社会の福祉サービスを迅速に提供する作業、サービスに支出される不足経費を供与する。
- ・アイマグ間のオトル牧草地利用を行う行政機関に自動車を供与する。
- ・ウムヌゴビ・アイマグのフルメン・ソムの土地にあるツァガーデルオールという土地に一時的方策として、干し草・飼料購入のための臨時の国境税関を設ける。
- ・中央地帯に、アイマグ間のオトルの牧草地を新しく設けて特別要請に利用する問題を調査し、2009 年 12 月に政府に報告させる。
- ・地方で準備された、基準・質の要求を満たした肉・肉製品を防衛・国境軍、首都予算下にある機関に卸す、食肉を輸送する作業を干し草・飼料と結びつける方策を取る。
- ・オトル移牧のため他のアイマグの土地で冬営している牧民・その家族に健康診断、

検査を受けさせる作業をアイマグの指導部と共同で計画する，必要な場所には中央から専門医のグループを活動させることを関係する省・エージェンシー・公務員の任務となす。

また，アイマグ，首都の行政長たちに：

- ・家畜を自分の地方およびその他のアイマグ，ソムのオトルで冬営させる活動を組織する，調整させる，管理する方策の計画を出して実施させる。
- ・家畜の冬営準備を行う作業を十分に組織しなかった，冬のオトルを流れのままに放置したソムの指導部に責任を取らせる。
- ・国家備蓄から出し，販売している家畜用の医薬品および干し草・飼料をソムに分配し，牧民にどんな仲介も中に入れることなく，直接届ける作業を計画する。
- ・オトルの調整本部を 2010 年 4 月まで活動させる。
- ・ヤギ，繁殖用の肉において伝統的手法で干し肉を準備する計画的な方策を取る。
- ・準備した肉を保存する，保全する，生産地を明確にする方策をとる。
- ・準備した肉の種類，量，質について，正しい情報を与え，国内外の市場で統一した計画のもとで販売する事業を組織することを命じたと，政府広報部から報告がなされた。

参考資料 3

旧国営農場アタルの農場長スレンジャビン・タムジッド氏への
インタビュー（2008年9月12日）

本日は、モンゴル国で行われた第2次未開墾地開拓運動に携わられたタムジッド氏にお会いすることができ、われわれは非常に光栄です。インタビューはご自身の幼少期の思い出から始めたいと思いますがいかがでしょうか。どこで生まれ、幼少期をどこでどのように過ごされたかお話しください。

—私もあなた方とお会いできてとても嬉しく思う。私は1938年に現在のザブハン・アイマグのテルメン・ソムの地で生まれた。わが家は第7バグに所属していた。母はツォクティン・ミヤダグといった。男3人、女3人の6人きょうだいだ。一家が「ガロート」という所に住んでいるときに私が生まれた。3歳になる頃に母方の伯母であるツォクティン・ドラムスレンの養子となった。私の養父はミヤタビン・スレンジャブという人であった。養父は1895年にザブハン・アイマグのアルダルハーン・ソムの地に生まれたという。彼が21歳のとき、彼の父が亡くなった。そのことがあって、彼は実の兄のバンズラクチと共に故郷を出、現在のテルメンソムの地に移り住んだのである。ザブハン・アイマグはハンガイとゴビを併せ持つ素晴らしい土地である。皆さんも行かれたことがあるだろう。私も幼い頃は他のモンゴルの子どもたちと同様、両親のそばで過ごした。モンゴルの子どもたちが幼い頃にどのように遊び、何を学ぶかについて、皆さんもよくご存知だろう。以前はモンゴル人の生活全般が家畜と結びついていて、モンゴルの子どもは先ず家畜の番をすることを覚える。子どもがごく幼いときには子ウシや子ヒツジ、少し大きくなってくるとヒツジやヤギの番をする。そしてさらに大きくなればウマやウシの放牧地へ行く。というように、常に家畜に関わるすべての仕事を覚えていくものだ。どの家畜がどの草を食むのか、どの家畜をどこに放牧すべきかは両親が教えてくれる。また、子ども自身も家畜を追いながら観察して覚える。このようにして植物について、動物について、虫についても知識を蓄えてゆくのだ。われわれは生きた自然に囲まれている。すべての生物、植物、水、自然、世界にその営みがある。たとえば、どの花がいつ、どこに生えるのかを一番初めに知るのはいわれわれであり、また、どの生き物がどこで、何を食べ、飲んでいるかをわれわれだけが見ることができるのだ。水鳥はいつ飛来し、いつ故郷へ帰るのか、タルバ

ガンや野ネズミがいつ冬眠し、いつ目覚めるのか、オオカミはいつ子を産むのか、鹿の発情期はいつかなど生き物の生活を絶えず目にし、観察している。モンゴルの子どもは幼いころから、このようにして先ず自然界と触れ合うことを学ぶ。これを人生の大学と名づけるのだが、日本でも同じだろうか。都市でゴム製の玩具で遊んで育つのと、生き物と遊びながら育つのとでは違う。このように異なる条件下で成長した人びとの世界観はまったく違うものとして形成されている。

私の幼少期は、そのような環境でそのような状態だった。他の子どもたちとなんら変わったところはないということだ。そして私は8歳になり、小学校へ入学した。私の時代はモンゴルの子どもは8歳になってから小学校へ入学したものだ。私の両親は家畜を追って生活していたため、私は学校の寮に入っていた。私は小学校の4年間をずっと寮で過ごした。私の世代の人間は皆そうだった。大体、一度も寮で暮らしたことがないというほうが少ないと思う。今年からわが国でも小学校入学年齢を6歳からとしているが、早く入学して、早い時期に人生の一端に触れるほうが良いだろう。しかし、私のように家畜のそばで育ち、両親が家畜を追って生活している家の子どもたちにそれが適切なのかどうかは疑問だ。その点はそのうち時間が明らかにしてくれるだろう。われわれは秋の新学期になると寮で暮らし、春に学校が休みになると家に戻った。一部の子どもは秋の終わりまでは家からウマで通い、寒くなると寮から通った。小学校ではこのようにして学び、1952年に卒業した。さらに中学に進み、学びたいという強い希望をもっていたものの、それは不可能だった。父が許さなかった。

家畜の数は多かったでしょうか。どのような家畜がいましたか？

—うちの家畜の数はそう多くはなく、中程度だったが、すべての種類の家畜がいた。もともと、われわれの土地はハンガイとゴビを併せ持つ土地柄であるため、他の家の家畜構成も同様である。しかし、家畜の種類によって頭数は異なる。たとえば、ヒツジは頭数が他の家畜よりも若干多く、ラクダは若干少ない。普通、その土地の特徴によって、家畜群の構成は異なる。各家畜の身体的特徴や食む草や植物などの多くの理由によってこのような違いが生じる。私が子どもの頃にはまだ農牧業協同組合は組織されていなかった。私の父スレンジャブは1955年にテルメン・ソムの「ジャルガリンザム（幸せの道）」農牧業協同組合に加入した。以後、父は定年までこの農牧業協同組の家畜を世話して暮らし、81歳まで生きた。

小学校を卒業してからはどうしていたのですか？

—小学校を卒業した後は、以前と同様、また家畜を放牧して生活することになった。10歳を過ぎた頃だった。モンゴルではこの年齢になると、家畜の世話、家畜から得る各生産物の利用、加工といった家畜関係の仕事全般を人の手を借りずに行うことができるようになってきているものだ。家畜の皮をなめす、狩をする、ウマを乗り馴らすなど、私にはやらない仕事というのがなかった。自分もその仕事がとても好きだった。このような状態が3～4年続いた。1957年の秋、9月に、私は幼友達のダワーと共にザブハンアイマグの中心地を訪れた。その頃、モンゴル国では未開地を開墾する全人民的運動が開始されていた。各地の青年たちは新たに未開墾地を開墾して建設された各国営農場で労働すべく志願したのだった。この活動はモンゴル革命青年同盟によって全国的に統率され、組織されていた。トラクター運転教習所で自主的に学ぼうという青年たちに対しては「モンゴル革命青年同盟派遣」の制度があった。

われわれザブハン・アイマグの青年たちをトゥブ・アイマグにあるアルホスト国営農場へ派遣し、トラクターの教習を行い、トラクターの運転手を養成していたのだ。友人のダワーも私もそこへ行き、トラクターの運転手になろうと決めていた。そこで私たち2人はザブハン県の革命青年同盟の委員会を訪れた。委員会ではその業務を部長のT.ジャムスランという人が担当していた。私たち2人は自分の希望を伝え、トラクターの運転教習の参加者として登録してもらった。そして喜び勇んで、出発に備えていた。その日から程なくして、出発することとなった。しかし、当日になって見ると参加者リストに自分の名前がないのである。驚いて、私の名前がなぜ抹消されてしまったのか、その理由を明らかにしようとしても、革命青年同盟の委員会では、明確な理由を教えてはくれなかった。そうこうしているうちに登録を担当していたジャムスラン部長がやってきた。部長が自分の執務室に来るようにと私を呼んだため、私は入室した。

「こんにちは」と彼は挨拶し、私の手を握った。

「こんにちは」と私も挨拶をした。

「アルホスタイ行きはしばらく様子を見よう。君には別の任務についてもらいたいのだ」というのではないか。私は非常に驚いた。

そして、

「どのような任務でしょうか」と私は強い口調で尋ねた。

「明日、当アイマグの革命青年同盟委員長のS.ゾンドイ氏が君と会う。任務については彼から伝えることになる。明日11時にアイマグの革命青年同盟委員会で待機し

ているように」といって彼は部屋を出て行ってしまった。

私と一緒に登録されていた青年たちと友人のダワーらは、赤旗が立てられ、垂れ幕が飾られた車に乗って出発した。多くの人びとが彼らを見送り、そして若者たちは大声で歌を歌いながらアイマグ中心部を後にした。当時、未開墾地開拓運動への参加を志す青年たちをこういった立派な式典のような形で送り出していたものだ。そうして、私は非常に気落ちしたまま、翌日の予定を待つ身として後に残されたのだった。そのような顛末で私はトラクターの運転手となって、未開墾地開拓運動に参加するという、素晴らしい機会を逃したのだった。当時はこの運動は非常に重要な一大事業だったのだが、モンゴル国の運命において如何なる役割を果たすものであるかについて考えを巡らすことは、私や私と共に参加を望んだ青年たちにもありはしなかった。この事業の構想やその意義は後々、明らかになるのである。このときには私は未開墾地を開墾するという全人民大衆を巻き込んだ大事業に参加することはできなかったが、1970年代半ばから展開された第2次未開墾地開拓運動に参加するという素晴らしい機会を得たのだった。そのことについては後で述べよう。

そして私は翌日11時にアイマグの革命青年同盟の委員会にいた。アイマグ革命青年同盟委員長のS. ゾンドイ氏は私を自分の執務室で迎えた。彼はなぜ私を他の青年たちと共に送り出さず、残すことに決めたのかについて説明を行ったが、私には余りよく理解することはできなかった。S. ゾンドイ委員長との面会時間はそれほど長くはなかったが、話の最後に「君は同盟の仕事をするようになる。われわれは君をトソンツェンゲルソムの青年同盟の細胞長として任命することにした。アイマグ革命青年同盟委員会の局の会議決定が間もなく出されるところだ。君の意見はどうか。」と尋ねる。しかし、事態が既にここまで進んでいる以上、内心は気が進まなかったが、委員長の言葉を了承した。当時、アイマグ革命青年同盟委員会の局のメンバーはP. レンチン、N. ジャムスランなど同盟の実績、経験共に申し分ない人びとで構成されていた。そして、約1時間後には、アイマグ革命青年同盟委員会の会議が行われ、私をトソンツェンゲル・ソム革命青年同盟の細胞長として任命することが決定された。私はそのソムへ赴き、細胞長として3年間、任務に携わった。

当時、ソムの革命青年同盟の細胞はどのような活動に重点を置いていたのでしょうか？

—当時、トソンツェンゲル・ソム革命青年同盟の細胞には約80名の細胞員がいた。われわれはソム内における活動全般に携わる。中央とアイマグから、家畜頭数の増

加、家畜の毛や乳、バターなどの生産物の生産、刈草や飼料の備蓄といった計画労働が課される。これらの各計画労働を期限内に、良質に、計画通りに遂行するために青年たちを積極的に動員させるための活動を革命青年同盟の細胞が組織していた。青年たちを上手く組織することができれば、大規模な労働でも容易にこなすことができるのだ。われわれは青年たちに対して、彼らを鼓舞するための様々な活動を企画したものだ。労働に励み、他の模範となっている青年には褒賞を与える。その労働が不十分である場合には叱責し、以後、努力するように要求する。また、青年の教育問題についても重要視していた。青年たちの愛国心を育み、勤勉で慎み深く、そして学問を大切に考える考え方を持つべく教育することが最も重要とされていた。また、モンゴル国の法律や規則を厳守実行し、党や政府の決定及びアイماغやソムといった地方行政指導部から課された責務を、期限内に完遂するために全力で労働に従事するよう教育するための多くの活動が計画された。青年たちをあらゆる悪習慣に陥ることのないよう、たとえば、酒やタバコなど健康に有害な嗜好品を用いないよう、法規及び社会秩序に反せぬよう徹底して注意が払われた。ついでに、私が酒というものを初めて飲んだときのことで少し面白い話があるので話そう。昔からモンゴル人は40歳になるまで酒を口にすることが禁じられていた。モンゴルでは酒の飲み方について「40歳で口にしろ、50歳でじっくり飲め、60歳で楽しんで飲め」と言う。実際に私が子どもの頃や若い頃には酒を飲んだ人を見かけることは非常に少なかった。特に若者は一切口にはしていなかった。自分の記憶では先ずそういったことはない。当時の青年たちの教育はまったく違った。現在のようなものではなかった。若者は年長者を大いに敬い、畏怖していた。年長者の目を非常に気にし、年長者の言葉をよく聞いた。言いつけられたことはその通りにきちんと行ったものだ。

1950年代の末から1960年代の初頭にかけて、店頭にロシア製の「ツァーガンアルヒ（白い酒）」という名の酒が並ぶようになった。その名前の由来についてはよく知らないが、いずれにしてもラベルには何の絵も描かれておらず、白地に「アルヒ」と書かれただけのものだった。あるとき、その酒を飲んだのだが、その顛末は愉快なものだった。我がソムの書記官のS. ダシジャムツという青年と、兵役を終えて帰郷したばかりのD. バダムという青年の2人がある日、私の執務室にやってきた。D. バダムはウランバートル市付近で兵役に就いていたと思う。仲間うちでは、遠方を旅し、「見聞し、目が開かれた」青年なのだった。当時、3年間もの兵役をまっとうするというのは非常に大きな功績だった。男性たるものの義務の一つであると考えられていた。そしてわれわれ3人はしばらく部屋で雑談をしていた。そのうち、S. ダシジャ

ムツが言う。「ソムの商店に昨日、新しい品が来た」と。当時、ソムの中心部の商店に新しい商品が出回することは非常に珍しい、稀なでき事であった。入荷する商品はすべてソ連製で、様々なものがあった。こうして3人は商店へ向った。商店に入るとショーケースの後ろ側の棚に、きれいな透明のビンに入ったものが高く積み上げてあるのが目に飛び込んできたのを非常に鮮明に覚えている。バダムは「これは「ツァーガンアルヒ（白い酒）」というものである」といった。私はそもそも「ツァーガンアルヒ」というものが何なのかについて何の理解もしていなかったので、「ああ、そうか」というだけで、別の商品を冷やかしていた。そのうち3人で店を出た。しかし、例のD.バダムはいつの間に手にしたのかは分からないが、「一本仕入れたぞ。3人で飲もう」というのだ。当時、それは15トッグルクで売られていたように記憶している。当時としては非常に高価であった。S.ダシジャムツと私は「そうしよう」と言って3人で川岸へ行き、柔らかい草の上に座った。そして、D.バダムは例の「ツァーガンアルヒ」の栓を抜いた。当時、酒のビンはコルク栓、松脂で封がされていた。D.バダムは例の酒の栓の封を擦ってきれいにし、ビンの底を拳で2、3度強く叩いた。するとコルク栓が中ほどまで上がって出てくるのだ。そうやって栓を抜いた。われわれ2人も「文化に驚きながら」座っていた。D.バダムは器に入れて、まず自分で飲んでいる。そしてS.ダシジャムツに注いでやった。S.ダシジャムツはそれを受け取り、口に近づけたが、顔をしかめて、「おい、ひどい臭いだ。どうやって飲めというのだ」といって酒の入った器を返した。D.バダムは大笑いして、彼をからかっている。そしてそれを私に渡した。実際に飲むのはいざ知らず、口に近づけるのさえ難しいようなひどい臭いである。こうしてわれわれ2人は飲めないまま、D.バダムが1人でしばらく飲んでいた。そのうち、S.ダシジャムツがむせながらもようやく飲み込んだ。顔が赤くなり、大変な騒ぎになった。そして私の番が回ってきた。何とか番をこなした。始め、喉が焼けるような気がした。体の中がカッと熱くなり、大変なものである。そうして、一体誰が何杯飲んだものか、気がつくとも眠り込んでしまっていた。私も酔いが回っていることは自覚していた。S.ダシジャムツが「頭を水につけると良い」と言っていたことを覚えている。皆で川の水に頭を浸したことを覚えている。そこからは何も覚えていない。しかし、われわれ3人がそこで眠り込んでしまっているとき、そこに人が通りかかったのだった。白昼に川岸で3人の若者が仰向きのまま動かないのを見て、その人は非常に驚いた。「生きているのか、それとも…」と近づいて引っ張ってみると、酒の匂いがし、泥酔状態で寝ているのであった。それで、その様子を家に帰って家族に話したところ、大騒ぎとなってしまったので

あった。それ以降、ソム役場や人民革命党委員会では何ヶ月にも渡って様々に取り上げられた。こうして私は生まれて初めて「ツァーガンアルヒ」を飲んだのだった。当時、モンゴルの家庭ではシミーンアルヒという蒸留酒を作っていた。しかし、「ツァーガンアルヒ」はそれとはまったく異なるものであった。脳や頭に強烈に作用して容易に人を酔わせ、かつ有毒で、好んで飲みたい代物ではなかった。それ以降、私はアルヒを余り口にしていない。1960～1970年代以降、モンゴルから大勢の青年がソ連へ留学するようになった。ソ連の大学を卒業した人びとは「ツァーガンアルヒ」を飲めるようになって帰ってくる。ロシアでは「ツァーガンアルヒ」及びウォッカというものを「ロシアの伝統的飲料」と呼んでいる。私も後にソ連に留学したが、酒を飲めるようにはならなかった。公務で出席する特別なレセプション、あるいは数は少ないが、他家の宴会や結婚式に招待された場合には少々口にする。私の職業的事情もあっただろうし、一方では、まったく酒の飲めない体質というのものもあるようだ。私はそういう体質のようだ。

トソンツェンゲルソムの革命青年同盟の細胞長として勤務しているとき、われわれは青年たちを対象とした公共活動も数多く組織した。われわれは土日ごとにダンスパーティーを企画した。当時、トソンツェンゲル・ソムには「文化宮殿」はまだ建設されていなかった。ザブハン・アイマグには10余りのソムがあるが、まだ全ソムに文化宮殿が整備されてはいなかったのだろう。最終的にはすべてのソムに文化宮殿が建設され、整備された。われわれは当時、かつて寺廟だった建物を改修し、そこでダンスパーティーを行った。ザブハン・アイマグには昔、数多くの大規模寺院が存在し、ホトクトやホビルガーンの数も多く、大勢の僧侶がいた。ハルハの地には非常に大勢のホトクトがいたという。ハルハの最も高名なホトクトの1人であるデレブについてはあなた方も読んだことがあるだろう。そして1930～1940年代にこれらのすべての寺院は閉鎖され、僧侶らは内務省に逮捕され、粛清されるものもあり、長年に渡って刑務所に拘禁されたものもあった。

かつて寺廟であったその建物を自分たちで改修したのだった。そこで夜ごとに映画を上映する。また自分たちでコンサートを企画し、演奏する。社交ダンスパーティーを行う。青年たちはこのようなイベントにこぞって参加したのだった。そもそも若者のエネルギーというのはいつの時代でもそういうものであろう。それは今でも変わらないと信じている。また、家々を訪問して、宣伝活動もよく行っていた。モンゴル人民革命党の政策を多くの人民大衆に理解させ、伝播する活動を積極的に行っていた。当時はまだテレビはなかったが、ラジオはよく普及していた。しかしすべての家

にラジオがあるわけではなかった。当時は乾電池で動く「エヘオロン（祖国）-50」という名のついた大型のラジオがあった。宣伝活動に赴く際にはそのラジオを背負って出かけた。そして、アイマグやソムの中心地から遠い家々を訪れては、ラジオを流し、党や政府の政策を宣伝したり、説明したりしたものだ。ラジオからは様々な、素敵なモンゴル歌謡や音楽が流されており、人々はそのような放送に大変興味をもっていった。当時は皆ラジオに大いに興味を示したもので、ある人びとは「この小さな箱に人間が入っているのか」、「人はどこにいるのか」と言ってはラジオの後ろに回って見たりしていた。モンゴル国の大きな特徴であるが、非常に広大な国土に対して人口が少ないために、頻繁な情報交換が行われず、遠隔のアイマグへの目新しい物や情報の普及には長い時間を要する。現在でも地方部にはウランバートル市を生涯一度も訪れたことのない人が少なくない。私はこうしてトソンツェンゲル・ソムで3年近くを過ごした。仕事に慣れて、とても面白くなり、土地の人びとも旧知の間柄になると快適なものだ。そうしているうちに、1959年に人民大会議の国政選挙が実施された。わがトソンツェンゲル・ソムが含まれる選挙区からはモンゴル人民革命党中央紙である「ウネン紙」編集長のG. デレグ氏が立候補した。そして、G. デレグ氏は有権者と会うべく、5月末にトソンツェンゲル・ソムを訪れた。投票は6月半ばに行われていた。現在でも同様だ。投票がこの時期に行われるのは偶然ではない。6月末から7月初旬にかけて、牧民は夏営地へ移動する。そのため牧民たちが夏営地へ移動する前に投票を行うために、投票日を設けるのである。牧民たちが夏営地へ移動してしまってからでは投票できない有権者も出てくる。地方によっては夏営地までかなりの距離を移動する。特に西部アイマグの牧民は片道150～200キロの移動を行うこともある。このような状況で、一旦夏営地へ移動してしまった牧民が戻ってきて投票を行うことは非常に難しいものなのだ。選挙の投票はおもにブリガードの中心地やソムの中心地などの定住地域で行う必要がある。牧民は馬で投票にやって来るのである。当時、人民大会議の選挙の投票も非常に厳粛に執り行われていた。選挙投票時には小規模のナーダムが開催され、競馬や相撲が行われる。投票者は祭典に臨むようなようすで、晴れ着をまとい、姿の良いウマで現れる。そんなようすであった。これらすべての行事にソムの革命青年同盟のメンバーであるわれわれも積極的に取り組んだ。われわれはソムの人民革命党委員会の指示によって選挙運動に参加し、牧民や民衆に対して人民革命党の方針や人民大会議で決議された法律や法規を伝え説明を行う。そういった活動を行っていた。

当時、モンゴル人民革命党の中央紙である「ウネン」紙は非常に影響力のある、一

流紙であった。モンゴル人民革命党の党員すべてが購読している、国内外のニュースが常時掲載される新聞であった。G. デレグ氏自身も非常に信望の厚い、弁の立つ、教養豊かな人であった。モンゴル人民革命党は当時から人材の育成と人材の適正な配置を重視していたのだった。中央及び地方部の党、同盟、国家、政府の要職には学問的な業績や職務実績が豊富な、最も秀逸な人材を候補者として推していた。こうして、G. デレグ氏とトソンツェンゲル・ソムの勤労者との会見が企画され、人民大会議の議員として選出された暁にソムで実施すべく計画している事業についての説明が始められた。そしてまた、ソムの勤労者と面会し、彼らの個人的な、または職業上の要望を聴くという。またとない機会であるので、私も彼に会うことにした。私はトソンツェンゲル・ソムに着任以来、夜間中学に通い、8年生を修了していた。そして「ウランバートル市で学びたい」という希望が常に念頭にあったときのことだ。そこでG. デレグ氏が滞在していた部屋を訪れ、自分のこの希望を伝えた。彼は私の話に耳を傾けている。そして私に多くの質問をし、そして「あなたの希望については理解した。とにかく同盟の仕事に勤しむこと。近いうちにこの件についての回答を伝えさせる」と言った。私は彼の部屋を出た。実際に、間もなくG. デレグ氏から私宛にウランバートル市の財務専門学校入学許可が届いた。こうして私は学校に入学するために初めてのウランバートル市へやってきたのだった。

ウランバートルへはどのような交通手段で来たのですか？

—人民大会議の投票日が過ぎてから、財務専門学校入学許可書が届いた。それには「7月中旬にウランバートルに到着しているべく」期日が決められていた。出発までの時間が限られていたため、準備が大変だった。当時、ザブハンアイマグとウランバートル市間を飛ぶ定期便はまだ整備されていなかった。後に1960年代半ば以降はほぼすべてのアイマグとの間に定期便が飛ぶようになった。最終的には各アイマグの中心地に小規模の飛行場が整備され、そこから遠隔のソムへAN-2という小型機が飛ぶようになった。その飛行機を「ツアルツァー・ノゴーン（バッタ緑）」と呼んでいた。少しの面積さえあれば場所を選ばずに着陸できる非常に優れた飛行機だったものだ。ポーランド製だったと思う。それ以前は全てのアイマグ間を「郵便配達車」が往き来していた。これは主にソ連で製造されたZIS-5型自動車であった。当時、自動車は非常に少なかった。たまに自動車を見かけようものなら、人びとは興味津々で近づいて、前から後ろから眺め、ドアを引っ張って見たりした。しかし、ガソリンの匂いはひどいものだった。人びとは自動車見たさに近づくものの、すぐに口や鼻を押さえて

逃げ出した。「なんともひどい臭いだ。」と早々にそこを離れたものだ。そのくせ、すぐにまた近づいて見る。ガソリンの臭いはすぐには消えるものではなく、しばらくそのにおいが残っているような気がした。自動車が通った後、2～3日経過してもひどい臭いはそのままだった。ZIS-5型自動車は、エンジン以外は木製だったと思う。私はトソンツェンゲルソムからそのZIS-5という車に乗って、ザブハンアイマグの中心地に出た。距離にして180キロだ。そこから再び郵便配達車のZIS-5に乗ってウランバートルへ向けて出発した。道中には3日を要し、ウランバートルに到着した。初めて地方から出てきた者にとってウランバートル市は驚くべき大都会であった。車や人の数も多く、めまいがするような騒音だった。

われわれを乗せた郵便配達車はウランバートル市の「長距離輸送ターミナル」というところでわれわれを下ろした。この「長距離輸送ターミナル」というところは今でもウランバートルにある。当時、ここからすべてのアイマグ間の「郵便配達車」が発着していた。それは現在でも変わらない。1990年以降、一部のアイマグ間の飛行機便が廃止され、再び郵便配達車が運行されるようになった。当時、郵便事業はすべて国営であったが、現在ではアイマグへの旅客輸送は民間企業が行うようになった。私は1人の友人と共に上京した。彼はジャミヤンスレンといった。われわれはウランバートルに到着後、知人の家へ行くことになっていたのだが、その家がどこにあるかも分からず、郵便配達車を降りてからは例の「長距離輸送ターミナル」という場所に3泊した。そこには小さなホテルがあったのだ。食堂もあり、私たちはそこで食事を済ませ、ホテルに籠っていた。外へ出て知人の家を探そうにも土地勘がまったくないため、道に迷ってしまうだろうと思うと、まったくなすすべもない。われわれがウランバートルに出て来たときには、国立デパートの建物やドゥチンミヤンガット、タビンミヤンガット地区、平和橋などの多くの建築物がまさに建設されているところであった。われわれのホテルから平和橋まではすぐ近くだった。2人は平和橋までだけでは何とか行き着くことができた。橋の建設は半分が終わったところだった。昼間はそこへ行き、建設労働者の作業の様子を見たりしていた。3日後には知人の方から我々を訪ねて来たので、ホテルを出ることができた。この日から何日かして、財務専門学校を訪れた。当時、学長はTs. モロムという人であった。Ts. モロム氏は、後に長年財務相を務めた人である。この財務専門学校は多くの著名人を輩出している。Yu. ツェデンバル氏が当初イルクーツク市の財務経済大学へ留学し、卒業して帰国後、同校の学科主任や学長を務めたそうだ。同校の多くの卒業生が、卒業後に財務経済を専攻としてソ連の大学に留学し、帰国後にモンゴル国の財務相となった。Ts. モロム学長と学

長室で面会した。G. デレグ氏が私について事前に話をしていたようであった。学長は私に地方の状況について質問し、そして、「G. デレグ氏から君の事は聞いている。だから一生懸命勉強するように。君の入学試験は免除する。これから学科主任に会い、どの学科に入るかを聞きなさい。それと、学生寮を希望するのなら、それも学科主任に相談しなさい」という。こうして私は G. デレグ氏の支援を受けて、財務専門学校というこの有名な学校に無試験で入学したのだった。私は人生の中で2つの大学を卒業したが、両方の大学へ無試験で入学した。このことについては後で具体的に述べよう。現在では財務専門学校は財務経済大学というようになった。わが国で1990年以降に興った民主改革は教育制度へ非常に深く浸透した。数多くの私立大学が設立されている。また、かつて専門学校であった学校はすべて「大学」という名前になった。これが良いことなのか、そうでないかはまだ分からないが、いずれ明らかになるだろう。

何年に卒業したのですか？

—1963年に卒業した。同期の卒業生は256名だった。そのうち4人が「成績最優秀者」で、私もその1人だった。入学した年には「学生会」会長に任命された。学生会長というのは学長の助手ということである。非常に責任の重い仕事である。在学中の4年間継続して務めた。大学では成績最優秀の学生の1人であった。卒業する年には学内の革命青年同盟の細胞長として選出された。卒業後も1年間はこの仕事のため大学に残っていた。ある日、人民革命党中央委員会に呼ばれた。当時、革命青年同盟の細胞長が人民革命党中央委員会に呼ばれることは非常に稀なことだった。革命青年同盟の者は革命青年同盟の上部機関の指導部に呼ばれるのが普通であろう。ウランバートル市革命青年同盟委員会やウランバートル市人民革命党委員会など私を直に呼び出す先はいくらでもある。今回はそれをすべて飛び越して人民革命党委員会中央委員会から呼び出しを受けた。理由はよく分からないものの、行かざるを得ない。びくびくしながら向った。しかし、そこでは私の新しい任務について議論されていたのであった。そして私は国家建設委員会の革命青年同盟委員長として任命されたのだった。当時、ウランバートル市は建設ラッシュであった。モンゴルの歴史を研究されている皆さんは良くご存知だろう。ウランバートル市の建物の建設はこのときに最も強力に推進されていた。多くの住宅地はそのときに建設され始めたのだ。この大規模で、新しく、非常に重要な分野では多くの青年が労働に従事していた。そしてこの分野の革命青年同盟の初級細胞及び委員会を組織し、強化するための大きな役割が私に与えられ

たのだ。私が着任したときの人民革命党委員長はT. バボードルジという人だった。このT. バボードルジ氏はモンゴル国産業相を長年務めた、指導者としての経験が非常に豊富な人であった。そして私はT. バボードルジ氏の指導のもと、約2年間そこで働いた。彼の指導者としての経験に学ぼうと非常な努力を払ったものだ。革命青年同盟の細胞や委員会を新たに組織するための財源を確保するために、われわれは建設労働者の青年たちに対して大規模な土曜労働を組織していた。その成果として建設分野の各機関における革命青年同盟の初級細胞や委員会を設置するための財源を確保することができた。そのようにしてそこで2年ほど経過したある日、再び人民革命党中央委員会に呼び出された。私はそこで人民革命党中央委員会政治局員であり、経済問題担当書記のD. モロムジャムツ氏に迎えられた。そして私がボルガン・アイマグ革命青年同盟委員会第一書記として新たに任命されたことを告げられた。新しい職務に任命されるという私の問題は人民革命党中央委員会で決定された後、さらにモンゴル革命青年同盟中央委員会に諮られる。モンゴル革命青年同盟は、非常に大規模な国家組織であった。モンゴル青年に関する問題を国家規模で管理、指導する組織であった。「モンゴル革命青年同盟はモンゴル人民革命党の勇敢な支持者であり、予備力である」といわれていた。こうして私はそれから間もなく、新しい職務に就くためにウランバートルを後にしてボルガン・アイマグへ赴任した。ボルガン・アイマグも非常に特徴豊かなアイマグである。自然はわがザブハン・アイマグに非常によく似ており、河川が多く、河川沿いに耕作地が広がり、木が多い。全体に、自然や気象ではアルハンガイ、ザブハン、ボルガン、フブスグル、ヘンティー・アイマグはよく似ている。私も後々、アルハンガイ、ザブハン、ボルガン・アイマグに赴任したが、中でもアルハンガイ・アイマグは非常に特徴的なアイマグである。ボルガン・アイマグも素晴らしいところだ。人びとは非常に親しみやすく、善良な気質で勤勉である。人口の多いアイマグの一つである。つまりは若者も多いということである。ボルガン・アイマグの人民革命党委員会第一書記はB. ツェレンナドミドという人だった。このB. ツェレンナドミド氏はアルハンガイ、ヘンティー・アイマグでモンゴル人民革命党委員会の第一書記を歴任し、また指導者としての経験が豊富で、率直で、責任感が強い人であった。私はこの人の指導の下、ボルガン・アイマグで約5年働いた。ボルガン・アイマグでは、アイマグの革命青年同盟の組織における指導者の人材を確保し、強化するという問題から着手した。ボルガン・アイマグには当時、14のソムがあり、各ソムで革命青年同盟の細胞が活動していた。革命青年同盟のこれらの初級細胞の長を新たに選任することから開始した。私は細胞長には能力が高く、まじめで責任感の

強い、他の模範となり得る人間を任命することを重視した。この結果、ソムの革命青年同盟の細胞の活動が改善されてきた。当時の私の努力が十分なものだったとは考えていない。それでも、私の選任した革命青年同盟の細胞の14名の指導者のうち、12名は後にウランバートル市で党大学を卒業し、間もなく業績が評価されて、モンゴル人民革命党の指導者となった。

モンゴル革命青年同盟の活動の目標は、掲げられた目標を達成するために総力を尽くして青年たちを指導し、忍耐を養い、責任感を高め、協調性を身につけるように教育することである。すべての青年は常に何事かを達成したい、あるいは学びたいと希求するものである。若者の情熱をふさわしい方向に正し、導いてやるべきである。青年組織はおもにこの点に注意すべきである。私がボルガン・アイماغで働いていたときには、青年を対象とした全国的な政治とイデオロギーに関する数多くの大規模な催しが行われたものだ。その一つが第1回モンゴル―ソ連青年大ナードムであった。われわれはボルガン・アイماغの「スルティーン・ガルツ」として、この祭典に参加するために訪れたソ連青年組織の代表団を初めて迎えた。私は彼らに対して自分のアイماغの青年組織の状況や成功している事業の経験を紹介し、セレンゲ・アイماغ、ダルハン市、ウランバートル市を案内し、各青年組織の業務や状況を紹介した。その後、1965年に業績が評価されたモンゴル青年組織の代表団の1人として、モスクワを訪れ、レーニン共産青年同盟の活動を視察し、交流し、協力契約を締結する過程に参加するという幸運な機会を得ることができた。初めてソ連邦を訪れたときの素晴らしい思い出が残されている。この後、レーニン共産青年同盟の招待により黒海で休暇を過ごすという素晴らしい機会を得た。モンゴルからはドルノド、バヤンホンゴル、ホブド、ボルガン・アイماغの革命青年同盟委員会の第一書記のサンジャードルジ、ウラーンバニド、バルスレンらが参加していた。そしてソチ、スフミ、バトゥミといった自然景観の素晴らしい土地の保養地に滞在した。私はそのとき、初めて海というものを見たのだった。モンゴルには海がない。生まれて初めてそれほど多くの水というものを見て非常に驚いた。他国の参加者にとってはそれほど興味を引かれることではなかったかもしれない。彼らは海で泳いだりしているのだ。われわれは泳いだりすることなど到底できず、ただ水際に行っては立ち尽くすばかりであった。こうして私が青年組織で働いていたとき、初めてソ連の青年組織の視察を行い、モスクワや黒海を旅行したのであった。

私がボルガン・アイماغに勤務していたとき、青年組織には政治やイデオロギーに関する活動の他に、経済活動の大きな目標も掲げられていた。国からアイماغに対し

て課された農牧業、製造、サービス分野の計画労働である。これらすべてを期限内に良質に遂行するために青年らを積極的に動員する必要があった。当時、青年組織に全国規模で課されていた大きな経済活動の一つは「資本の蓄積」を行うことであった。1969年にモンゴル革命青年同盟中央委員会からわがアイマグの青年組織に対して2万5,000トゥグルクの資本の蓄積が課された。われわれはこの大規模な目標を成功裡に達成した。当時、省庁ではアイマグの状況について常時視察、調査が行われていた。1968年にわがアイマグでも10の省による合同視察が行われた。各省が自省で管轄する問題について調査するのである。たとえば、保健省について言えば、当時、各アイマグに保健所が設置されていた。それは現在も変わらない。アイマグの中心地やソムの中心地のすべての病院や外来病棟はこの保健所の管轄下に置かれている。ボルガンアイマグのすべてのソムには10-15床の病院が整備されていた。1960～1970年代には全国規模ですべてのソムに病院を整備することができていた。それらの病院にはソ連やウランバートルで医科大学を卒業した医師が勤務していた。ソム病院での対応が難しい場合にはアイマグ病院へ、さらにはウランバートル市の病院へ搬送される体制がとられていた。これらはすべて国立病院であり、国とアイマグの予算で運営されていた。病院ではすべての医療サービスを無償で受けることができた。現在のような、有料の私立病院は存在しなかった。保健省の視察団はアイマグのすべての病院で専門的な検査を行った。彼らは病院の医薬品の供給状況、患者に対して適宜迅速な対応が取られているか、医療行為は適切なものかなどを確認するのである。このように10省がそれぞれ管轄する分野について検査を行った。視察準備班の班長としてB. ツェレンナドミド氏、事務局長として私が任命された。われわれの対応は全体的には良い評価を得た。このようにボルガン・アイマグでは私はある程度の業績を挙げた。ボルガンアイマグの青年組織の長として働く間に、私は「革命青年同盟中央委員会名誉賞」2回、「モンゴル革命青年同盟指導的勤労者」徽章、「青年教育の指導的勤労者」徽章をそれぞれ受賞した。

1967年の冬は全国的にゾドに見舞われ、非常に寒く、雪が多かった。とくにボルガンアイマグでは雪が多く、ゾドの被害が深刻化していた。状況がきわめて悪化したため、モンゴル人民革命党中央委員会書記長Yu. ツェデンバル氏がわがアイマグを視察し、雪やゾドの現場の状況を理解し、ゾドの被害を最小限に抑えるための緊急方策を実施し始めた。このとき初めてYu. ツェデンバル書記長に会い、短時間ではあったが彼と言葉を交わす機会を得た。Yu. ツェデンバル氏については以前から色々耳にしていたが、直に接して、非常に素晴らしい印象を受けた。気取りがなく、穏やかで、

人の言葉に耳を傾ける、とても温和な人だという印象だった。アイマグの指導部は Yu. ツェデンバル書記長のために特別な宴会を催した。しかし、書記長の飲食物に対しては内務省特別警護局が非常に厳しく管理しているのだった。ついでに、そのときのでき事を話そう。わがアイマグは Yu. ツェデンバル書記長をもてなす宴会のために羊のオーツを準備したのだった。貴賓を羊のオーツでもてなすのはモンゴルの一般的な習慣なのだ。しかし、われわれが用意したオーツを内務省特別警護局が事前に調べたところ、「Yu. ツェデンバル書記長にこのような肉を供してはならぬ」と取りやめを命じられた。アイマグの指導部は非常に落胆させられたものだ。その会見ではもう一つ、別の変った話題が出た。会見中、Yu. ツェデンバル書記長は知事に向かい、「この中に狩猟の得意なものはいるか」と尋ねた。

知事は、「革命青年同盟第一書記 S. タムジッドは狩猟が得意である」と答える。

すると、Yu. ツェデンバル書記長は私の傍らに来て、

「アイマグ革命青年同盟委員長が狩猟を得意とするのは非常に良いことである。君はこの自分の習得した技能を青年たちに伝えなさい。このアイマグは野生動物の多い、素晴らしい土地ではないか。そうだろう」といったのだ。Yu. ツェデンバル書記長自身はまったく狩猟はやらないようだ。ソ連共産党中央委員会書記長 L. I. ブレジネフ、ユーゴスラビア共産党中央委員会書記長ボリス・チトー、東ドイツ社会主義統一党党首エーリッヒ・ホーネッカーといった当時の国際的な労働者運動の指導者たちには狩猟を好む人が多かった。ボリス・チトー氏はモンゴルを訪問した折には狩猟に出掛けていたのだそうだ。これについては後に多くの人から興味深い話を聞いたのだった。私は狩猟の手法を父から学んだ。私の父スレンジャブは私が小学校に入学する前から、狩猟に同行させたものだ。私はオオカミ狩りを最も好む。今までに 120 頭のオオカミをしとめた。運が良いときには、1 度に 3 頭もの大きなオオカミをしとめたということもあった。こんなことは滅多にないものだ。

このようにボルガン・アイマグでは 5 年間働いた。そうして 1970 年にモンゴル人民革命党中央委員会人事主任の S. ラムジャブ氏に会った。面会の主たる目的はソ連共産党大学への留学の希望を伝えるためであった。このとき、この大学へはモンゴルから毎年大勢が留学するようになっていた。私の何人もの知人も留学し、帰国していた。S. ラムジャブ氏はきわめて厳格な人間であった。モンゴル人民革命党中央委員会人事部長を長年勤め、人間を見きわめることに非常に長けた人であった。当時、党や国家、政府の上部指導層への候補者すべては S. ラムジャブ氏が選抜したものだろう。S. ラムジャブ氏が「否」といえば、どんなに優秀な人間も如何なる役職に任せ

られることはないのだ。そのため、人びとに恐れられていたかもしれない。しかし、S. ラムジャブ氏が「諾」といえば、誰でもどのような職にでも自由に就くことができた。こうして私は S. ラムジャブ氏の執務室に入った。彼は私の要望を注意深く聞き、私の書いた申請書に目を通して。そして「今年はソ連共産党大学へのモンゴルからの入学者枠はない。君はモスクワにある国際勤労者運動大学に留学したまえ」とつっけんどんに言う。私は「はい」といって、その部屋を出たことをはっきり覚えている。実際に、間もなくモンゴル人民革命党中央委員会からモンゴル労働組合中央評議会に公文書が届けられた。その文書には私の国際勤労者運動大学への留学を許可した内容が書かれていた。こうして私はこの有名大学に無試験で入学したのである。この年、その大学には計7名が留学し、私以外の6名はすべて入学試験を受験し、合格した者たちだった。この入学試験を大勢が受験したが、合格者は6名のみだったそうだ。こうしてモスクワへ行き、その大学に在学した5年間を「優秀」で通し、経済の専門を修得し、帰国した。留学する時点で、私は既に30歳になっていた。このように年齢が進んでから大学で学ぶのには多くの困難が伴うものだ。何よりも先ず他の学生たちに比べてロシア語の習得に最も苦労したのは私であった。外国語学習はより若いうちに始めるのに越したことはないようである。私のように30歳にもなってから外国語を習得しようとするとは非常に大変なものだ。私は、とにかく奮闘の末にロシア語の会話と読み書きができるようになった。労働組合は社会主義時代の頃にも、非常に財政豊かな組織であった。私たちにも毎月250ルーブルの奨学金が支給されていた。また、入居した学生寮も非常に快適な場所だった。われわれの大学はモスクワ市のみならず、当時はソ連と社会主義国全体でも著名な一流校の一つに数えられていた。

そして大学を卒業して帰国した。当時、モンゴル労働組合中央評議会議長はゴンボジャビン・オチルバトという人であった。G. オチルバト氏はとても温和で、学歴も高く、博識で非常に素晴らしい人だ。彼は長年その職務に携わったが、後に1980年代半ばにA. I. フィラトワによって何の根拠もないままに辞職させられたのだった。この件についてはサンピリン・ジャランアージュ氏の回想記に詳しく述べられている。1990年にモンゴル民主連合の要求によって、モンゴル人民革命党中央委員会政治局が一斉辞職した。当時、新たに選出されたモンゴル人民革命党中央委員会政治局の局員らがゴンボジャビン・オチルバト氏をモンゴル人民革命党中央委員会書記長として選出したのだった。

私が卒業して帰国したとき、アイマグのすべての指導部の人事はモンゴル人民革命

党中央委員会が決定するという状況に変わりにはなかった。職務について、本人の意向はまったく配慮されることはなかった。モンゴル人民革命党中央委員会がすべて掌握しているのであった。誰を、どのような職務に、いつ任命するかはまったく任意に決定された。そして、「党の命令である」という説明がなされるのみであった。党の命令は党员である以上、絶対に遂行すべきものだった。この命令を批判し、反抗する権利は誰にもなかった。遂行あるのみであった。

モンゴル人民革命党中央委員会はこうして私をアルハンガイ・アイマグの労働組合長として任命してしまった。当時、私の家族はウランバートル市に移り住んでいた。私たちは6人の子どもを抱えていた。今再び、遠く離れた未知の土地に移ることは難しくなっていた。そのため私は家族の事情で自分がアルハンガイ・アイマグに赴任することは難しい旨をモンゴル人民革命党中央委員会に申し出た。しかし、私の言葉は一顧だにされず、「党の決定が出された以上、必ず赴任せねばならない」という説明が繰り返されるのみであった。そうして1ヶ月後には家族と共にアルハンガイ・アイマグに移り住んだ。アルハンガイ・アイマグは自然豊かな、人口も家畜も多いところで、歴史や伝統の宝庫であり、人びとはもてなし好きで優しい地域柄である。アイマグの労働組合の各組織にとって、当時、労働管理が非常に差し迫った問題であった。アルハンガイ・アイマグには全国規模の大規模工場はなかったが、地方レベルで操業する工場が多かった。そこで労働に従事する人びとの労働管理問題をわれわれは重視していた。職場環境はどうなっているか、公衆衛生の条件が整備されているか、職場の安全性が確保されているか、労働者に専用の作業服が定期的に支給されているかといった多くの問題があった。また、労働者の勤務時間、休暇期間、賃金に係る問題についてもすべて労働組合が担当していた。工場や事業所はモンゴル国の労働法を厳守し、遂行すべきであった。同法ではすべての公務員や勤労者は1年に1度、1ヶ月程度の休暇をとる権利を有することが規定されていた。そのため労働組合でも労働者が休暇を過ごすための各保養地や療養所を管轄していた。それと同時に生徒児童が夏期休暇を過ごすための各「ピオネール・サマーキャンプ」に関する問題も担当していた。労働組合組織の管轄する問題は非常に多岐に渡るものであった。

ネグデルの家畜を世話している牧民組合員に関わる労働管理問題についても取り上げられていましたか？

——もちろんだ。そういった問題は常にわれわれの関心の中心にあった。ネグデルの家畜の世話をしている牧民には必要な用具が十分に支給されなければならない。たと

えば、馬の鞍や馬鞍といった、牧畜業生産を行うために必ず必要な家畜用用具が供給されなければ、そのネグデルの指導部に対して労働組織が処分を行った。このような労働管理問題及びモンゴル国労働法及び他の法律規則を国家行政機関と組合組織に遵守させるという問題は非常に重視されていたのだ。当時、アルハンガイ・アイマグには18のソムがあった。各ソムで労働組合の委員会が活動していた。大規模工場やサービス業には付属の労働組合の委員会が活動していた。労働組合の委員会は毎月委員総会を行った。それらの会議で当該のソム、あるいは工場における生活上のすべての問題を取り上げ、議論した。すべての公務員と協同組合員はモンゴル労働組合の組合員であった。

私がこのアイマグで働いていたときのことだが、1976年のメーデーにハンガリー訪問代表団団長として、モンゴル労働組合の各組織の代表者たちと共にハンガリーを訪れる機会に恵まれた。当時、すべての社会主義諸国では5月1日を「世界の労働者の連帯を祝う日」として厳粛な祝典を行っていた。訪問に際しては、ハンガリーの社会労働党党首の高名なヤノーシ・カダール氏がわれわれを好意的に受け入れ、短時間だが会見が行われた。当時のハンガリーは社会主義諸国の中でも比較的發展が進んだ国だとされ、より自由度の高い国だと言われていた。西側諸国の出版物にはハンガリーを「社会主義国のショーウィンドウ」とまで名づけていたものだ。歴史的にはモンゴルとハンガリーの間には古代からの関係があった。ドナウ川流域に定着した北匈奴人がアティラバートルの指導のもと、ロシアのボルガ河に達する強大な王国を建設したという歴史を持つ。ハンガリー人はこの歴史を誇りに思い、われわれと祖先を同じくするという話題を好む人びとだった。私はアルハンガイ・アイマグではこのような様子で働いた。しかし、ある日、私は「モンゴル人民革命党中央委員会に至急出頭するように」という連絡を受けた。そして、私は人民革命党中央委員会へ行った。そこでは私を再び新たな任務が待っていた。そうして1977年1月19日の人民革命党中央委員会書記評議会の会議上で私の人事が協議され、新たに建設中のアタル国营農場に初の所長として任命される決議が出されたのである。

あなた自身が建設中のアタル国营農場への配属を希望していたのですか？ なぜ急に決定されたのでしょうか？

—すでに述べたと思うが、当時、モンゴル人民革命党の党員は自分の職業や居住地を自分の一存で決めることはできなかった。党員であれば、誰を、いつ、どんな職務にでも党が任意に任命することができたのである。モンゴル人民革命党は非常に優れ

た人事政策を実施していた。モンゴル人民革命党が掲げる多くの大規模な目標を実行するためには、そのために養成された、優秀な人材が必要であろう。モンゴル人民革命党はこのような目標を達成することが可能だった。しかし、近年、このような政策は失われてしまった。モンゴルにおいては民主改革が必要である。しかし、それが誤った形で開始され、誤った方法で実施されたために、かつて存在した素晴らしいものが消滅しつつある。管理監督の機能が脆弱になったために、非常に膨大な国家財産が消散し、社会全体の秩序が失われている。

モンゴル人民革命党は今回も私の意向を聞くことなく、私はそのまま任命された。しかし、この任務は私にとって非常に好ましいものであった。それには大きな理由がある。1976年10月に行われた党中央委員会第11回総会で「未開墾地を開墾し、穀物を増産することについて」重要な決定が出されている。これはわが国で展開された第2次未開墾地開拓運動の端緒となった。こうして私にとって「第2次未開墾地開拓運動」へ参加するという素晴らしい機会が与えられた。今年からはわが国で「第3次未開墾地開拓運動」も始まっている。

第2次未開墾地開拓運動は何を目的として開始されたのですか？ 着任後、どのような仕事から着手しましたか？ 当時の課題はおもに何でしたか？

—モンゴル人民革命党中央委員会書記評議会でこのような決議が出された後、私は農牧業省の管轄に移された。そこで新たに建設される国営農場の準備作業を行う目的で、一時的に農牧省が私の職場となった。農牧業省は新たに合計10ヶ所の国営農場建設を計画していた。私が農牧業省に移ったときには、モンゴル国労働英雄のR. ミンジュール、S. ロドイフーらが同省の大臣顧問であった。彼らはモンゴル農牧業の栄光を築き上げた人びとである。兩人ともネグデル長の経験があった。彼らは私に対しても非常に貴重な助言を授けてくれた。皆さんは歴史研究家であるので、良くご存知のことだろう。モンゴル国での未開墾地開拓運動は当初、1950年末に起こった。当時の第1次未開墾地開拓運動の主たる目的は野菜と穀物の自給であった。それ以前、わが国の野菜と穀物需要を完全に輸入に頼っていた。主な輸入先はソ連であった。第1次未開墾地開拓運動を開始する主な背景はわが国の総人口、特に都市集落に居住する人口が急激に増加する傾向にあったからである。そのため、食糧問題は深刻化していた。モンゴル人民革命党はこの状況を判断して、未開墾地を開墾する方法で、人口の増加に伴う食糧供給の改善を目標としたのだった。この運動の開始に当っては、ソ連の影響下に直接置かれていたと言っても良い。当時、オクタール・ツァイ

ダム、ジャルガラント、ボルノール、ハラー、ユルー、ゼルテルといった数多くの、名だたる大規模国営農場が建設された。この事業全体を「国営農場管理局」が指導していた。局長はツォクトオチリン・ローホーズという人だった。このとき、モンゴルの耕作分野において驚愕すべき優れた業績が残されたと考えられている。数多くの製粉工場が建設され、小麦粉の国内需要を完全自給することが可能になった。このようにしてモンゴル国はそれまでの歴史上で初めて、農産物の生産国となった。当時、産業相はパーワンギン・ダムディンという人であった。

第2次未開墾地開拓運動開始の主な目的も前回と同様だった。1960年代末、1970年代初めにわが国の人口は急激に増加し、都市集落が拡大し、特に、ウランバートル、ダルハンといった何十万という人口を抱える都市も出現したことが食料需要を急激に増加させた。これを受けて、モンゴル人民革命党は第2次未開墾地開拓運動開始の目標を掲げたのであった。第1次、第2次未開墾地開拓運動を党は「未開墾地開墾のための全人民的運動」として組織した。モンゴル国全土から人民、特に青年らが新たに建設中の国営農場で働くことを志して集まった。第2次未開墾地開拓運動が開始された時には、わが国は既にそのような大事業を組織するに足る十分な経験を備えていたのだ。第1次未開墾地開拓運動の頃にはそのような経験はまだ蓄積されていなかった。国営農場ではすべてが一から始められた。モンゴル人民革命党も非常に関心を払っていた。さらに、非常に有能で、素晴らしい人材がこれらのすべての事業を統括し、指導していたので、ごく短期間でこのような成功を築き上げることが可能だったのである。第2次未開墾地開拓運動の時も党はこの運動を非常に重視していた。

私が着任するとき、農牧業省付属農牧業機械設備供給局という名前の部署があった。そこで国営農場で使用するすべての機械設備の調達を行っていた。私は国営農場のためにタイヤトラクター約10台、キャタピラトラクター9台、トラック7台、UAZ-469型ジープを購入した。また他所からモンゴルゲル約30を調達した。そしてこれらすべてを知人宅の敷地内で保管してもらい、春になってから新しい国営農場へ搬入した。またソ連からも多くの支援が行われた。私が農牧業省で準備作業を進めているとき、同省には多くのソ連専門家がいた。新しい国営農場の耕作面積や作付けを行うタネの選別などは、ソ連専門家の協力によって短期間に非常に合理的に決定することができた。しかし、私自身の仕事はそれ以上に膨大なものだった。新しい国営農場の人事決定権は私にあった。たとえば、国営農場の農業技師としての人材はトゥブアイマグの中心地から、畜産技師は同県ムンゲンモリト・ソムから、獣医となる人はウランバートル市からそれぞれ採用した。このようにこれから私の下で、新しい国営

農場に勤務するすべての専門家について私自身が採用を行ったのだった。私は新しい国営農場を「アタル国営農場」と名づけた。

このように準備を進めていたが、1977年3月9日に国営農場の中心地が建設される地点に礎石を置く（印をつける）儀式を行う運びとなった。そしてこの日、農業技師長として任命されていたボルフー、家畜技手長として任命されていたミャガースレン、当国営農場の圃場設計図を担当したソ連人専門家1人の総勢5名で国営農場の中心地が建設される予定の場所を訪れた。既に農牧業省で国営農場の中心地の建設予定地は決定されていた。その地名は「オラーンハッド（赤岩）」といった。われわれ5名はこの「オラーンハッド」という場所に車で向った。その場所はいつも地図上でしか認識されておらず、実際に足を運んだのはそれが初めてのことだった。しかし、そこを訪れたとき、国営農場の中心地の建設予定地には多くのヒツジを飼う牧民のゲルがあった。その牧民のゲルを皆で訪ねた。主人は中年の人であった。皆で座り、モンゴルの伝統に則り、茶を飲んだ。「ここはオラーンハッドという場所か」と私は尋ねた。

主人は、「その通りだ。ここが「オラーンハッド」である。ここにはもう直ぐ大規模国営農場の中心地が建設されるそうだ。あなた方の用向きは何か」と聞くので、われわれが当地を訪れた目的を話した。そして家の主人と共にゲルを出て、その辺りの土地を詳細に調べてみた。その「オラーンハッド」という土地は西から東にかけて延びた非常に広い谷あいの平原の北側に位置する、木々のない、中程度の高さの山であった。オラーンハッドと名づけられているわりには岩というほどのものはなかった。その代わりに土壌は全体的に石で覆われており、小石の多いところだった。こうしてわれわれはその辺りの土地を見回ってから、そのオラーンハッドという山の南麓の日当たりの良い場所に国営農場の中心地を建設することにし、「礎石」を置いた場所に乳や酒など持参した供物を供えた。そして、帰京した。第2次未開墾地開拓運動の特徴は、このような大規模な事業を開始するに足る経験が十分に備わっていたために、すべての事業を事前に準備することが可能であったことである。このようにして、われわれが「礎石」を設置した場所で間もなく国営農場の建設が開始された。当時、ソ連の建設トラストがウランバートル市にあった。一部の国営農場の中心地の建物は彼らが直に建設してくれた。一つの国営農場の中心地には病院、中学校、通信局、文化宮殿、生活サービス施設といったかなり多くの施設が存在する。これらすべてをソ連の建設トラストが無償で建設してくれたのだ。建物のできばえは最高級のものだった。建物の質は文句ないものだった。現在、ウランバートル市には民間の建設会社によって多くの建物が建設されている。これは良いことだと思うが、質的管理が行

われていない。そのため、事故のリスクが非常に高くなっている。当時は一部の国営農場の中心地の重要施設の建物は国家中央予算を投入して建設された。わが「アタル」国営農場はウランバートル市に近かったため、われわれは当初、必要な食料品をウランバートル市で調達していた。

あなた方の国営農場では耕作はどのように開始したのですか？

—われわれが国営農場の中心地の建設予定地に礎石を置く儀式を行ってから間もない3月19日にその地に移った。ウランバートル市で調達した農業用機器すべてとモンゴル式ゲルをトラックに積み込み、長い隊列を組んで移動したものだ。そして、到着後にわが国営農場に対してドルノゴビ・アイマグのスンベル国営農場からウシ400頭、フブスグル・アイマグのタリアラン国営農場からウマ500頭、アルハンガイ・アイマグのトゥブシルーフ国営農場からヒツジ8,000頭が移譲された。1992年にはわが国営農場は会社形態となり、家畜頭数は計3万頭に達していた。

耕作は4月10日頃に開始したように記憶している。わが国営農場は年間1万ヘクタールの土地を耕し、作付けを行っていた。国営農場の耕作地は、農牧業省があらかじめ選択し、鉄条網を張り巡らせてあった。第2次未開墾地開拓運動の主たる特徴はここにある。すべての作業が事前に準備された。われわれはトラクター運転手や自動車運転手といった必要な人材を自分たちで採用した。しかし、それも純粋に自分たちだけで行ったとは言い切れない。当時、第2次未開墾地開拓運動に参加するために非常に多くの人びとが全国規模で新しい国営農場に志願したのだった。その多くはもともとの居住地でトラクターやコンバインの運転免許を取得し、その職に就いていた人びとであった。またわが国営農場に程近い所に、バヤンチャンドマニ国営農場があった。そこには耕作の専門家を養成する「技術専門学校」があった。青年はそこで学び、トラクターやコンバインの運転手となった。現在ではモンゴルにそのような「技術専門学校」は無くなってしまった。専門的労働者養成において非常に大切な役割を果たしていた学校であった。そのため、人事についての問題は生じなかった。全体的に見ても、当時実施が困難な問題というのは殆ど発生しなかった。この問題についてはモンゴル人民革命党の方も重視していたのである。わが国営農場には3つの耕作部隊が編成された。こうして仕事に取りかかった。中央計画経済体制のメリットというものもあるのだ。事前に詳細な計画を立てていたがゆえに、このような大規模労働を実施することが可能であった。労働全般が事前に策定された計画に則って実施されていた。国営農場の作付面積、そこからの収穫量などはすべて事前に算定されていたの

だ。わが国営農場で栽培していた小麦の品種は「サラトフ-2」といった。この品種はモンゴルの気象条件下でも生育状態が良かった。作付けを終えてしまえば、水遣りの必要は特になかった。当時は雨も多かったのだ。当時、建設された国営農場の中には灌漑農業経営を行う国営農場はなかった。すべて雨水で賄っていた。作付け作業に関して国営農場長の果たす役割はそれほど多くはない。わが国営農場の農業技師がすべてを行う。春、圃場を耕すことから始まって、種を蒔く、生長過程を管理する、施肥する、収穫時期を決めるといった耕作に関するすべての作業は専門の農業技師が担当し、実施していた。耕地を耕す、種を蒔く、収穫するといったすべての作業は機械設備で行う。人間の手で行う仕事はなかった。われわれは完全に機械化された農業経営を行っていたのだ。伝統的な人力による方法ではなかった。

農牧業省は春の植え付け開始前に、その年に各国営農場で何ヘクタールの耕作を行うかを決定していた。何ヘクタールで耕作するのかも、その収穫量も明確だった。収穫期も決められていた。そうしてすべての作業が明確にされていたため、春に植え付けが始まる前に、既に各製粉工場と穀物供給契約を締結していた。収穫を終えてからは、決められた割当にしたがって契約を締結した製粉工場へ小麦を供給していた。当時、ウランバートル市には多くの「自動車輸送基地」があり、そこから来たトラックに小麦を積み込み、契約を結んだ製粉工場へ輸送していた。自分たちで努力し、計画量を上回る収穫量を得ることができれば、製粉工場と追加契約を結び、それを供給した。ノルマを超えて遂行できれば農牧業省から結構な額の報奨金がもらえた。

1990年代に民主改革が開始された頃、わが「アタル国営農場」は経済的に完全に独立採算制をとっていた。わが国営農場では農業生産を行う傍ら、乳牛400頭の機械化された酪農場と豚・鶏の飼育場、大麦の製粉工場、絨毯工場、建設部門など利益率のよい補助的な事業も行っていた。また40人を収容できる保養所を建設し、国営農場の労働者らが休暇を快適に過ごすことができるようになっていた。わが国営農場では数多くの労働者が高い労働成果を挙げ、国家勲章を授与された。多くの人が業績を評価され、ソムやアイマゲ、全国のチャンピオンになった。わが国営農場は1982年に1ヘクタールから24ツェントネル（2,400キロ）の収穫量を得て、全国第2位となり、15万トゥグルクの報奨金を得たこともある。そのほか、青年たちの余暇のための電子楽器セットが賞品として贈られたりした。私が「アタル国営農場」の農場長を務めていた間には、モンゴル人民革命党中央委員会書記長で人民大会議議長のJ. バットムフ氏、モンゴル初代大統領P. オチルバット氏、首相P. ジャスライ氏、J. ナランツァツラルト氏、国会議長N. バガバンディ氏などの国家及び政府の要人らがわが

国営農場を視察に訪れた。わが国営農場の勤労者らとの会見が企画され、彼らの要望や意見を聞き、生活状況を視察した。私は1990年4月のモンゴル人民革命党特別大会に代表として出席し、党の新規則や綱領を決議するという過程に参加し、モンゴル人民革命党の刷新に貢献した。私が国家へ捧げた労働は高く評価され、「北極星勲章」、「労働名誉メダル」を受賞した。また未開墾地開拓運動30周年記念には農牧業省から名誉証書を受賞した。それ以外にも人民革命40、50、60、70、80周年記念メダルなどを受賞した。私の妻はツェレンドルジン・ネルグイといい、1942年にトゥブアイマグのブレンソムで生まれた。娘が5人と息子が1人いる。現在は孫5人、ひ孫1人も加わり、タムジット家は総勢15名となっている。

あなたの国営農場では野菜を栽培していましたか？

農業技師：栽培していた。わが国営農場では年間120ヘクタールの耕作地でジャガイモを栽培していた。土壌がジャガイモに適していたのだ。またカブ、ニンジン、ネギ、ニンニク、キャベツなどの野菜も栽培し、ウランバートル市へ出荷していた。私は1987年までトゥブ・アイマグの農業管理局に勤務し、その後アタル国営農場で農業技師となった。トゥブ・アイマグには合計12ヶ所の国営農場があった。「アタル」、「アルホス」、「ノホルル」など計4ヶ所の「飼料作物国営農場」があった。これは栽培する作物の量に占める家畜飼料の割合が多い国営農場のことである。ここで栽培された家畜飼料は全アイマグに配分されていた。雪が多く、寒い冬には家畜飼料は非常に重要となる。わがアイマグのボルノール国営農場は野菜栽培で全国トップだった。

われわれはこのような状況で1990年を迎えた。この頃から市場経済への移行が開始された。市場経済への移行の方法に大きな誤りがあったとわれわれは考えている。そのとき、全国的な国家資産の民営化が開始された。その当時、国家大会議で民営化法が制定され、われわれはその法律に基づいて国営農場の民営化を行うことになったのである。この法律によって、わが「アタル飼料国営農場」を会社組織とし、独立採算制をとることになった。そして、株券の発行を開始した。会社の資産をすべて分割し、割り当てられるべき本人に引き渡した。その結果、会社は47の小規模会社として分割されたのだ。たとえば、以前にトラクターを運転していた人は会社からトラクターを得、他の2、3人と共同で新たな会社を設立したのだ。こうして、こういった数多くの会社がそれぞれに事業を行い、利益や収入を得る必要があった。この状況は困難な課題をもたらした。その理由としては、この新たに設立された会社は事業を行うための流動資金を持たなかったからである。彼らが流動資金を得ることはそも

そも無理であった。この点がこの民営化の大きな間違いであった。事業を実施するためには、彼らは銀行から融資を受ける必要がある。しかし、銀行は融資を一応は行っただが、その利率は非常に高いものだった。銀行の融資の金利は一時、17%に達したといわれる。このような高率の銀行融資では、設立されて間もない小規模会社には返済不可能である。なぜ銀行がそのように高い利率で融資を行っていたのかは私には理解できない。いや、そうではない、分かっているのだ。新たに設立された会社は民間会社であり、融資を行っている銀行は国営であった。国営銀行の融資政策は柔軟性に欠けた、非常に厳しいものであった。ここにも民営化のもう1つの誤りがあったと思う。国営銀行の融資の利率が柔軟性に欠けており、市場の需要に対応させることができなかったために、1、2年後には恐ろしい事態に至ったのだ。さわめて高利の融資を得てしまった各社は返済不能に陥った。こうして、農牧業分野の数多くの会社の経営が破綻し始めた。彼らは銀行融資の担保としてすべての資産を失ってしまったのだ。つまり、新たに設立された農牧業分野の小規模会社が国営銀行に喰いつくされたということである。しかし、一部の会社には担保にする資産さえなかった。結果として、銀行自身が支払能力を失った。こうして、さらに恐ろしい事態が引き起こされた。つまり銀行の破綻である。モンゴル経済にはこのような連鎖反応が生じてしまった。このような事態がモンゴル経済の悪化を招いたのだと思う。政治家はこういった事態について様々な説明を行ったが、一部にはこの政治から膨大な利益を得た人間もいたのだろう。現実にはこのような事態が起こったのである。

このような困難な事態を切り抜けた会社はあるでしょうか？

農業技師：全国的には数多く存在すると思う。かつて非常に高い利益を上げていたオクタール・ツァイダム、ジャルガラント、パルチザン、ボルノールといった国営農場ではこの事態を何とか乗り越えられたと思う。しかし、殆どの資産を銀行の担保として失い、現在はかつての規模には及ばないだろう。私はモンゴルの民主化を支持している。しかし、資産民営化の方法は間違いであった。多くの人びとが長年の努力や労働で築き上げてきた膨大な資産が消失してしまった。私はこのような事態に陥ってしまったことを残念に思っている。

モンゴルには民主化以前に「人民監査委員会」という組織があった。その組織では国家資産を監督していた。国家資産はさわめて厳しく監督されていたのだった。

国営農場で働く労働者の賃金の増減はあなた方自身の裁量で決定することはできたのですか？

タムジッド：当時は閣僚会議で決議された賃金統一基準に則っていた。労働者賃金の増減については国営農場長と会計が決定していた。しかし、それにはその労働者自身の実績を考慮する。国営農場に課された国家計画を超過遂行した場合には、余剰収入は自分たちで消費することが可能であった。各国営農場におけるこれらの問題については人民監査委員会が厳しく監督していた。民主化以降に生じた大きな問題は国家行政組織と経済活動を分離させてしまったことである。すべての誤りの端緒はここにある。私が国営農場を設立した当初、農場長はこの2つの業務を同時に管理していた。しかし、この両業務が分離され、経済活動を会社に任せるようになったのだ。それがすべての混乱の始まりだった。

農業技師：皆さんはモンゴルで実施された国家資産の民営化について理解しているだろうか。ピンク色と水色の券がどのような意味を持ったかについて聞いたことがあるだろうか。事情は非常に複雑なのだが、詳しく研究してみてほしい。7,000 トウグルクの価値を持つピンク色の券と1万トウグルクの価値がある水色の券があった。つまり、これは株券なのである。モンゴル国のすべての国民に対してこのような額の株券を取得する権利が与えられたのだ。全国民に対して最初7,000 トウグルクのピンク色の券が配布された。この株券をどの会社に投じるかは、各人自身の決定に任された。株主に対してはその会社が年度末に配当金を支払うのである。しかし、各会社自身が配当金を支払うことは不可能な事態が生じた。こうして株価が下落し、訳の分からない事態が噴出し始めた。そもそも国家資産の民営化のための準備が十分ではなかったために、大きな間違いが生じたのである。人びとは株の価額やレートについて、また配当についての知識をまったく持っていなかった。「アタル国営農場」が「アタル会社」として編成されたとき、そこには約1,500人が働いていた。全社員で総会を行い、「株券を引き渡して会社を出るか、従来通りに勤務するか」を問うたところ、「会社をやめない、従来通りにここで働きたい」という回答が出された。こうして「アタル株式会社」は自社の株券を発行し、そしてそれをトゥブ・アイマグの国家資産民営化委員会に提出した。しかし、ここでも大きな混乱が生じた。株価が下落し、一時は50 トウグルクにまで落ち込んだこともある。そのような理解不可能な事態が続いた。会社が利益を得られた場合のみ株券の配当金が支払われる。わが社は1992年に設立されたが、1997年までこのような状態が継続し、その後、経営困難に陥り、会社を

解散することが決定された。

モンゴルでは1994年に土地利用法が制定された。それを受けて、会社設立時から利用してきた土地の範囲を確定し、国に税金を納めることになった。当時、土地利用契約が発行されていた。1997年に会社の解散が決定したとき、裁判所の判決が出され、われわれが利用していた土地は国家資産となった。

ありがとうございました。

参考資料4

新農業企業家 UO 氏へのインタビュー（2008 年 9 月 12 日）

—わが社は鉱物資源調査会社である。3 年前から耕作に興味を持ち始めた。われわれはこの仕事を純然たるビジネスと理解して調査を開始した。

近年、食料品の価格は世界的に高騰している。わが国のような食料品のほとんどを輸入に依存している国にとって国際市場における食料品の価格の上昇は経済的な打撃を及ぼすようになった。そのような理由でこの分野に投資することを決定したのだ。

われわれは主に穀物を取り扱うことを決めた。穀物の栽培には 2 つの面でメリットがある。まず、穀物は食糧として消費されるだけでなく、良質の家畜飼料として利用することが可能である。近年、様々な理由から家畜飼料の需要が急激に増加している。

このようにしてわれわれはトゥブ・アイマグのムンゲンモリト・ソムの 1,200 ヘクタールの土地に対する利用許可を得た。そこは社会主義時代にはネグデル（牧畜協同組合）の耕作地であった。そしてネグデル解散後は約 20 年間利用されることなく放置されていた土地である。ヘルレン川に近く、作物栽培に非常に適した土地だ。このような利用価値の高い土地があることは以前から知っていた。われわれはムンゲンモリト・ソム役場に働きかけ、この放置された土地を利用するための申請を行った。役場では直ぐに許可が下りた。

そういった土地の利用許可はどのように取得するのですか？

—われわれは土地を購入した訳ではない。あの土地は売買の対象にはならないだろう。土地法で売買が禁止されていると思う。われわれは郡役場と「土地利用契約」を締結した。土地の測量を行い、面積を確定し、その面積に対する土地利用料を支払うことを取り決めたのだ。1,200 ヘクタールに対して、年間百万トゥグリク強を支払っている。ムンゲンモリト・ソムはトゥブ・アイマグの郡である。トゥブ・アイマグの中心地の銀行に「国家口座」という名の口座があり、そこに「ムンゲンモリト・ソムの土地利用料」として料金を払い込んでいる。こうして今年から土地を耕し、小麦の作付を行った。今年からわが国で第 3 次未開墾地開拓運動が開始された。また耕作分野の企業に対しても良好な条件が整備され、支援が開始されている。

どのような支援が行われているのですか？

—政府は50%の低利子融資によって、耕作機械の提供を開始した。これは、われわれにとって非常に大きな支援になっている。しかし、耕作機械の需要が高く、現時点では輸入機械は十分足るものではない。

一般的に機械はどこから輸入されているのですか？

—大体、耕作機械はロシアからの輸入だと思う。中国から輸入するという話もあるが、現時点では話が出ているというレベルである。将来的に輸入するかどうかについては何も決まっていない。中国製の農牧業機械がわが国の条件で上手く稼動するかの確証もない。ロシア製の農牧業機械はその点で良く適している。

しかし、国外から農牧業用機械を輸入すること自体は非常に良い考え方だが、一方で欠点もある。政府が実施する入札によって選定された業者が機械を輸入し、供給しているのだが、その業者がモンゴルの条件に適した最良の機械を輸入することができていないのだ。そして、われわれはその業者の輸入したその機械を購入することになっているのである。他に選択の余地はないということだ。このようなデメリットがある。われわれ自身が外国へ行き、その業者が輸入したものよりも、さらに優れた機械を輸入することも可能である。しかし、そういった場合には政府の優遇措置を受けることはできない。だが、現実にはわれわれ自身で、モンゴルの条件により合致した、より良い性能の機械を輸入することは可能なのだ。従って、その場合にも政府から少しでも優遇措置が受けられるよう、支援してくれれば非常に助かるのだが。耕作を行っている企業が自社で輸入した機械に対して政府が低利子融資を行うようになれば、われわれにとっての非常に大きな援助になるのだ。現時点ではまだそうではない。

また、もう一つ問題がある。われわれに必要な農業機械が期限内に届かないのである。耕作作業は時間との勝負である。まさにその時期に行わなければならない。われわれは機械が予定された期限内に輸入されないという事態のために、非常に多くの困難に遭遇することとなる。こういった段取り的に不備な問題が非常に多い。

一方で、政府は耕作機械に掛かる輸入関税を免除するとした。非常にありがたいことである。また耕作経営を行っている企業に対して低金利長期融資を行うことについて活発な議論がなされているが、現時点ではそのような融資は実施されていない。為替相場は最近、大きく下落する傾向にあるため、この問題を直ぐに決定する事は難しいだろう。その意味で第3次未開墾地開拓運動も多少長引く傾向が見られる。政府

はこの運動を3年間で一定の成果を挙げべく目標を設定しているが、現時点でのプロセスを考えると、5～6年に延長される可能性もある。

第3次未開墾地開拓運動に参加しようという企業は多いのでしょうか？

—当初は多かった。しかし、政府側の調整が十分ではなく、かなりの数の企業が今年分の作業を予定していた期間内に開始できなかったと思う。そして、一部では作付用に購入した土地を手放すことも議論され始めている。将来的にはこういった企業が再びこの分野に参入するのかは不明である。しかし、耕作作物の需要は常に上昇し、増加しているため、この分野は長期的なビジネス分野であると理解してよい。

あなたがたは収穫後、販売も自身で手がけるのですか？

—そうだ。販売も全て自社で行う。しかし、販売については政府から一定の支援が行われているため、赤字のリスクはかなり軽減されている。わが社は今年、ロシア製トラクター2台を購入して、500ヘクタールの土地を耕し、小麦を栽培した。種粃は政府の低利子融資によって供給された。耕作企業は必要な種粃の価格の10%を支払って、残りを貸付で購入した。秋の収穫後に残りの代金を支払うことになっている。この貸付の支払い形態は様々である。例えば、われわれが収穫した小麦が種粃としての基準を満たしていれば、それで支払うことも可能である。また現金での支払いも可能である。わが社は作付を行った耕作地から400～500トンの収穫が得られると予測している。穀物が良質なものであれば、ウランバートル市の製粉工場が購入の意志を示している。もし、わが社の小麦が彼らの基準を満たさない場合には、小麦を家畜用飼料として販売しようと考えている。家畜用飼料を購入したいという企業は多い。

現在、耕作に詳しい農業技師の不足が課題である。かつて、この分野に従事していた人々も現在では少なくなってしまった。モンゴル国で一時期、耕作は放棄されていた。近年、この分野を専攻した農牧業大学の卒業生も少ない。また彼らの職務経験も十分なものではない。わが社では以前にこの分野に従事しており、現在では年金受給者となった人材を採用している。

野菜を栽培している企業は多いのでしょうか？

—全体的には多いと思う。野菜でもジャガイモ専門に栽培している企業さえある。

私は1990年までは地質分野に従事していた人間である。当時、モンゴル・ブルガ

リア合併の「ゴルバンゴル」という地質調査部隊があった。その部隊は 1990 年に解散された。そして私は何人かの友人と共に地質調査会社を設立したのだ。その会社は 100 人強の社員を抱える大きな会社だった。そして 1995 年にその会社と袂を分かち、現在のこの会社を設立したのだ。われわれは金鉱調査を専門的に行っている。2 ～ 3 ヶ所で金鉱調査を行い、採掘許可証を取得した。

耕作関係の業務はまったく経験がなかった。われわれが現在作付を行っている土地は 3 年前に得た。長い間放置されていたのだが、川に近いので灌漑が容易で穀物栽培に適していると考え、その土地を選択した。

鉱業分野は、一時的に利益を上げる分野であり、リスクも高い。一方、耕作は鉱業と比較してもリスクが少なく、長期的に利益を得ることが可能な分野であるとわれわれは考えている。近年、モンゴル市場には中国の低価格の野菜がかなり多く入ってきている。しかし、中国産の野菜は質が低く、食品の安全が保証されていない。収穫量を上げるために、人体に有害で強力な化学肥料が使用されている。

あなたは電話で「日本の JICA の人間とはこのテーマでは話すことはできない」とおっしゃっていましたが、どのような事情があるのですか？

——とくに格段の理由があるわけではない。JICA は様々な分野でわが国についての情報を収集している。何の目的でその情報を収集しているのか分かったものではない。収集した情報をどのような目的で利用しているのかもわれわれには知らされない。ある経済分野で調査を行う。そしてその分野の関係省庁から全ての情報、統計資料入手する。しかし、調査が実施されたその分野で日本側から何らかのプロジェクトが実施されたということを私は聞いたことがない。聞くはずもないだろう、もともとそのようなプロジェクトは実施されていないのだから。

モンゴルビジネス界の人間たちは「JICA の調査が開始された」ということを聞いて、当初、非常に奇妙に感じていた。そしてその「調査」というものが終了すると、その後は一切音沙汰がない。モンゴルの各省庁に JICA の専門家がいます。彼らが一体、何をしているのか分かったものではない。かつてソ連に KGB という危険な組織があったであろう。全世界が恐れていた時期もある。本日、貴女と話しているときも、自分が KGB の人間と話しているのか、普通の研究者と話しているのかを知る何の手だてもなかった。現在では「JICA は何のための組織なのか」と聞く人間がモンゴルでも増えている。全く事情が掴めなくなってしまった。そのために私は「JICA の人間とはこのテーマで話したくない」と言ったのだ。「いずれにしても JICA は他

のルートを使って、膨大なデータを入手しているのに、今さら彼らに何を話すのだ』
と思っただけである。それ以外の理由はない。

モンゴルの耕作分野には、大いに将来性が期待できる。都市住民の数は急激に増加している。世界各国でも食料不足が生じ、価格が上昇している。また、モンゴルの食品の安全問題は非常に深刻化している。そういった多くの事情がある。

ありがとうございました。